

艦娘満足度日本一の鎮
守府で溢れる願い

マロンex

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

周りから「日本一着任したい鎮守府」と称される鎮守府。

だがその裏では多くの艦娘が悩みを抱えていた。

人の気持ちがわからない、優しすぎる提督と言葉足らずだが純粋な艦娘たち。ある事
件をきっかけに艦娘に向き合おうと決心した提督に渡されたのは不思議なメガネだつ
た。

それ違う思いと勘違い、葛藤の末に提督は艦娘たちの本当の気持ちを理解し、問題を
解決することはできるのか？

戦闘シーンは控えめで、基本は艦娘たちとの会話をベースに進めていくつもりです。
シリアル展開主軸ではありますが、悲しい終わり方をさせるつもりはないです。
主人公は提督と一人の艦娘がベースです。

※注意

作者は艦これについての知識のほとんどを2次創作から得ており、間違い等が散見するかもしれません。生暖かい目で見ていただけたとありがたいです。
感想、ご意見気軽にください。励みにします。

三

次

疑念

光と闇

悪夢の始まり

過ち

終の始 前編

終の始 後編

無意識の拒絶

善意の対価

244 239 233 229 221 215 206 199

プロローグ

「〇〇君はもう少し人の気持ちを考えようね」

「人の気持ちを知らないで、不愉快なんだよお前」

「あなたはもう少し相手の立場に立つて考える努力をした方がいいよ」

小学生の頃から私は周りの人間に口々に似たような言葉を投げられた。

私はどうやら人の気持ちを察するのが下手な人間らしい。

そして23歳になつた今、提督という肩書きがついたがその性格？は一向に改善はしないなかつた。

現に今、

(うーんわからない、)

鎮守府内の病院、その病室のベットで気持ちよさそうに眠つている艦娘をよそにえらく神妙な顔をして考え方をしている提督が一人そこにはいた。頭を抱え、立ち上がり病室をぐるぐると回ると、また椅子に座り再び頭を抱えた。

そしてこの世の終わりのような絶望を含んだ深いため息をついた

5年ほど前、S鎮守府にこの提督が着任した。

『常に最前線で戦い、いつ死んでもおかしくないような環境に身をおく艦娘たちが少しでも幸せに過ごせる場所を作りたい』

そんな提督の心遣いもあり、S鎮守府は瞬く間に雰囲気を変えていった。
まず労働環境。

ローテーション制の無理のない出撃、遠征はもちろん、意見箱を用意し匿名での希望を出せることを可能としたことにより、常に彼女らの意見を取り入れ柔軟に対応ができる風通しの良さを実現した。

また休むことも労働の一部として、全鎮守府で初となる自由に行動ができる日、所謂、休日というものが週に二回導入された。

次に施設。

彼女らに休日を休日として活かせるよう、提督は様々な施設を建造し、外部の者を雇つた。初めは居酒屋や露天風呂など元から鎮守府にある施設の延長線上のものが多かつたが、周りの艦娘の要望を聞いていくうちに、マツサージルームやトレーニングルーム、図書館、バーなどありとあらゆる施設が建造された。

艦娘の能力は精神衛生が大きく作用されると言われている。

文句のつけようのない環境に艦娘たちは常に士気が最高の状態、加えて優秀な指揮能力を持つ提督によって艦娘の能力を飛躍的に上昇した。その甲斐あつて着任してわずか2年足らずで2つの鎮守府が協力しても突破できなかつた未開拓の海域をわずか五人の艦娘で突破することに成功。

その後も1隻の轟沈も出さずに劇的な勝利を積み重ね、初めは1桁ほどだつた艦娘も功績とともに次第に増えていつた。

当然、周りの鎮守府でも話題になり、艦娘たちの間では「日本で一番着任したい鎮守府」と称され、異動希望者があとを絶たなかつた。

そのため周りの鎮守府もこぞつて設備や労働環境を充実させ艦娘を囲もうとする異常事態が発生し、それを見かねた大本営が鎮守府全体の労働環境の水準を押し上げるほどの影響を及ぼした。

しかしそんな楽園のような鎮守府でありながら、先週、最大戦力の艦娘の一人がストレスからくるめまいを起こし倒れ、病院に担ぎ込まれた。

医者の診断によると、精神的に疲弊をしており落ち着くまではしばらく戦線に復帰は無理らしい。

おそらく普通の提督でも疑問符を浮かべてしまうこの事態に、よもやこの提督が理解

できるはずもなく、神妙な顔をしたまま、再び深いため息をこぼした。

「ここから提督視点となります

「着任して今日まで、こんなことが起こらぬよう努力をしてきたつもりだつたのだが、」
私が考え込んでいると、ドアの開く音がした。

「提督?まだいらしてたんですか?そろそろ寝ないとあしたの執務に響きますよ」

「おお、もうそんな時間か、すまない考え方をしていてつい、」

「提督はもつと自分を大切になさつてください。あなただけの体ではないんですよ?ほ
ら、帰りますよ」

明石に腕を引っ張られ、モヤモヤとした気持ちで病室を後にする。病室の時計は深夜
の2時を指していた。

(日をまたぐ前くらいにきたと記憶してたが、えらく考え込んでいたようだな、)

考えこむと時間を忘れてしまう、また私の悪い癖が出たようだ。

そんな私の表情を見て何かを悟ったのか、引いていた腕をほどき正面に立つ明石

真剣そうに、だが少し悲しそうな表情をしながら私にこう言つた。

「これだけはいつておきます。今回時雨が倒れた原因は確実にあなたです。ですがそれ
と同時にあなたのせいではないんです。これだけは時雨が目覚める前に伝えます。あ

とは自分で答えを見つけてください。」

（おいおい、それは私が一番苦手としていることだぞ、。勘弁してくれ、。）

冒頭でもいつたように、私は大のつくほど人の気持ちに対して疎い。それを隠すよう人に一倍努力をし、知識や経験を蓄えたがこの問題だけは全く進展しない。私の悩みの種だ。

明石は今にも泣き出しそうな表情をしている私を見て、大きくため息をついたあと、につこりと笑つて、こう言つた。

「まあ、昔からの付き合いですからね、提督に対しても相当な無理難題を言つているのはわかっていますよ。ですので今回は私の方からお助けアイテムをご紹介します。これです！」

「これは、メガネか？特に変なところは見当たらないが、」

「ふつふつふー。ただのメガネじゃないんですよ。名付けて『願望メガネ』です！詳しい説明は面倒なんで省きますが、まあ簡単に言つちやうと人の願望を覗けるメガネってとこですかね。そのメガネをかけて見た相手の頭の上ににいま一番やりたいこと、やつてほしいことが文字として表示されるんですよ。例えば、」

「おもむろにメガネをかける明石。

「提督はいま、もつと艦娘と話したい、ですか。意外ですね。」

「なつ!? 何故それを、。」

正直驚いた。明石が言つたこの願望は確かに私の本心であり、また着任してから誰にも言つたことのない内容だつた。

人の気持ちに鈍感な私は人一倍コミュニケーションを避けてきた。なにかの拍子で彼女たちの心を傷つけまいか、溝を作つてしまわなかいか。長年の苦い経験から無意識に艦娘と距離を置き、積極的に関わろうとしなかつた。そしてその現状を最善だとも考えていた。

だが心の奥底で、叶わぬとかをくくつていたが確かにあつた、話したい、と言う願望。それを見事に当てて見せたのだ、信じざるを得ない

「どうでしよう。少しはこのメガネのすごさわかつていただけましたか?」

「うむ、しかし、どうやつてこんなものを、?」

「ちょうど時雨さんが倒れた後くらいに、妖精さん達が突然作り始めたんですよね。普段は自主的に動くことなんてほとんどないのに、。それで今日になつてその様子を行つたら完成してたようで、渡されたんですね。」

「渡された? 賴んでいたのか?」

「いやいや、全く記憶ないです。妖精さんの開口一番に『やくにたつときがくるから。

もつとくです。』って説明書と一緒に渡されただけなので仕組みもわからないんですよね、』

「ふむ、まあ少し解せないとこころはあるが正直助かるな。ちょうど時雨が倒れてから私も他の艦娘についてもつと知る必要があると感じていたからな。神のお告げかもしない。明日からでも少しずつ頑張つていこうと思う。明石、ありがとうございます。本当に感謝している。』

「気に入つてもらえて何よりです。はい、これメガネです。提督のことなのでないとは思いますぐれぐれも悪用は厳禁ですからね。後それから、』

そう言いかけた明石だつたが私の嬉しそうな顔を見て言葉を引っ込めたようだつた。
（何か言いたげだつたようだが、まあ詮索しないのが無難だろう）

おやすみとお互いに別れの挨拶をした後、ふと明石がどんな願望を持つてているのか気になり、悪いとは思うが背中越しに確認した。

（ううむ、早くも故障だらうか、それとも見間違いか？）

明石の頭の上には一言『愛されたい』と書かれていた

（ううむ、早くも故障だらうか、それとも見間違いか？日々の様子を見ても明石がそんなことを望んでいるようには思えなかつたのだが、）

私は深く考えずその場を後にした。

曙の願い

決意

『秘書艦ローテーション制度』

この制度が我が鎮守府で普及し始めたのは3年前のことである

—3年前

我が鎮守府では艦娘の幸せが第一をモットーにしていたため、当時一般的であつた秘書艦という制度は廃止し、全て私一人で業務を行つていた。しかし戦績に比例して増え続ける艦娘の出撃管理や遠征管理や、それに伴う事務作業等により日に日に業務量は増えていき、ついには勤務時間内では手に負えない量にまで業務が増えていた。しかしそれでもなおこの業務形態を貫き、連日にも及ぶ徹夜で処理をし増えた業務をカバーしていた。だがそんなもの長く持つはずもなく、ある日私は疲労でぶつ倒れてしまった。

日本一の人気を誇る鎮守府の提督が疲労で倒れた、という事実を重く受け止めた大本營は直々に秘書艦制度の復活を命じ、つけない場合は処罰の対象とするとの異例の手紙が送られてきた。仕方なく希望制という形で秘書艦をつけることにした。
 （まあ、わざわざ私の手伝いをしたい物好きはそういうないだろう。大本營の命令の手前、

形骸的にでも制度としてあることを報告しないといけないしな。一応このような形にして今後も私ができるように考えなくては、」

しかしそんな私の考えとは裏腹にこの通達を出した僅か30分後には執務室に秘書艦を希望する艦娘達の大群が押し寄せ、收拾がつかなくなる事態となつた。

見かねた私が全艦娘の提督代理育成と事務能力の向上を口実に現在のローテーション制を発案した。艦娘の皆がこの意見に合意したためこの制度が取られるようになつた。

秘書艦ローテーション制度は實に単純明快。提督が一ヶ月ごとにカレンダーの日付の下に艦娘の名前を書く。

そこの日付の下に名前が書いてある艦娘がその日の秘書艦となる。

月初めに執務室の前にそのカレンダーを張り出され、それを見て艦娘達が秘書艦を把握するというシステムだ。

このような経緯があり、我が鎮守府では独自の秘書艦制度が普及した。
一執務室

カレンダーの本日の日付には「曜」の文字。彼女が本日の秘書艦だ。

「・・・なさいよ！。起きなさいってば！」

時刻は8時少し前、執務開始のギリギリに起こしにきた曜に足で踏まれ、ようやく私

は目を覚ました。

「んあ？ もう朝か、くそ、全然寝られなかつたな、」

氣だるい体を無理やり起こし執務室の横についている洗面所で顔を見ると、私の目の中には大きなクマができていた。結局明石と別れた後、私はまた時雨について考え込んでしまい、気がついたら明け方になっていた。

(7時前には寝たとは思うのだが、記憶がないな)

まだ意識も定まつてない私が顔を洗つていると、彼女は隣にたち、タオルを渡してくれた。

曙「つたく、またなんか考え込んでたわけ？ひどい顔よ。どうせ先週の時雨の件でもうじうじ悩んでたんだしょ。シャキッとしなさいよ。朝食はあんたがグース力寝ている間に持つてきたわよ。食べてから執務にしなさいよね」

タオルで顔を拭き、視線を机に移すと綺麗に海苔が巻かれたおむすび2つに、崩れかけの卵焼きと少し焦げた焼き鮭、そして具なしの味噌汁が湯気を立てていた。

「曙、これはお前が作つてくれたか？だとしたら悪かった。私が寝坊したせいでお前の手を煩わせてしまつたな」

曙「へ、そうよ。朝の少ない時間をあんたなんかに割いたの。反省なさい」

そう言い終えた彼女の顔は次第に曇り、ついには黙つてその場に立ち尽くして考え方を始めてしまった。

(精一杯の謝罪をしたつもりだつたのだがな、。よくわからないが気まずい、。空気を変えなくては)

「、しかしよく私が悩んでいる内容がわかつたな、流石としか言いようがない」

取つてつけたような褒め言葉であつたが、再び彼女はいつもの調子で話し出した。

曙「ふん、何年ここにいると思つてるわけ? 嫌でもあなたの行動なんてわかるようになるわよ。それより早く食べなさいよ、時間が押してるのよ」

彼女は横目で私を少し見つめると、すぐに目を逸らし、俯きながら私が朝やろうと思つていた書類の整理を始めた。

完璧な先回りである。どうやら私が執務前にやる行動を熟知しているようだ。

「うーむ、曙にだけは隠し事できんな。あつこの卵焼きうまい、俺の好みだ」

私は朝食を食べながら彼女を見つめ、小さく呟いた。

綾波型8番艦 曙。私が着任してまだ間もない頃から支えてもらつてある超古参の艦娘だ。

2年前の未開拓海域の奪還作戦時も編成されていた五人のうちの一人でもあるため、周りの駆逐艦からは『伝説の5艦』として日々尊敬と憧れの対象となつていた。

そんな彼女だが気のせいか、年を重ねるごとに次第に元気が無くなっているように見受けられた。また2年前に比べ口数も減り、言葉に霸気がなくなつたようにも感じる。よく行動と共にしている潮や漣にも聞いてみたが思い当たる節がないというし、当然私がわかるはずもない。なので現状はひとまず様子を見るにしていたのだが、。

「ごちそうさま。とても美味しかつた。後片付けは私がやるから先に書類に目を通しといてくれ」

「、わかつたわ。早く帰つてきてよね、書類は山積みなんだから」

「もちろんだ、すぐに戻る」

そう言つて私は執務室を出て、食堂に向かつた。食堂で間宮に意味ありげに感想を聞かれた。

曙に申し訳なさを感じたが、美味しかつた。とありのままを伝え、なぜか猛烈に怒られた、わからん、あとで謝るようについて言われたがなにを謝ればいいのか…。

食堂からの帰り道、先ほどのことを考え込んでみるとふとあの言葉が浮かんだ
—今回時雨が倒れた原因はあなたです。

(どうか、そうだよな。わからないなら聞くしかない。

今日から少しづつ頑張るつて決めたじゃないか。)

食堂から戻り、執務室の扉の前で深く深呼吸をした。

(大丈夫、お前ならきっとやれる、大丈夫、)

ずっと避けてきた艦娘とのコミュニケーション。

今までの私なら無理であつたがいまはこの不思議なメガネがある。

扉を開けると、曙は書類に目を通していた。ゆっくりと歩みを進め彼女の座る机の正面に立ち、勇気を振り絞つてこう言つた。

「執務を始める前に少し話がある」

私は艦娘 曙と真正面から向き合うことを決めた。

決意その前に（艦娘視点）

一曙が秘書艦の日から遡ること二週間前

その日は秘書艦カレンダーの公表日であつた

月初めに発表される恒例の秘書艦発表の日である。朝8時にはいつが秘書艦予定カレンダーを執務室の前の廊下に張り出し、青葉が写真をとり艦娘専用のコミュニケーションサイトにアップする。艦娘たちは直接張り出された紙を見に行く、ネットでサイトを見るかの2パターンで、それを確認することができるようなっている。

正直、直接見に行くなんて行為は恥ずかしくて到底できないのでこのシステムにはとても助かっている。

100人はいる艦娘がローテーションで指名されるこの制度は、単純に4ヶ月に1回ほどペースでしか秘書艦は回つてこない。大抵の艦娘なら選ばれたら嬉しい、くらいの感覚レベルの日だろう。だが私のように普段からあいつに対しきつい言動をとつてしまふ艦娘にとっては素直に好意を伝えられるかもしれない唯一の日となる。だから一部の艦娘たちにとつては第一志望校の合格発表日よりも重要なイベントとなつている。

私が最後に秘書官に選ばれたのが丁度5ヶ月前。いつもなら先月には確実に選ばれていたのだが、先月のカレンダーに私の名前はなかつた。ネットでカレンダーを何度も確認し、それでも信じられずバレンタインのように一人で直接見にいきもしたが、やはり私の名前はなかつた。

（前回秘書艦の時に、きつい当たりしちやつたからかな……それとも出撃の時に作戦をなじつたから……？）

考えれば考えるほど思い当たる節が多くすぎて嫌になる。

発表されてから目に見えて落ち込んでいた私を同じ部屋の潮と漣は何かあつたのではと心配してくれた。

「ふ、ふん。なんでもないわよ、本当になんでもないってば……」

と強がりはしたが、目に見えて動搖していたため余計に心配された挙句、我慢できず泣いてしまつた。

結局、二人にだけは真実を話したのだった。

（今回こそは私の名前がありますように……）

私は部屋で、潮と漣とともに、部屋のベッドで携帯の画面が更新されるのを神に祈る気持ちで待っていた。時刻は8時丁度。何度もサイトを読み込み直し、握るスマホにはじんわりと手汗がついた。再度読み込み直すとサイトからピコンと通知音があり、今月

のカレンダーがアップされた。

11月

2 吹雪 3 金剛 4 加賀 5 時雨 6 曙 7 明石 :

「いしょっしゃああああ!!! 秘書艦きたー!!」

大きくガツツポーズをし、念のため何度も画面を確認しては、本当に選ばれたことを
囁み締め、喜びに浸つた。

潮 「曙ちゃん、よかつたね！」

漣 「だから私言つたじやないですか！ご主人がボノたんを見捨てるはずがないって

！」

曙 「ボノたん言うな！でも… そうねありがと。今回こそは頑張つて挽回するわ」

先月の秘書艦発表の日、子供のようにわんわん泣いてしまった私を、普段は私に対し
て軽口を叩く漣が胸を貸し、背中をさすってくれた。潮も泣き止んだ私にホットミルク
やら好きなお菓子を持ってきては普段あまり話さない口で必死に動かし、私とお話しし
てくれた。そんな二人の優しさに触れ、その日からはこの二人にだけは少し素直に感情
を出せるようになつた。

現に今回も、秘書艦に選ばれるのか不安だから発表と一緒に見て欲しい、と私から二
人にお願いして、いまに至つてゐる。少し前の私なら卒倒してしまふレベルの偉業であ

る。

潮「でもよかつた。曙ちゃん先月から元気なかつたから久しぶりにそんな顔見られて私も嬉しいよ」

漣「そうですね、あの日以来、落ち着きはしましたが、やはり普段のような覇気を感じられませんでしたからな。私もとりあえず一安心ですぞ。」

曙「私も割り切つたつもりだつたんだけどね。心配させちゃつて悪かつたわね」

漣「それにしても、あの時の泣き顔はぜひ青葉殿に写真を撮つてもらいたかつたですぞ。伝説の5艦、誰からも尊敬される強気な駆逐艦のボノたんが、あんなに弱々しくなるなんて……。ギヤップ萌えで漣が男だつたら完全に落ちてましたよあれ。」

曙「あ、あんた！あいつにのこと言つてないでしようね！」

漣「さて、どうですかなあ。漣は水素よりも軽い口で有名ですし……つていはい！いはいよほノたん！」

曙「マジで言つてたらこれじやすまないわよ！どうなのよ！」

私は漣のほつぺを両手で引っ張つて尋問した。必死に抵抗する漣だが練度の差が物を言い、全く逃げることができない。

潮「もう、喧嘩はやめなよ二人とも、でも提督にも実は聞かれたんだよね。曙が元気ないから何か知つてるかつて」

曙「え!? 嘘でしょ!? あいつに!?

引つ張っていた両手を離し、潮に詰め寄る。

潮「本当だよ。でも大丈夫。私も漣もわかりませんって言つてあの日のことは何も言つてないし、提督も原因は全くわかつてないようだつたしね」

曙「…まあ、少し複雑だけどよかつたわ。と言うかありがと隠してくれて。」
正直口を聞くことはおろか、顔を合わせることすら少なくなつていた私をしつかり見ていてくれたことには驚いたし嬉しかつた。おそらく艦娘の管理と言う業務の一環だろうがその事実だけでも今の私には十分だつた

漣「乙女の秘密を守るのは当然の義務ですよ。でもさすがご主人様ですぞ、今回の件もここ1ヶ月のボノたんの戦績を見て違和感に気がつくとは… 私達以外で気がついている艦娘すら少数だつたというのに。そもそも出撃や遠征でのミスやらなんやらを月単位で見直して100人以上の艦娘の健康を管理する、なんて常人じや考えられませんな」

潮「そうだね、まるでデータを元に艦娘の精神状態を見るんじゃないかつてレベルで私たちのことよく考えてくれるよね。この前初めて秘書艦やつたけど、正直もう2、3人はつけていい業務量こなしてるよ、あれは…」

曙「あいつのモツトーは私たちの幸せらしいしね。私だつて昔そんなことして負担増

やすなら、直接話すのが絶対早いって言つたけど『男の私に色々と言いくることもあるだろうしな。それにデータは嘘をつかん、これが私なりのスタイルなんだ』って突っぱねられたわ。あいつはあのやり方が自然なんですよ』

漣「なんだかんだご主人様のことを心配してたんですね。さすがツンデレジェンドですぞ」

曙「し、心配なんてしてないわよ、ただあいつがまた倒れたら鎮守府のみんなが悲しぐやうと思つただけで…。てかその呼び方やめなさいよ、はつ倒すわよ」

潮「まあでも、選ばれたからには頑張つて提督に嫌いじないこと、アピールしないとね」

漣「そうですぞボノ坦ん！あくまでこれはスタートライン、合法的にご主人様を独占できる日なんて機会滅多にないですぞ！」

曙「が、頑張るつたつてなにをどうすればいいのかわかんないし、」

潮「簡単だよ。提督の業務を全力でサポートして、楽させてあげればいいんだよ。提督の行動パターンとか事務処理能力は他の艦娘よりも歴が長い曙ちゃんの方が上だしね」

漣「あとは私たちに接するように：まではいかないにしろ少しでもそつけない態度を取らないようにするべきですな。それだけでも印象は全然変わると思いますぞ」

曙「なるほど、そうね……。潮、漣、本当にありがとうございます、私今回こそは成功させるわ」
 それから二週間、秘書艦の日まで、私はあいつの業務内容や行動パターンを紙にまと
 め念入りに覚えた。潮と漣はどうやつたら自然に接することができるのか、鳳翔さんや
 金剛さんにそれとなく聞いてリストしてくれたり、あいつの好みの食べ物や趣味を聞き
 出したりしてくれた。

そしていよいよ秘書艦の日、当日。

（服装よし、髪型よし、逃げるな私。リストも持ったし、業務内容や行動パターンも叩き
 込んだ……やれることは全てやつたんだあとは私の気持ち次第……）

鏡を見ながら念入りに確認をして、大きく深呼吸をした。

曙「よし、じゃあ行つてくるわ」

潮「頑張つて曙ちゃん。曙ちゃんなら大丈夫だよ」

漣「ご主人様のハートをキヤツチしてくるんですけど、ボノたん」

曙「ボノたん言うな、てかそんなんじやないし……。でもありがと、行つてくるわ」

部屋の扉を開き、曙は一人、2人に見送られながら戦場に向かうかのような足取りで
 執務室に向かつたのだった。

決意（艦娘視点）

（まず書類の整理、それから午前中までに資材の確認と作戦の見直しをして午後からは…）

私は二週間みつちりと頭に叩き込んだ業務内容を頭の中で復唱しながら執務室に向かっていた。時刻はまだ7時ちょっと過ぎ。執務開始が8時だから少し早く来てしまった気もするがほかの秘書艦をやつた子からの情報だとあいつは7時前には起きているとの事だつたのでまあ大丈夫だろう。

ーコンコン

執務室と書かれた扉を軽く叩き、扉を開いた。

「ひ、秘書艦の曙よ、今日はよろしく頼むわ！」

しかし、その呼びかけに返事はない。中をみるとスヤスヤと寝息を立てて眠っているあいつの姿が見えた。

（やっぱり嫌われてるのかな…。いつもなら起きてるって聞いたのに…）

最近やたらネガティブ思考に陥る傾向がある。なんとなく心に不安が引っかかるつているような不思議な感覚。そのモヤモヤが私をそのような思考に至らしめている感じ

がする。

しかしそれは杞憂であることにはすぐに気がついた。目の下にはひどいクマ、寝てる場所も布団ではなくソファだし、何より電気が点けつ放しであつた。大方考え方をして寝落ちしてしまつたというところだろう。

（先週の時雨の一件からろくに寝てないのかしら。昨日はやつと落ち着いたから見にいったつて聞いたけど……）

先週の水曜日くらいであつただろうか、我が鎮守府の最大戦力の一人、駆逐艦 時雨が倒れてしまつた。遠征の結果報告をしている最中に起きた突然の出来事であつたといふ。原因は今のは不明だが、軽いめまいによるもので、特に命に別状はないらしい。

その時、秘書艦をやつていた榛名の話によると、あいつは倒れた瞬間、読んでいた書類を放り投げ、急いで彼女を抱きかかるとそのまま鬼のような勢いで医務室に連れて行つた。とつきの行動にあつけにとられていた榛名も後から急いで医務室に向かうと、ベットに横になつた時雨と、医者に必死に無事かどうか確認するあいつの姿があつたといふ。

榛名「提督の狼狽した姿なんて初めて見ましたが、本当に感激してしまいました……私たちのこと、道具ではなく、人間として大切に思つてくれてるんだなつて……」
あいつはあまり艦娘と積極的にコミュニケーションを取らないことで有名だ。とい

うか避けてる感じがするレベルだ。

だが不思議と彼に対しても不思議を持つものが少ないのでこういった行動の積み重ねがあるからだろう。

（にしてもどうするかな…。まだ執務前だし起こすのもかわいそuddash;。そうだわ！これよ！）

素直の極意その1『女たるもの料理で語れ』

潮と漣のリストに入っていた言葉を思い出し、早速行動に移すこととした。

一間宮食堂

間宮「あら、朝早くから珍しい。ごめんなさい、まだ仕込み中なのよね」

大きな厨房の奥からすつと顔を出したのはこの食堂の料理長兼オーナーの間宮さん。ここ間宮食堂は鎮守府内の艦娘のほとんどが利用する場所で、間宮さんと伊良湖さん、それに各地方からきたコツク見習いをあいつが雇い、常に30人以上で料理を提供している。ここでは以前あつた食券制を廃止し、席の机についているタッチパネルでの注文制をとつており、料理が出来上がりセルフで取りに行くシステムを採用している。席さえ確保できれば、待ち時間や売り切れ、壳筋の料理、栄養価などの情報がタッチパネルから確認でき、大変好評である。

また出されるものは味はすべて一級品、既存の料理に加え、和風洋風中華、庶民的な

料理や最新のスイーツ、期間限定で旬の料理を使つた料理など多種多様なメニューがあり、その数は実に100種類以上。

こうなつたのもあいつが『栄養が偏らなければ、可能な範囲でメニューの追加を隨時行う』

と宣言し、艦娘たちの希望を聞き入れ、間宮さんたちと相談しながら追加していく結果で、現在もメニューは増え続けている。

「違うの、今日は：その・て、提督に朝ごはんを作ろうと思つて。でも時間ないから手短にできるのを教えて欲しいの…」

間宮「あらあら、こんな可愛い子の手作り朝食が食べられるなんて、提督つたら羨ましいわあ」

「ち、違う、そんなんじや！朝食抜いて執務に支障をきたしたら私が困るつて思つただけで…」

間宮「はいはい、曙ちゃんは本当優しいわねえ」

「だからそんなんじや…」

間宮「とりあえずこつちにいらしやい。時間もないことだしシンプルでオーソドックスなメニューにしましよう」

間宮さんに呼ばれ、厨房の中へ。中にはいり手を洗つてている間に用意されていたもの

は卵、味噌、シャケ、海苔とご飯だつた。

間宮「作るのは卵焼きと、お味噌汁、おにぎりと焼きジャケつてとこかしらね。」

曙「わかつたわ。間宮さん、じやあまづは卵焼きから……」

間宮さんに教わりながら、おぼつかないながらも執務前ギリギリには一通り完成させることができた。

「あとはこれを持つていくだけね。うーんでもこれ全体的に不恰好……」

間宮「大丈夫よ、曙ちゃんが一生懸命作つたことに意味があるんだから。提督もきつと喜ぶわ」

「ありがとう、間宮さん、じゃあこれ少し借りるわ」

間宮「はーい。後で感想聞かせてねー」

間宮さんに見送られ、両手でお盆にのせた朝食を運びつつ、軽く会釈をして食堂を出た。

執務室に入ると、まだあいつは寝ていた。私は机の上にお盆を置いて、叩き起こした。
「起きなさいよ！起きなさいってば！」

足で寝ている提督を小突く。

提督「んあ？ もう朝か……くそ……全然寝られなかつたな……」

そう言うとあいつは、ゆっくりと起き上がり、よろよろと洗面所に向かつた。

素直の極意その2『好きの気持ち、言葉が無理なら行動で示せ』

(きたつ！嫌つていないことと気がきくところを同時にアピールできるチャンスだわ
！)

自然にあいつの横をとり、用意されていたタオルを渡した。よし、朝食持つてきたこと伝えるきっかけもできた。

曙「つたく、またなんか考え込んでたわけ？ひどい顔よ。……どうせ先週の時雨の件でもうじうじ悩んでたんでしょ。シャキッとしなさいよ。朝食はあんたがグースカ寝ている間に持つてきたわよ。食べてから執務にしなさいよね」

そう言うとあいつは執務室の机を見た。最初は少し嬉しそうな顔をしたもの、すぐに困った顔になり、私の方を見た。

提督「曙、これはお前が作つてくれたか？だとしたら悪かつた。私が寝坊したせいでお前の手を煩わせてしまつたな」

「、：、そうよ。朝の少ない時間をあんたなんかに割いたの。反省なさい」

(そこ)は嘘でもありがとうとか嬉しい、つて言つてほしかつたな。謝罪されるくらい距離置かれて、警戒されてるつてこと？……。朝から張り切つて、舞い上がつて、なんかバカみたい……）

どんどんと自分でも訳のわからない負のループに陥っていると、あいつは気まずそう

に椅子に座り朝食を食べ始めた。そして等々に重たい口を開いた。

提督「…しかしよく私が悩んでいる内容がわかつたな、流石としか言いようがない」
(そ、そうよ、たとえ距離が置かれていようと、嫌われていようとあいつを昔から支えてきたのは事実よ、自信を持ちなさい私！)

「ふん、何年ここにいると思つてるわけ？嫌でもあなたの行動なんてわかるようになるわよ。それより早く食べなさいよ、時間が押してるのよ」

提督「うーむ、曙にだけは隠し事できんな。あつこの卵焼きうまい、俺の好みだ」
(情報通りあいつは甘めの卵焼きが好きなようね。練習をした甲斐があつたわ。漣と潮には後でお礼を言つとかないとね)

小さなその声を聞き逃さなかつた私は、食事をする提督から見えないように小さくガツツポーズをした。間宮さんには砂糖の量を間違えた、と嘘をついてしまつたが、あいつ好みにできてよかつたとホッと胸をなでおろした。

提督「ごちそうさま。とても美味しかつた。後片付けは私がやるから先に書類に目を通しといてくれ」

出された朝食をきれいに平らげると食器を重ね立ち上がつた。美味しかつたんだ。
何だろうすごい嬉しい。

「…わかつたわ。早く帰ってきてよね、書類は山積みなんだから」

嬉しさの反動で、少し本音が出てしまい慌ててとつてつけたような言い訳をしてしまった。今どんな顔をしてるんだろうか、恥ずかしい。

提督「もちろんだ、すぐに戻る」

そう言うとあいつはお盆を持つて、静かに執務室を後にした。私は一人黙々と書類を整理し、考え方をしていた。

（やっぱり違う、これは私の勘違い。あいつは私のこと嫌つたりなんかしてないわ。不安なら聞けばいい。私としたことが何をうじうじしてたのかしら）

扉を開く音、あいつが帰ってきた。すると何を思つたのか、ゆっくりと歩みを進め私の正面にきた。

提督「執務を始める前に少し話がある」

その呼びかけに横目であいつを見る。普段の困り顔ではない、真剣な顔がまっすぐに私を見ていた。

私は不安で震える手を必死で抑え、書類を置き、彼を見る。

（今度こそ素直になるんだから）

私は提督と正面から向き合うことを決めた。

すれ違い 前編（提督視点）

曙「は、話つて何？執務時間なんだからくだらないことは後にしてよね」「話というのはその…なんだ、最近どうだ？」

（なんだそれ、何も考えてなかつたとはいえお前は久々に娘に会うお父さんか）面と向かつて話すとは決めたが、内容もろくに決めずに話し出したため、自分でもよくわからない質問をしてしまつた。

そんな私の様子を見て、ため息をつきながら彼女は口を開いた。

曙「どうつて…。別に何も変わりないわよ。遠征、出撃共に安定してゐるし、艦娘の被害も最小限。新海域もそう遠くはないと思うわ。本当、提督の指揮さまさまね」「いや、すまん。そういう話ではなくてな…」

曙「あー！もうじれつたい！何が言いたいわけ？」

（まずいな、かなりイラつかせてしまつてゐる。これはもういきなり本題に行くしかないな）

「うむ…話というのはな、曙。その、勘違いだつたら申し訳ないが最近元気がないといふか、何か悩んでいるように思えてしまつてな。もし私に話して解決できることがあれ

ば力になりたいと考えているんだが、何かあるか？」

そういうと彼女は少しの間だけ、困ったような顔をし、何かを考えているようだつた。
しかし何か思いついたのか少し嬉しそうにこう切り出した。

曙「……そ、そうね。特には思いつかないけど：強いていうなら最近だれかとゆつ
くり話す機会が少ないわね。私こう見えておしゃべりなんだからそういう時間は大切
にして欲しいわね！」

「ふーむ……それは出撃や遠征が多くてなかなか人と話す機会がなくていや、というこ
とか？ そういうえば最近緊急出撃や欠員補充の遠征に曙を使う機会が多かつたな、それは
私の管理不足だ、すまんな」

（確かに最近、よく曙を頼つてしまつっていたな、最古参で信頼をおいていたとはいえ少し
甘え過ぎていたのかもしれない。親しき仲にも礼儀あり、少しこの体制も見直す必要が
あるな……）

曙「なんでそこで謝んのよ……。でもその代わり……ね、その埋め合わせというか：
そういうのも必要じやないかなつて。こここの鎮守府、設備はもちろんんだけど、近くに娛
楽もたくさんあるしね。実は私、遊園地とか動物園行つたことないし少し興味あるのよ
ね」

そう言うと、彼女は私の方をチラチラとみては何か物欲しげに訴えかけている。なぜか少し頬も赤い気もする。

「なるほど……。正直に言つてくれてありがとうな、曙。よくわかつた。では埋め合わせをするとしよう」

曙「え？ 本当に！ ジヤ、ジヤあ…… 近いうちに私とゆ……」

「早速だが曙には本日より2日間、休日を与えるよう。もちろん緊急出撃や遠征はなし！ 完全なる休暇だ。その間に曙がやつていた業務は私が責任を持って請け負おう」

曙「きよ、今日？…… でもそれって今日の秘書艦もなしつてこと……？ それじゃあ……」

「安心してくれ、本日の業務は私一人でも十分に回せる量だしな。朝起こしてもらつたり、朝食を作つてもらつたりと迷惑をかけた件の精算もしたかつたし今日の秘書艦はなしとするよ」

曙「で、でも私一人でお休みもらつたつて話す相手すら……」

「もちろんそこも考慮しよう。この紙と一緒に休暇をとりたい子の候補を3人まで書いてくれ。私の手腕と他のものの予定にもよるができる限りその子も一緒に休めるように休暇を手配しよう。」

私は得意げに机から休暇申請希望の紙を取り出し、曙に渡した。受け取った彼女はまだ不安そうな顔をしている、私はさうに続けた。

「安心しろ、そんな顔してることとは、自分が抜けた穴が影響しちゃうんじやないかって思つてるんだろう、大丈夫だ。最近は教育にも力を入れていてな、曙の手を借りずっとも実は回せるようになつたんだ。……まあ本当にここ一週間ほどのことなのだが……ともあれ君はなんの気兼ねもなく休めるつてことだよ。本当に今までありがとう。感謝している。これはほんの少しではあるが私からの礼だ。」

（ふつ、少し臭いセリフだったかな。まあいい。しかしあれだな、話して見るものだ。こんなにあつさりことが進むなんて。このメガネも必要なかつたな。あ、でも正直秘書官がいなくなるのは業務量的に厳しいな・あとで他のものにお願いするしよう）

優しい笑みを浮かべ、彼女の肩に手をおく。彼女は心なしか震えているようだ、そんなに嬉しかつたのか？

曙「……わかつたわ。あんたがそれを望むなら……私はそれを受け入れるわ」

「う、うむ。ではこの紙に名前を書いて今日中に私のところに持つてきてくれ。急ぎで申し訳ないができるだけ早めに頼むぞ！ゆっくり休んでこいな」

彼女は何故かトボトボと重たい足取りで扉に向かつて歩き出した。何回かの方を見ていた「本当にいいの？」と言つた目で私を見てきた。無理もないか、今までこんな待

遇したことないもんな。遠慮してしまうのも無理はないか。

だがしばらく私が無言で眺め続けていると、観念したのか手をぎゅっと握り、ガツツボーズ？をして部屋を出て言つた。

まつたく昔から素直じやないやつだ。

（うーむしかし思ひ立つたら吉日というが、流石に急すぎたかもしだんな。そういえば訓練生時代の旧友ががここら辺に来ていると風の便りで聞いたな……。どれ、なんだか会話もスムーズになつた氣がするし、久々に連絡を取つて施設のことでも聞いて見るか）

私はこのとき曙のとんでもない地雷を踏み抜いていたのだが、そんなこと知る由もなかつた。

すれ違い 後編

一女提督視点

突然の電話、相手は提督だつた。私は不自然に早く取らないように、少し置いてから、ゆっくりと携帯を耳元に寄せた。

「はーい、もしもし、あんたから連絡なんて珍しいわね。どうしたの?」

『いやな、近くにきていると風の便りで聞いてな、聞きたいこともあるから連絡とつただけなんだが』

「あーなるほどね。そうよね、あんたがなんの用事もなく連絡よこすわけないものね。で、聞きたいことつて何よ?』

『相変わらずなんかトゲのある言い方だな……。聞きたいことつてのはその辺、施設といふか、遊ぶところたくさんあるだろ?なんか女性目線で見て楽しそうなところとかを教えて欲しいんだよ』

「女性目線で……?あんた、か、彼女できたとかじやないでしようね!!誰よ!まさかついに艦娘に手を出したの!?」

思わず大声を出してしまつた。訓練生時代から浮いた話の一つもない、と言うか私以

外の女は寄り付こうともしないような悲しき男から突然女を匂わせる発言が飛び出したのだ。驚くなと言う方が難しい。

『違う違う、実はな自分の艦娘の1人に休みを取らせてな、その子が休暇を楽しく過ごせるように一応こちらからモリサーキしておきたいと思つていてな……』

「あー、そうゆうこと、そういうやあんたの鎮守府、休日制度あつたものね。でもなんでこの子にだけそんなにするのよ。休暇なんてあんたの鎮守府ならだれかは必ずとつてるでしょ」

『まあ、そうだな。まずはこうなつた経緯から話すべきかな……』

そこからあいつはその曙つて子に悩みがあるか聞いたこと、そこから休日を与えた一連の流れを嬉しそうに語つていた。外野から聞いてる私ですら悲しくなつてくる見当違いの優しさ、ダメだこいつ、昔から何も変わつてない。

「…………。あんたそれまじで言つてんの？……その子どんな反応してたのよ」

「どんなつて……喜んでたさ。まあ真面目なやつだからはじめは秘書艦はいいのかとか、1人で行つてもしようがないとか言つてたけどな。最後の方なんか嬉しすぎてガツツ p.」

「もういい分かつた、そして決めた。こここの近くの遊園地のチケットが2枚、今ちょうど私が持つてるわ。これ今から送るから明日にでもその子誘つてあんたが行きなさい」

「は、はあ!? なんだよ突然! せっかくのあいつの休日を台無しにしたいのか? さつきも言つたように休暇は他の子も同時に取れるようにしてあるんだ、そつちを優先するだろ?」

「それで他の子優先するつて言うならいいわよ、チケットは捨てちゃつてちょうどだい。でも予言してあげる。その子必ず休暇申請は空欄で出してくるわ、もしかしたら休暇なんていらないつて言い出すかもね。」

『そんなわけないだろ、なんなんだよさつきから』

「なんでもよ、そこまで言うなら私の予言当たつたらあなたからちゃんと誘いなさいよね。あ、証拠として遊園地行つた後の写真も忘れずに送りなさい。あなたの事だから変に言い訳作つていかないかもだしね。じやあせいぜい頑張りなさいあほ提督』

『あ、待て話はまだ』一ピッ

あいつが話している途中で私はしごれを切らして切つてしまつた。

「つたくあいつは……どうやつたらああいう思考回路になるか逆に知りたいわよ!」

少しむくれてゐる私を、まああと落ち着かせる大鳳。それに甘え、ひとしきり私が愚痴を言いまくるのを黙つて聞いていた彼女だったが、しばらくすると少し曇つた顔で私に問い合わせてきた。

「よかつたのですか?あのチケットはあなたが誘う予定で買つたのでは?とても楽しみ

にして いた ように 見られた ので…」

「いいの よ、あんな チケツ といつ でも 手に 入る わ。それに 私が 思いつき で 使う よりよつ
ほど 有意義 な 使い道 で 後悔 なんて ない わよ」

「そう…ですか…。あなたが あの 提督 を 本當の 意味 で 好いて いるのは わかります。で
も…」

「でも、何 よ 大鳳。いいの よ、私の 願い は あいつ が、あいつ の 周り に 含め て 幸せ に なる 事
よ。でも 今 の 話 だ と、曙ちゃん て 子 は 今 確実 に 悲しん でる わ。あいつ の 周り の 幸せ の た
め、その 延長線 上 の 行動 の 最善 が これ だつた つてだけ よ」

「幸せ…ですか。私には あの 鎮守府 は 提督 含め と ても 幸せ そ う に 見えます が…」

「本當の 幸せ なんて さ、大鳳。そん な 側 から 分か る ような 単純な ものじ ゃない よ。人 に
は それ ぞれ 幸せ の 形 が あつて、その 瞬間 を 手 に 入れる ため に 多く を 経験 して る。それ
は 富や 名声 から ほんの 些細な こと まで、違ひ は あつても 優劣 は ない、その 人に とつてど
う か で 決まる んじ ゃない かな。例え ば、ほらつ」

私は 大鳳 の 手 を 強く 引つ張り、彼女 を 胸に 抱き寄せ ぎゅつと 包み込ん だ。唖然 として
いた 彼女 だつた が だんだん と 力を 緩めて いき、そつと 私に 身を 委ねた。

「そう：ですね…。何と無く言いたいことがわかりました。私今、多分あなたが思つて
いる以上に幸せです。」

「頑張りなさい、優しいけどアホな提督さん。私の初恋相手なんだからこんな事で逃げたりしたら承知しないわよ」

私は彼のいるであろうと奥に見える鎮守府を眺め、小さく呟いたのだつた。

一曙視点 執務室近く廊下

手に持った休暇申請希望書を持ちながら、私は1人、とぼとぼと歩きながら考え方をしていました。

「一迷惑をかけた清算もしたいし」

「一曙の手を借りずとも実は回せるようにな

(やつぱり、私嫌われてるんだろうな…： あんな距離の置かれ方したら嫌でも分かるわ
よ)

どうしてこうなつてしまつたんだろう。

他の子のように素直に気持ちを出せたら変わっていたのだろうか。

少しでも本音をありのまま話せてたら誤解も生まれなかつたのだろうか

（でもこれでいいのよ、私が望んでいるのは、私の幸せじやない、あいつの幸せよ。それがどんな形になろうと受け入れるつて決めたじやない）

あの休暇の話を出され嬉しそうなあいつの笑顔を見たとき、私は決意した。いつまでもしがみつかないと、どんな関係であれあいつを思つた行動をしようと

「……わかつたわ。あんたがそれを望むなら……私はそれを受け入れるわ」

今にも泣きそうだつた、だけど私は必死にこらえた。だつてあいつはどんなに私のことが嫌いだつて、どんなに距離を置いていたつて私が悲しめば、どんなに私が憎くつたつて一緒に悲しんでくれる、私が泣けばきっと嘘でも優しく接してくれる。そんな奴だつて知つていた。

だからこそ、あいつには一番あいつが自然な距離で接することができるいまの状況を受け入れよう、そう思つて出た言葉だつた。

（廊下でずっと悩んでたけど……やつと気持ちの整理ができたわ。私はこの現状を受け入れる。それが最善。漣と潮でも誘つてゆつくり羽を伸ばそうかしら……つてあれ？）

自室に戻ろうとした時、ふと榛名が執務室に向かうのが見え、私は反射的に彼女の後を追つてしまつた。

彼女は執務室に入ると、提督の横で書類の整理を始めた。

「・・・まないな榛名。もしかしたら明日・・・」

「いえ！・・・お役に立てて・・・どこい・・・」

ドア越しに覗くように見ていたので、会話はよく聞こえないが、一つだけはつきりとわかることがある。

（これって・・・。秘書艦の業務・・・よね。私がいなくなつてすぐ榛名に頼むなんてね・・・。実際に見ちゃうとキツイわね・・・）

覗いているのに気がついたのか、あいつがこちらを見た。逃げようとしたが私はいまの状況のショックで動搖してしまい、思わず尻餅をついて転んでしまった。

「あ、曙か？大丈夫か、そんな変な体勢で転んで、捻挫とかしてないか？」

すぐに近くに寄ってきたあいつは膝をおり、心配そうにこちらを眺めてきた。
（やめてよ・・・優しくしないでよ・・・。私きめたのに・・・どうして・・・）

今までの思いが、不安が、悲しみが、ショックが、一気に濁流のように流れ出し、それは涙という形であいつの前に溢れ出た。必死に嗚咽をこらえ、私は

「・・・休みなんてつ・・・要らない・・・がらつ・・・謝る・・・がらあ・・・」

突然泣き出した私に、狼狽していた提督だつたが、私の落とした申請書を慌てて拾い上げその内容を見て小さく呟いた。

「申請書は… 空欄…。曙のこの言葉…： あいつの…： 予言通り…： ならば」

そういうとしばらく膝を折った状態で、私を見守っていた。ようやく話せる程度に落ち着いてくると、おもむろに机に向かつて歩き出した。

「曙、私と明日、遊園地にいかないか？」

机の引き出しから鎮守府の近くにある遊園地のチケットを2枚取り出し、怪訝そうにこちらを見ていた。

気持ちの整理どころか、思考すら止まり、少女はただ、そのチケットを眺めているのだつた。

曙の願い 前編

「曙、私と明日、遊園地にいかないか？」

唐突に提督が取り出した2枚のチケット、それは私が以前行きたいと言っていた遊園地のチケットだった。やつと落ち着いて考えることができるようになつた私はその行動で再び混乱してしまった。

（あいつが… 私に… ？どうして？ダメだ思考がまとまらない…）

「それ、女子に超絶人気でめつたに取れないっていうネズミーランドのチケット… よね。他に使う相手が山ほどいるんじやないの？ それこそあなたご指名のそこの榛名さんとか…」

「も、もちろん、榛名と行きたいのであれば、私でなくともいいんだ。気を使つて申請書を書かなかつたというならこのチケットを使つて行きたい子を誘うといい。これは貴い物だが期限が切れそなんでな、曙が使つてくれなくては逆に困るんだ」

「…なんか勘違いしてるし…。というかなんで最初に私を誘うのよ。こんな紙まで渡して遠ざけて、その上別の秘書艦用意するほど嫌いな艦娘と行くことになるのよ？」

「？いやいや、意味がわからん、第一私は曙を嫌いになんかなつてない。……まあだが、確かに秘書艦など必要ないと豪語したはいいが回らなくて榛名に頼つたのは……その、お前の古参としてのプライドを傷つけてしまつたかも知れんな、すまなかつた。」

「ふん、やっぱり秘書艦いるんじやないの。変なところで格好つけてるんじやないわよ全く、変なところで男らしくならなくともいいわよバカ。無理しすぎ」

「いやあ・ その件に関しては面目次第もない。だがな、曙、何度もいうが俺はお前に対してそう思つたことはないぞ？ 一緒に行くことだつてむしろ嬉しいくらいだ。」

「はいはい、そういうことにしといてあげるわ。まあいつも通りだしね、気にしてないわ」

普段の寡黙さからは考えられないほど饒舌に喋り出すあいつ。途中までは混乱していたが、精一杯の優しい言葉に私は確信した。

そうか、これもきっとあいつなりのフオローなんだ。榛名が居る手前、露骨にそんな態度とつたらきつとこの鎮守府全体の士気が下がる。そりやそうだ、古参である私を私的な感情で距離置いて居るなんて事バレたら、鎮守府のみんなは動搖してしまう。

（たとえ嫌いな相手でもこの鎮守府のためには建前でも……か。本当不器用なんだか器用なんだか。だつたら）

「いいわよ、行きましょう。秘書艦の日に思いつきで休みとか言われたから困つてたと

こだしね。ちようどいいわ。」

「本当か！じゃ、じゃあ、明日鎮守府の門に10時集合にしよう……もちろん明日までに気が変わつたらその子を連れてくるといい。その後に処理も気にするな。私が対応しよう」

（必死に代役立てるように誘導して……どうやら本当に来るとは思つてなかつたみたいね。ふん残念ながらそんなことする気ないわ。最後くらい思いつきりわがままして困らせてやるんだから）

「わかつたわ。ご丁寧にどうも。じやあ明日楽しみにしてるわね、ふふつ。……あ、榛名さんごめんね。私のせいで急に秘書艦なんてやる羽目になつちやつて。恨むなら無駄に見栄はつたこいつを恨んでね。今日は秘書艦業務、私もやるわ」

「え？。それは：全然気にしてないですけど……いいんですか？……あーそういうことですか？」

私も秘書艦をやるという提案に最初は困惑をしていた榛名だが、少し考えたあと、何かを悟つたのか優しそうに微笑んだ。

「あー、そういう……ええ！ そうですね♪ じやあ早めにかたづけましょう。明日に備えたいでしょうし！」

「いやいや曙、だから榛名もいるしもう大丈夫だつて」

「ゴタゴタうつさいわね！信用できないわよもう！やるつてんだから素直に従いなさいよ！」

「まあまあ、提督。本人が乗り気なら無理に止める必要もないかと思いますよ。それに私も『伝説の5艦』の曙さんから色々と教わりたいですしね。」

「あ、曙がいいなら……まあいいんだがな、休みたくなつたらすぐに休んでくれよ」

押すに押して半ば強引に秘書艦業務を2人でやる流れを作り、私は榛名と共に書類を制し始めた。結局秘書艦2人という過去に例を見ない体制で普段よりも2時間以上も早くその日の業務の全てが終わつたのであつた。

少し早めの帰宅。

部屋に戻ると潮と漣に今日のはどうだつたかと聞かれたが、逆に色々とありすぎて疲れてしまって伝えればいのかわからなかつたので

「うまくいったわよ。2人とも本当にありがとう。明日はあいつととデートに行くことのなつたから早めに寝るわね、じゃあおやすみ」

とだけ言つてやることを終えると早々にベットに入つてしまつた。呆然としていた

（ごめん、2人とも明日が終わつたら正直に全部話すから）

チクチクと胸に残るモヤモヤはあるが、ようやくこの問題と決別できそuddo、久々

にぐつすりと眠る私であつた。

「業務が終わつた後、提督と榛名は曙が戻つたあと、急遽秘書艦をやつたということで書かなくてはいけない書類を書きながら話していた。

「榛名、今日はありがとう。急に呼び出しておいて、こんなものまで書かせてすまんな」「いえ、榛名は大丈夫です！お役になてて何よりですよ。……それにしても、提督は本当に曙ちゃんに好かれてますね。今日の様子を見ていたら羨ましい通り越して、少し嫉妬しちゃいましたよ2人に」

「いやいや！今日の様子見てどうしてそうなるんだ。それにあいつ、付き合いは長いが普段から素っ気ないし、俺に絡む時だけやたら口も荒つぽくなるしな。嫌われてはいても好かれているとはならないだろ」

「え？ そうなんですか？ てっきり提督もいつものノリというか、その……言葉は悪いですが夫婦漫才的なものかと思つてましたよ、お互に許しあつてるからこそ見たいな」

「提督と艦娘いう立場だから指示には従えど、色々と不満があるからこそその態度なんじやないかと私は思つてゐる。今回だつて何か悩みがないかと聞いたら、『誰かと話す時間が欲しい』というから休日を与えたというのに……反抗したいだけなのかもな」

「あー、なるほど…… そう思つちやうんですね……。曙ちゃんも苦労してますね……。て
いうかさつきから曙ちゃんのことばかりですけど提督自身は曙ちゃんのことどう思つ
ているんですか？」

「苦労……？ 私は…… そうだな、曙は一人の艦娘として頼りにしている。昔から
色々と助けてもらつていてるし感謝はしてもしきれない。掛け替えのない存在だ。……
彼女、口こそ悪いかもしけんが本当に眞面目で、仲間思いで世話好きで、そして何より
優しい子だ。だが、だからこそ気を使つて色々と抱え込えこむ傾向があるようだ。今回
の一件もきっと色々と考えた末に感情が爆発してしまったんだろう……」

気がついたら私は榛名の前で長々と話してしまつていた。榛名は私が夢中で話す様
子を真剣に時折笑みを浮かべながら聞いていた。

「ふふつ、曙ちゃんも提督も優秀なのに不器用ですね。そんなに思つてあげているなら
その言葉、明日会う曙ちゃんにも伝えてあげてくださいね。たとえ提督の見立て通り
嫌つていたとしても少しは見直すかもですよ？」

「うむ…… そうだな。感謝は伝えたいと思つていたしな、頑張つてみるよ。…… おつと
勤務時間外なのに話し込んでしまつてすまんな。あとは私が書いておくからもう戻つ
ていいぞ。今日は本当にありがとう」

「はい、では明日、楽しんできてくださいね」

「まあ、あいつが楽しめるように努力するよ」

そう言つて榛名を見送つた私は引き出しから明石からもらったメガネを取り出した。

「明日はこれを使わないで平和に終わることを願うばかりだ……。」

残念ながら提督の願いは叶わず、次の日のデートではメガネが大活躍することになるのだった。

次回 曙編完結

曙の願い 後編

「遅い！女を待たせるなんて最低ね！」

時刻は丁度9時30分。少し早めに着こうと集合時間の40分前位に正門前に向かつたのだがそこには既に曙がいた。普段とは違ひ私服での登場ではあつたが、素人目ながらやけに気合が入っている様に見える。買い替えたばかりであろう服に髪はキラキラと光沢を放ちながらもしっかりとまとまっている。極め付きは耳元につけた大きな貝殻のピアス。結婚式に行きますと言われても違和感のないレベルの格好に私は少しだじろいでしまつた。

「すまんすまん、まさか30分前にきて既にいるとは……。というか今日は遊園地に行くんだよな？その格好は……」

「こ、これはあんまり休みがないもんだから服を買いに行く時間もなくて……。あつたもんで用意したらこうなつたのよ！文句あるわけ！」

「いや、ないない。半分私のせいみたいなものだしな。今後は隨時増やして行くつもりだからその時にでも買ってくれ」

「ふん、増やせる予定あるのかしら。この前だって業務にヒイヒイ言つてたの隠して秘

書艦は要らないなんて豪語してたくせに』

「あ、あれは思いつきで急にやつてしまつたからな、今度は大丈夫だ。任せとけ」「そう、わかつたわ。期待せずに待つておるわね。……でさつきから気になつてたんだけどあんたメガネなんてかけてたつけ?」

「これは、その……そう!伊達眼鏡だ! 久々に外に出るからな、少しおしゃれをしようと思つてな」

嘘である。私がかけているこのメガネは明石から貰つた願望メガネそのもの。私だつて昨日までは使うつもりはなかつたのだが、内情を知つて明石に報告がてら曙の件を伝えたら絶対に使つて欲しい、というかなんで使わないの? みたいな口調で詰め寄られたので、仕方なくつけて行くことを了承してしまつた。明石からは補足で

『このメガネの機能で新しくわかつたことがありまして、メガネの横に小さな出っ張りがあるんですけど、これ実は動かせるみたいで動かすと、願望の大小を調節できるみたいです。私たちが実演した際はメモリが最大で使用したので深層的な願いだつたんですけど、ここを調節すれば例えばいまやりたい軽いお願いや、はたまた今日食べたい食べ物といったものまで見ることができるようにですね。明日のデートにはきっと役につつと思ひますよ』

とも言つていた。

(まあ、私の性格上、曙を今日一日満足させるにはこれは必須だろうしな。途中からつけるのも今思えば違和感あるし、丁度いいか)

「へえ、意外ね。あんたが急におしゃれなんて。……まあいいわ、行きましょ」

「そうだな、せっかくの休日だ、早速向かうとしよう」

曙の言葉が妙に引っかかつたが、曙の頭に浮かんだ願望には特に違和感はないし、気にすることもないだろう。私たちはその後電車に乗り込み、1時間程度で目的地の遊園地へとついた。チケットを渡し園内に入るとまるで外国にきたような景色と建物が眼前に広がっていた。

「ここが……伝説の夢の国ってやつか。初めて来たが圧巻だな。まるで日本じゃないみたいだ」

「当然よ、ここは数ある遊園地の中でも風景や建物には特に力を入れているので有名よ。園内を歩いただけで世界旅行にきたような気分になれるからアトラクションや人混みが苦手でもそれ目当てにくる客もたくさんいるくらいなんだから。入口近くのここはアジアゾーンだから、こんなので驚いてたら身がもたないわよ！」

「へえ、全然知らなかつた、随分詳しいんだな。曙実はこういう類のもん好きなんだろ」「こ、こんなの普通に生活してたら常識よ！あんたがこういうことに疎いだけでしょ！別に昨日から楽しみになんかしてないしね！」

『早く入りたい！早く入りたい！』

(なるほど、確かにこれは役に立ちそうだな)

「そ、そ、うか、私ももう少しこう言つたことも勉強しないとな。とりあえず早速どこか行くか、時間も勿体無いしな」

「そうねえ、あんた絶叫は好き？朝から行くとなるとそういうところは早めに並んだいた方が効率がいいんだけど」

「うーん、実は正直にいうとあまり得意ではないな。酔つてしまふんでな」

「そ、う…。じやあまあいいわ。私も別に乗りたいってわけじやなかつたしね。他のアトラクションにしましようか」

『一緒に乗りたかつたな』

「…と言るのは建前だ！実はこの手の乗り物には昔から憧れがあつてな！曙！一緒に乗つてくれるか…この年になると一人じや恥ずかしいしな！」

(危ない、メガネがなかつたら曙の思いに気がつけなかつた。てかなんだこのテンション)

「え？あ、うんじやあ乗りましようか。あんたがそこまで言うなら断るのも気分悪いしね♪」

まあこう言つた具合で、乗りたいアトラクションや休憩したいタイミング、食べたい

レストランに食べたい食事まで、願望レベルを一番下に調節したおかげでその日の曙は終始ご満悦だった。普段は鈍感男が、突然英國男児顔負けの紳士になつたもんだから曙に本気で不審がられる事は多々あつたものの、この日のために勉強してきた、と言つて切り返してなんとか事なきを得た。それどころかそれを言つた瞬間、今まで見た中で一番かもしれないほど笑顔を一瞬見せてくれた。：：まあすぐにいつもの調子に戻つてなぜかキザ男、とビンタされたが。

（しかし：：人の心が読めるだけでここまで人を気遣えるようになるなんてな。：：逆にこれまで私は一体どんな対応の積み重ねをしてきたのか、怖くて考えたくもない）

そして夕方になつた現在、メガネの『甘いものが食べたい』と言う情報を見て、自然な流れで休憩を取ることにした。

ソフトクリームを食べて、楽しそうに風景を眺めている曙を見て、普段どれだけ不快な思いをさせていたのか、と日頃の行いを鑑み、罪悪感に満ちた表情をしていると曙が口を開いた。

「何辛気臭い顔してんのよ、安心しなさい、もうすぐ帰るわよ。私に嫌々連れ回されて疲れてるのはわかってるわ。」

『もつといたい、ここにいたい』

「いやそんな、嫌々なんて、鎮守府ナンバーワン提督を舐めるなよ？まだまだいけるぞ

！」

「いいわよ、そんな。朝からそんな調子で無理してるのがばればれだし、それにやけに気を使つてくれるのがが逆にむず痒くてね。私は満足よ、わがままに付き合つてくれてありがとうね」

「いやいや、私は知つてるぞ、曙はまだまだ楽しみたい。そうだろ？ それに私は無理などしていない！」

(眞面目な性格が仇となつてるな、なんとか本当の気持ちを優先して欲しいものなんだ
が)

「……はあ、今日はやけに強引にくるのね。ご名答よ、私だつて知識はあるけどここにくるのは初めてだしね、まだまだ乗りたいものがあるのは本当よ。でもいいの、私だつて子供じやない。あんたがへとへとで付き合つてるのを見ても無頓着にはいられないわ」

「そ、そ、うか、私が不甲斐なくてすまんな。じゃあ、すまないが私からのお願いだ、観覧車、と言うものに乗つて見たくてな。最後に付き合つてくれないか？」

「いいわよ、そんなの。私の乗りたいものの中にも入つてたしね、ちようどいい折り合いね。行きましょ」

そう言つて曙はそのあと、何も言わずただただ、周りの建物や景色をじつと眺めながら

ら観覧車のある場所まで向かつて。願望メガネにも特に反応はなく、おそらくこれがいまの曙の願いの実行中なのだろう。時々出る『記憶に残したい』と言う単語を見てだいたいそれを察した私も、曙の隣を無言で歩いてついて行つた。観覧車乗り場の待ち時間も、観覧車に乗り込んでも、彼女はしばらく無言であつたので、気まずくなつてから話し始めてしまつた。

「… それについても、今日は久々に曙とこんなにゆつくり話せたな」

「… そうね」

「しかし、今こうしてここにいることがまるで嘘みたいだな。今でこそこんな鎮守府だが、昔はひどかつたもんな。設備はないし、金もない、艦娘だつて両手で数えるくらいしかいなかつた上に嫌がらせのように敵は多かつたしな。あの頃は苦労をかけた」

「… 別に、艦娘なんだから当然よ」

「いやいや、こんな上司に付き合つて無理な出撃をさせていたのは事実だしな。…それで思い出したが昔一度だけ日々の労いとして曙を海に連れて行つたことがあつたな。その日は午前に急遽、軍の会議入るわ、そこで次の日出撃になるわで結局2時間くらいしかいられなかつたのを思い出したよ。『2時間しかいられないで、きた意味あつたわけ?』って曙の言葉、いまになつて思えば当然だな! ははは…」

「やつぱり嫌…」

私がそんな思い出話に一人盛り上がっている最中、消え入るような声に気がつき顔をあげると曙の頬には一筋の涙が伝っていた。

「あ、曙……？ どうした、気分でも悪く……？」

そういった私は途中で言葉を無くし、思わず一瞬フリーズしてしまった。なぜなら彼女の頭には『嫌われたくない』とただただ強く書かれていたからだ。願望の調節レベルを最小にしてこの願い、ということはいまこの瞬間の思いということになる。

「……やっぱり嫌！ 私はあんた無しじや生きていけない！ それがどんなにあんたを苦しめるか、どんなにあんたを傷つけてしまうか、分かつても私は！ あんたを思えるほど……大人にはなれない！」

「私だってそうだ！ なんだこの前から！ 私が嫌っているだの、距離を置いているだの！ そんな行動したつもりはないぞ!?」

「建前はもういいつつてんのよ！ じゃあなんで急に出撃回数を減らしたの？ なんで私を避けて会議の日程を組んだの？ なんで秘書艦業務をやらせないようにするの？ ……なんで昔みたいに私を叱らなくなつたの……？」

正直唐突な行動に驚いてしまつたが、願いを知っている分、彼女の気持ちが理解できた。だからこそその発言に誰に対してもなく苛立ちを覚えてしまい激昂してしまつた。それに対して曙もまくし立てるようになびながら私を睨んでいたが、次第に声は小

さくなり、最後は下にうつむきまた泣いてしまった。

狭い観覧車の中、彼女の嗚咽の声だけが響く間、私は彼女の発言に動搖を隠せなかつた。いま言われた行動は確かに本当に私の指示でやつたことだ。彼女が元気がないと感じ出撃を減らしたり、心労していることを考慮し会議や秘書艦業務を取えて避けさせていた。だがこの一連の行動は全て彼女にとつては、いやもしかしたら普通の感性を持つ人間にとつては堪え難い行為だつたのかもしれない、そう思つたからだ。だが、その瞬間の動搖もつかのま、私はある告白をすることを決めた

「曙！…どうしても聞いて欲しいことがある。実は今日一日、私はお前に隠していたことがある。聞いてくれるか」

「……隠していたこと？何よ」

「私のかけているこのメガネ、本当はただのメガネではなく、相手の願うことがわかる機能のついたメガネでな。それで今日一日は曙のやりたいことが手に取るようになつたわけだ」

「……なるほどね、それで今日一日の気持ち悪いほどの気の利き方にも納得がいつたわ。普段のあんたを見ている分、違和感しかなかつたしね。……で、そんな最低な道具を使つて私の心を覗いてたつてのが聞いて欲しいことのわけ？」

本来だつたらこんな突拍子も無いこと言われてもにわかには信じられないが、一昔前

まで毎日のように明石が変な道具を作つては周りを実験台にしていた影響で、昔からい
る艦娘は割とすんなりと納得してしまった。

「このメガネで… 私を見て欲しい。どんなに口で言つたつて納得してもらえないなら
この方法しかない。それで私の心を見る事ができるからな。嘘偽りのない真実を伝
えられる」

「… わかつたわ。じゃあその眼鏡貸しなさい」

そういうつて彼女にメガネを手渡す。覚悟がいるのか、何度か深呼吸をし、私を見つめ
た後、ゆっくりとメガネをかけて私を見た。すると彼女はまたさつきのように涙を流し
ながら、今まで出会つてから最高の笑顔を私に向けた。それを察した私は曙の頭を撫で
ながら話しだした。

「では、現実を突きつけられ弱つている曙くんに私から攻撃するとしよう。曙、これが私
の気持ちだ。私は君を嫌つてなどいない、むしろ好きだ。それ以上に感謝もしている。
昔からダメダメだった私を精一杯支えてくれたことは今でも忘れない。… 私は知つて
いる、曙が出撃した仲間を誰よりも心配している仲間思いなことを、自分のことを差し
置いてでも周りを気遣おうとしている優しさを、そしてそんな性格上、抱え込んでしま
うこともな。だから私は決めたんだ。曙が支えてくれる以上に私も支えよう、と
な。… まあその行動で曙を傷つけてしまつては元も子もないがな。… はは」

「はあ、全く完敗ね。これだけ完全に論破？されたら私も何も言えないわ。… 私の方こそごめんなさい。あなたの厚意に気が付かないばかりか勝手に勘違いしちゃって。あなたがそこまで私を見ていてくれたこと、正直嬉しくてまた泣いやいそそうだったわ。だからここで私からも言わせて貰うわね」

私の撫でている手をすつと握ると、彼女は私を見つめ力強くこういった。

「私もあなたのことが好き。いえ、大好きよ。私だつてこれからもずっとあなたを支えていくつもりなんだから」

「お、おう…。なんかそこまでビストレートに告白されると恥ずかしいな。セリフもなんだかプロポーズみたいだし…」

「

「バツ、バカじやないの!? そういう意味じやないわよ！あくまで提督として支えていくつてだけ！ほんと昔から空気読めないっていうか、人の気持ち察せないというか…。というかずつと思ってたんだけど、機械に頼らないとこんなこともわからないわけ？クソ提督ね！艦娘一人でも危ない目にあつたらタダじやおかなかからね」

「な！クソ提督だと?! 人が下手にでていればいい気になりやがつて！このツンデレネガティブ女！」

「はあ?! あんたなんか「あのお、お客さま方? 他の方にご迷惑ですので痴話喧嘩は降りて

からやつていただけだと…」

気がつくと観覧車はすでに一周して降り、扉が開いた状態で係員がいた。私たちは周りに笑われながらそそくさと遊園地を後にすることになった。帰りの電車では行きの電車では考えられないほど曙は気持ちをオープンにしていた。手を繋がされ、肩に頭を置いて、嬉しそうに寝息を立てていた。鎮守府に着くと、パツと手を離し、そこし前に行くと彼女はこういった。

「これからも、よろしくね。クソ提督♪」

「ああ、これからもこの鎮守府を頼むぞ、曙」

こうして伝説の五艦、曙の『嫌われたくない』という願いは、叶い、二人のこじれた関係も無事元どおりになることとなつた。この後やけに仲良くなつた二人にたくさん の噂が流れたり、鎮守府を揺るがす珍事が起きたりしたが、それはまた別の話で。

一 病室

「うーむ… これはかなり厄介な症状ですな、どうしたものか」
ある病室の一角で、一人の艦娘の様子を見ながら診断書を書く鎮守府専属の医者は頭を抱えていた。前代未聞の症状に対処のしようがないのだ。

「なあに、心配すんなよじいさん、気楽に行こうぜ。考えたつてしようがないことだつて世の中にはあるもんさ」

彼女の名前は、駆逐艦 時雨。普段からは信じられない荒々しい口調で医者にこう言つた。

つい先週に倒れ、ある問題を抱えてしまつた少女。提督が知らないうちにまた一人、大きな願いを抱えた艦娘が現れたのだつた。

時雨の願い

もう一人の自分

君は僕、だけど僕は君じゃない。じゃあよろしく頼むよ。『僕の願い』のためにね。

——執務室

「なあ、曙。マジでどいてくれよ。お前の頭で書類の文字すら見えないんだけど……。まあ片手も塞がってるけど」

「ふん、だから今日の仕事は私達に任せなさいって、何回言わせればいいわけ?ばかなの？」

「いや、そういう訳にはいかんのだよ、私しか出来ない大切な業務とかもあるし」

「じゃあ私の頭を撫でる業務を分けてあげるわ?伝説の5艦の頭触れるなんて世界広しといえどあなた一人よ。最重要任務託すんだから誇りに思いなさい」

「はあ……。なんというか、オープンになつてから一段と態度が太くなられましたな、曙さん」

「女の子に!!太いつていうな!!こんのクソ提督!もう朝ごはん作つてやんないから!」

「ぐえつ！」

現在、本来秘書艦の担当であつた時雨が倒れたこともあり、その穴埋めとして曙、潮、漣に秘書艦業務を手分けしてやつてもらつてゐる。実の所、ここ数日、青葉の取材やら、周りの艦娘の質問ぜめやらでほとんど執務室にいられず死ぬほど業務が溜まつていたのでありがたい、と思つていたのだが……。

「て、提督は太い女の子が好きなんですか……？たくさん食べなきやですね……書類終わりました。私もあ、頭を撫でても……いいですか？」

「ボノたんならまだしも、潮の場合は栄養が全部胸に行くから、その作戦は無理ですぞ！……こつちも終わつたのでご主人からのご褒美キボンヌ！」

「漣！あんた喧嘩売つてんの!?」書類グシャ

「あー!!もう！全然作業にならんじやないかああ!!お前らしい加減にしろ!!」

とまあこんな感じでやたら引っ付いてくるわ、色々とキンシップを要求してくるわで私は朝からほんと業務に関われないのであつた。

遊園地に行つたあの日、私と曙はまあ、メガネのおかげもあり、仲直り？を果たした。その後の彼女は元気を取り戻し、戦力も現役並みに復活した、そして何よりよく喋るようになつた、きっとあの日、私の本当の気持ちを見て嫌われる恐怖がなくなり、自分らしく話しても大丈夫とわかつたからであろう。素直にこれは嬉しい限りだ。

このような曙の変化に對して、姉妹艦である潮や漣には死ぬほど感謝された。そして、曙が何を話したか知らないが、それ以来信じられないほどこの二人の好感度も上がったようだ。

ちなみに曙以外は元々休暇の日のはずなのだが、何故か朝イチから執務室の前でスタン張つていた。曙の情報によれば、昨日の夜からテント張つて待つてたらしい。なに? 徹夜組? お前らの部屋ここから徒步5分じゃん。

「ご主人、たまにはこういうコミュニケーションも大事ですぞ。我々の幸福にもつながる大事な仕事だと思われ」

「私もそう思います! 今すごい楽しいですし!」

「あんたは私が支えるつて言つたでしょ。こいつらのいう通り、たまにはこういうことも大事よ。無理する癖は治らないでしようしねえ」

「……あーそういうえば、聞いてなかつたな。私あの時どんなこと願つて……バタンツ失礼するぜ! 白露型 2番艦 時雨! ただいま復活したよ!」

執務室を勢いよく開け、有事休暇申請書を持った時雨。その後ろからそろつと出てきた白髪の人物はこの鎮守府専属の医師だった。

「あ、これはどうも。提督様。いつもお世話をなっています。時雨さんの意識が戻りましたのでご報告にきました。」

「あーどうも。というかその時雨はどこだ?ここには時雨のコスプレした艦娘しかいなんだが」

「なんだあ?全員アホみたいに口開けてこつち見てよお。正真正銘目の前にいるのが時雨様だらうが」

「いや……えっとお……だから誰だお前!?天龍みたいな喋り方して!いやだが見た目は時雨だしなあ……」

「なんか……。口調もそうだけど雰囲気も変わった気がするわね……まるで別人みた

い」

「せ、先週倒れた時に頭でも打つてネジでも飛んじやつたのかな……」

「潮、それ何気にひどいですぞ」

荒々しい口調をしたこの人物、時雨は曙と同じく伝説の5艦の一人だ。駆逐艦とは思えない高火力と圧倒的な俊敏さは鎮守府トップレベルの実力。曙が例の一件で落ち込んでいた時期はおそらく駆逐艦中で全てにおいてナンバーワンの艦娘だったに違ない。

しかし彼女の強さはそれだけではない。彼女はこのような絶大な実力を持ちながら温和で争いを好まない性格をしており、また常に冷静沈着。その落ち着きと慈母のような優しさは多くの艦娘から曙とはまた違った信頼と尊敬の念を得ている。彼女なら

話してもいい、と他の艦娘の相談役になることも納得である。

そんな彼女が今現在、目の前で全く違う態度で私たちに接してきているのだ。驚くな
というほうが無理がある。

「はつ散々な言われようだな、別にどーでもいいけどよ。俺はそんなヤワじやねえよ。
頭は打つてねえし、体だつてピンピンしてらあ。そんなに気になるんなら、後ろの医者
に聞いて見な」

「……体は全く問題ありません。異常はどこも見つかりませんでしたし、潮さんの
言つたような頭を打つての記憶の欠落や喪失も今の所見られません。彼女には
「ほらな、医者のお墨付きだ、まあイーメチエン程度だと思つて軽く流してくれ。つてんな
こと話しつきたわけじやねえんだつたわ。ほれ、この紙。これ書けば遠征予定だつたと
しても休めるんだよな、確か。なんか調子でなくてよ……あーでも確か今日秘書艦
だつたか？」

一 有事休暇制度

略して有休だが、現代の日本で使われる有給とは少し異なる制度で、遠征予定の艦娘
個人からの希望があると、おりる特別休暇のことである。簡単に言つてしまえば無条件
で休みが取れる制度だ。以前、提督が『休みと言つても私から支給された休みでは急な
用事や趣味に時間を避けきれない可能性がある』とのことで制定されたもので、比較的

艦娘が増え、ローテーションに余裕ができた頃から、年に一度15日の有休を艦娘全員に付与するようになった。もちろん使わなかつた分は翌年に繰り越されるため、業務が比較的忙しい艦娘達などは1年間ためて、2年目の有休支給後に1ヶ月のバカンスを取るケースもよく見られる。ただあまり使わない艦娘も一部いたため、以降3年でその年の有休は消滅してしまったルールを追加し、戦闘好きの艦娘のため演習や出撃に参加することのできる権利も加え、利用の促進を図った。それが功を奏したのか今現材、有休の消化率は全体で80%超えである。

またこの制度、単に休みが取れるだけでなく、日頃の頑張りに対する労いの意味を込めて、鎮守府内の施設に限り、1日につき一つだけ特典をつけて利用することができる。特典の例を挙げると

銭湯 マッサージ30分無料サービス

スポーツジム ドリンク飲み放題

本屋 5冊まで全て20%off などなど

先ほど時雨が持っていた有事休暇申請書に判が押されている状態のものを手渡せばこの恩恵を受けることができる。仲間ととつて楽しむもよし、一人でとつて趣味に浸るのもよし、艦娘が各自自由に楽しんでいる様子は見ていて微笑ましい限りである。

「あ、ああ……もちろんだ。秘書艦も代役を立てたところだ気にしないでくれ。しつかりとリフレッシュして英気を養ってくれ。（時雨は俺から言わないと有休なんて取らないような子だつたはずだが……）」

「うつしや。じゃあとりあえずバッセンでもいって特典使っちゃうかな、じゃあな。あんがと！」バタンツ！

再び勢いよく執務室の扉が閉まるとき、時雨が近くにいないことを確認し、医者がゆっくりと話し始めた。

「なんだつたんだ本当に、ドッキリか何かか？いやしかし演技には見えなかつたし……」「はい、演技ではありません。……その……申し上げにくいくらいですが、おそらく時雨さんは解離性同一性障害だと思われます。」

「解離性……なんだつて？」

「解離性同一性障害、まあ簡単にいつちやえば多重人格つてやつね」

「ええ……その通り。曙さんはお詳しいんですね。……解離性同一性障害はいわゆる精神病の一つとして過去のトラウマや限界を超える苦痛、精神的ダメージから逃れるため、自分の中にもう一つの人格を形成してしまう病気です。時雨さんの場合もおそらく何らかの原因があり、あのような全く違う人格を作り出したと考えています。ただ：これに対しての対処が思いつかないのが現状です」

「その…でもそれって艦娘にはよくあるつて聞きました。日々戦いを強要されている私たちにとつては死の恐怖だとトラウマは日常茶飯事だから、その中で精神疾患になつちやう子も多いつて…」

「あー鬱だとか、パニック障害とかですな、こここの鎮守府の新人用学校で嫌という程学びましたぞ。ただ多いからそれに対する対策もかなり完成されてるとも聞きました。

「こここの規模の鎮守府の設備で治せないことはないと思われ」

「…なるほど、皆さんよくご存知なんですね、流石教育レベルもも高い鎮守府です。そこまでよく知つていらしやつてているなら隠さずにお話ししましよう。確かに艦娘のこのような精神障害は珍しくありません。そして当然、それに対する多くの研究者の元パターン化され対策がマニュアルにされているので、大体のケースでは治療の期間の違いはあれどが完治する子が多いようです」

「ふむ…なるほど、大本営もそういうことはしつかりとしているのだな、悔しいがありがたい限りだ」

「はい、おっしゃる通り。我々も頭が上がりません。…ただ、時雨さんの場合、長年の精神障害原因パターンのどれにも引っかからない特異なケースでして」

「特異なケース？仲間が傷ついたりとか、敵からみんなを守れなかつたとかそういった理由とかじやないの？」

「私も一番最初にその要因が浮かびました。なので少し心苦しくはあります。が原因究明のため、疑似的に自信が大破してしまった映像や仲間が沈んでしまう映像を了承の上で見させました。補足としてお伝えしますが、今現在の彼女を時雨2、だとすると私がその映像を見せるといった人物は時雨。つまり本人です」

「なるほどね、まだ彼女の中には元の人格も存在してることね。で、病室にいるときはまだいつもの時雨だったと」

「理解が早くて助かります。映像を見せ、本人が少しでも人格の揺らぎや表情の変化、発汗や震えなどがあればほぼ間違いなく要因はそれと断定して治療に進むのですが、彼女の場合そのような反応は一切なかつたのです。また不可解な点が2点ほど挙げられます」

「不可解な点?」

「はい、1点目は彼女は映像を見るなどを了承した際、だれかに話しかけているそぶりを見せていました。おそらくではありますが彼女はもう一つの人格と完全に会話ができるていると考えられます。映像を見終わつてしまふと、『俺に話させろ』と突然言ったかと思うと彼女の人格は入れ替わりました。一般的なケースでは人格は分離しており、入れ替わつた際の記憶は欠落しているものなのですが、その後の彼女は映像についての文句やダメ出しをしていたので、記憶も共有されているのが確認できました。」

「つまり、他人格でありながらしつかりと私たちの姿も、自分自身の中の他人格の声も聞けているつてことね、確かに聞いたことないわそんな話」

「そして2点目。これは簡潔です、要因がわからないという点です。本来この病気は辛い、苦しいと言ったネガティブな感情から逃げるツールとして発症し、人格を生成するのですが、彼女に関してはその兆候は一切ないです。むしろお互いの人格同士で話し合い、何か、こう、野望のようなものを後押ししている感じですかね。そういういた様子を多々見ます」

「うーん、つまり要約すると彼女は何かから逃れる、というよりは作るべくしてそういうふた新しい人格を生成したつてこと？」

「まあ、そういうことになるのでしょうか。申し訳ないです、このような曖昧な回答で。何度もいうようにこのようなケースは初めてでして、対策方法から考えなくてはいけない段階なのです」

「でも心配ね、もしかしたら何かの拍子で別人格、時雨2が暴走して元人格を乗つ取る可能性だつて十分あるわ。早めに対策しないと取り返しがつかなくなるかも」

「対策ですかあ。でも我々素人じや状況悪化させかねませんぞ」

「でも…： 曙ちゃんのいう通り、早めに手を打たないと時雨ちゃんが…」

「そこでですね、私に少し考えがありまして。あなた方に是非協力してもらいたいのです」

そう言つて医者は自身のバッグから書類を取り出した。時雨対策用、と書かれたその書類にはある作戦が書かれていた。

|| 続く ||

暗雲と光

「いい機会だからいっておくよ。僕はね、提督のことが大っ嫌いなんだ」

呆然とする私の横で、なんの淀みもなく時雨はいった。居酒屋、騒がしいはずの夕どきの店内なのに周りの喧騒が嫌に小さく聞こえる。今にも泣き出てしまいそうな曜をはただただ時雨を睨んでいるのだつた。今まで保ってきた3人の関係性が大きく崩れた瞬間であった。

一遡ること6時間ほど前

「はあ？ 時雨を怒らせる？」

考えがあると言われ医者から手渡された時雨対策用と書かれた書類。そこには確かに3パターンに分けられた寸劇のようなものが記されていた。

「はい、その通りです。あなた方にはこれから、3パターンのロールプレイで時雨さんの気分を害してもらいたいんです」

「いやあの……イマイチ意図がわかりません。時雨の病気の原因究明とどんな関係が

?

「これは失礼、そうですね。まずは1から説明します」

そういうと医者は私たちに渡した資料に沿つて今回の作戦の意図と内容を話し始めた。

「まず、説明しないといけないのは一般的な多重人格の対処方法についてです。多重人格の要因究明としては先ほど私が時雨さんに戦争のビデオを見せた例を出しましたようく、人格を作り上げてしまつた要因の特定が始めのステップです。しかしどうにも彼女は我々の想像の範囲外のことが要因のようとしてこの方法では時間ばかりがかかるてしまうと判断しました」

「そうね。私たちじや正直、あいつの願いなんて皆目見当もつかないだろうし、その方法はナンセンスね」

「そこで私は考えました。わからないなら直接本人に言わせてしまえばいい、とね。そこで先ほどの寸劇です。喜怒哀楽の中での怒りというものは最もコントロールが難しい感情といわれています。カツとなつて気がついたら、怒りで我を忘れてなどの言葉もあるように理性の壁を超えて、本音を聞き出す方法としては怒らせるのが一番なんですよ」

「……なるほど、理屈は理解した。つまり時雨を我を忘れるほど怒らせて心の内に秘め

ている本音を吐き出させようつて感じか。私たちはそのための演者というわけだ

「はい、その通りです。もちろんこれはあくまで作戦の一つですのであなたの方の意思是尊重するつもりです。関係性が悪くなる可能性は十分にありますからね……どうしますか？」

「やるわ。それで時雨を元の戻せるんなら……憎まれ役なんていくらでも買ってやるわ」

「無論、私も協力しよう」

「私たちもやります！時雨さんには本当にお世話になつてますから！」

相手を故意に怒らせる行為は決して気の進む話ではない。ましてや相手が時雨だ。正直普通なら悩んでもおかしくない場面であつたが、時雨を救いたいというみんなに意思は強く、即答するのであつた。

「満場一致で同意ということで。作戦は本日午後から実行します。あ、それからこの作戦の要は、提督様、あなたです」

「私？」

「はい、時雨さんの病気の原因は少なからずあなたが絡んでいると私は踏んでいます。つまり作戦が成功し、時雨さんの行動をうまく誘導できるかどうかは、あなたの演技力

にかかつています。ぜひそのところ意識して臨んでください」

「わ、わかりました。頑張りますね……」

(この作戦を成功させるにはやはり…… またこいつの出番というわけか。やれやれ……)

最近はどうも人の感情を読むことを強いられる場面が多くて困るな……)

私は机の引き出しから例のメガネを取り出し、小さくため息をついた。

一午後

「……で? 話つてなんだよ。こちとらせつかくの休日に呼びだされてんだ。茶ぐらいおごつてくれるんだよな? …… つてかなんだよそのふざけたメガネはお前普段そんなにかけてねえだろ」

ージョナフル

鎮守府内のファミレスの一つ。一般的なメニューに加え、艦娘が提案した料理が月一で提供されることを売りにしている。食堂も完備してはいるが、創作料理目当てで、ここで食事をとるグループも割といるかなり人気の店だ。

私は話があると連絡を入れ、時雨をここに呼び出した。店内はお昼近いこともあり多くの艦娘で賑わっていた。時雨と提督に見えないよう他の3人も裏で席を陣取りよいよ作戦が開始された。

作戦1 クソ提督が即放置!? 私にもつと構いなさい作戦

時雨を呼び出し、話をしようとすると、漣が登場。時雨がいるのにもかかわらずベタとひつつき話を妨害。二人の絡みを見せ続けられる挙句、放置された時雨が怒り心頭になるというシナリオ……え？この作戦名は何かって？知らんわ医者に聞け

「話っていうのは、その……なんだ。最近どうだ？」

（あれ、このくだり凄いデジヤブだぞ）

「はあ？ …… 別になんともねえよ」

「あーいや、その、なんだ。雰囲気変わったなあって思いまして……」

（あー、無理。雰囲気悪すぎてお腹痛い。漣ー早くきてくれえ）

事前に渡されたトランシーバーから声を聞き取り状況を確認する一行は裏で出るタイミングを伺っていた

「……なんかぎこちないです。久しぶりに会う娘とお父さんみたい」

「あいつ話すの下手すぎでしょ！これじゃあ作戦実行する前に時雨帰っちゃうじゃない！」

「これは早めに進めたほうがいいですね。少し強引ではありますが、突っ込んじやいましょう」

「了解ですぞ！」

「だーから！イメンつて言つただろ！女の秘密を説く男は嫌われるぜ？…
で、なんだよ話つて。世間話しにきたんじやねーよな」

「あー…話というのはだな「ご主人様ー！」」

大声をあげて、凄いスピードで私の隣の席にきた漣は、私の腕に抱きつき、嬉しそう
に話しかけていきた。

「こ主人！こんなところで何してるんですけど？私もご一緒にしますぞ！」

「さ、漣、奇遇だな」

「本当に！ところで何してるんですかな？」

「あ、ああ、実は時雨と少し話しがあつてな、それで…」

「だつたら我也参加しますぞ！ここのお店のパフェでも食べながらゆつくり語らい合い
ましようぞ」

「ほう、私は甘いものにはうるさいぞ？ここパフェはうまいのか？」

「今は間宮さんが考案した期間限定スペシャル桃デラックスがオススメですぞ！きっと
ご満足いただけるかとー」

「それはいい情報だ。頼んでみるか」

「やつたー！じやあ我が奢つてあげますぞ！」

「え！ 本当か、 気前いいな」

「いやいや、 私と提督の仲じやないですかあ、 えへへ」

「…… おい」

先ほどまで時雨と話をしていたのにもかかわらず、 突然入ってきた漣の話に食いつき、 挙句注文をしようとしている。 時雨はしばらく私たちの様子を観察してから私と漣をじっと睨んできた。

当然だ。 呼び出しておいてこの仕打ち、 どんな寛大な艦娘だつて怒る状況にこの時雨が怒らないはず……

「おい！ いい加減にしやがれ！」

（よし！ 作戦通り！ 後はボルテージを上げさせ……）

「わざわざ半分なんてケチくせえだろ！ 僕が払つてやるから二人で一つずつ食べなうるさい！ 私は甘いものには目が…… つてえ？」

「え、 でも……」

「いいってことよ、 楽しみにしてたんだろ。 つてか提督、 おめえシャキツとしろや。 艦娘の前にこいつだつて女の子なんだぜ。 本来はお前が奢つてやる場面だろうが」「す、 すまん。 そういうところに気が利かず……。 どうか怒つてないのか？ 自分で言

うのもなんだがわざわざ呼び出しておいて放置しちゃつてた氣がするんだが」

「ふん、俺はそんな小せえ女じやねえよ。確かに最初はなんだこいつつてちょっとイラつとしたけどよ、漣の様子見てたらそんな気持ちどつか行つちまつた」

「あ、ありがとうございます……」

作戦ではこの後も、漣が頼むことで自然とパフェの個数を一つにしてお互に食べさせ合うという予定だつたのだが、時雨があまりに意外な反応をするもんだから私も漣も黙々と1個ずつのパフェを食べることになり結局作戦は見事に失敗した。時雨はその様子を少しだけ眺めると、すつと立ち上がりレジに向かつた

「あ、おい、待て話はまだ！」

「俺はこれでも忙しいんだよ。金は払つておいてやるからよ。話はそんな重要なことじやねんだろう？だつたらそいつに構つてやれよ、漣のそんな顔久々に見たぜ。じやあなたごゆつくり」

そう言つて颯爽と店を後にする時雨をおうぜんと眺めながらパフェを完食し、罪悪感に身を包みながらトボトボと3人の元に戻る私と漣であつた。

「私はなんてことを……」

「ボノたんと潮の下着入れ替えるイタズラした時以上の罪悪感ですぞ……」

「どさくさに紛れて罪の告白してんじやないわよ。つてかあれあんたの仕業だつたの

ね、殴つていいかしら」

「……うーむどうやら寂しいとか嫉妬心と言った感情が要因ではなさそうですね。むしろ他の艦娘に対しては以前の時雨さんのままでし……ますますわかりませんね」

「つ、次の作戦……やるんですか？あの様子見ると次の作戦だいぶ危険な気が……」「もちろんやります。提督様には申し訳ないのですが時間がありません。どんどん行きましょう」

「お、おー……頑張るぞお」

作戦2 本当にクソ提督！？セクハラまがいのアプローチに幻滅アンド激昂！？作戦

作戦はシンプルオブシンプル、私が潮に対してセクハラをしている場面を時雨に目撃させる。今まで付いて行つてた提督のそんな姿を見て時雨は幻滅。そして怒りのままに自分に罵声を浴びさせようというシナリオ。

……気がついた。この寸劇、私にとつてトラウマになるわ。ダレカタスケテ

「時雨さんは現在、鎮守府内にある室内温水プールで泳いでいるそうです。休憩のタイミングでいい感じに視界に入るようセクハラお願いします」

「わかりました……潮、すまんなこんなことになつて、作戦とはいえ嫌だつたら途中でやめてもいいからな」

「いえ、その、全然大丈夫です……！ 気にしないでください」

『早くきて！ 私にセクハラして！』

（あー、私は今日死ぬのだろうか、というかなんで潮さんノリノリなの、心の声に若干引いてるんですが）

「では作戦開始」

－温水プール

喫茶店のすぐ近くにある我が鎮守府の艦娘専用施設だ。流れるプール、ウォータースライダーはもちろん、100mプールや飛び込み用も完備しており、鍛錬に、遊びに、気晴らしに多くの艦娘が訪れる憩いの場の一つ。

時雨はその一角、100mプールで黙々と泳いでいたが、区切りがついたのかプールサイドに上がつて一息ついていた。

「よつこいしょつと……。1kmはちょっと泳ぎ過ぎだつたかなあ、流石の俺も疲れたぜ、さつてそろそろ寮に戻りますか……ってあれは提督と潮か？ こんなところで泳ぎもせずに何やつてんだ……」

「うー、うーんいいねえ潮ちゃんその体。駆逐艦とは思えないよ」

「そ、そんなことないです…… 普通です」

「普通かあ？ ジヤあちよつとくらいなあ触つても問題ないよな」

「いや……その……ダメですよ提督……」

「なんだよお、いいじやんか少しくらい！なあ！」

「や、やめてください！嫌がつてます！私！嫌がつてます！」

「そんなに嫌なら提督命令で無理やり触っちゃおうかなあ、ぐへへ」

（いや嫌がるつて台本に書いてあるけど口に出しちゃダメでしょ！）

（す、すみません！ こういう演技、いざしろつてなるとセリフ浮かばなくて）

（こいつ脳内に直接）

「おい！何やつてんだ。つてか漣はどうした」

「し、時雨！？なんでここにー（棒）」

「あ！時雨さん！よかつた……。助けてください、提督にセクハラされてて……」

「な、お前！卑怯だぞ！時雨を盾にするなんなんて！」

「へえ……。提督がセクハラねえ……」

「いや！これはその！違うんだ、聞いてくれ時雨！」

黒いオーラが一面に沸き立ち、ドスの効かせた時雨の声が私の耳に届く。演技することも忘れただただ手を前にやり弁明をしようとしていた。時雨はそんな私に顔をうつむかせて一步、また一步とにじり寄つてくる。

（あーこれ死んだわ。ごめんなさい母さん、私はあなたよりも先に旅立つようです）

そう覚悟し強く目を瞑つた私の右手にほのかに柔らかい感触がした。というか今ムニツテ……

目を開けると真つ赤に赤面した潮と私の右手が時雨の胸を驚掴みにする光景が広がつた。

「つたく、みつともねえ姿見せてんじやねえよ、てめえを信頼してる艦娘に見られたらどうすんだよ。……私でいいならいくらでもこうことしてもいいから、ほかのやつには手を出すな、わかつたな」

『潮を守りたい、提督も守りたい』

「は、はい、いえ！ 一度とこんなこといたしませんです……」

少し顔を赤らめてはいるものの、時雨のクズに対する大人な対応に思わずおかしな敬語で完全に屈服してしまつた。潮は潮でこの状況を読み込めず、頭から湯気を出しながら目を回してフラフラしている。時雨は倒れかけた潮をすつと支えると私にこう言つてきた。

「ふん、わかればいいんだよ。潮のこと医務室に運んでやれ、氣い失つちまつたみたいだ」

「え、でもいいのか、さつきまでセクハラしてた相手だぞ」

「別に普段の様子見てりや、そんなことするやつには見えねえしな。早く運べ。」

「は、はい！すぐに運びます！」

「またもや作戦は失敗した。医務室で演技かと思つたら本当に氣を失つていた潮を眺めながら3人は大きくため息をついた。

「あいつ……全然中身は変わつてないわね。口調や態度は違うだろうけど、根本の性格は時雨と連動しているのかしら、ますます複雑な気がしてきたわ」

「うーむ、となると人格が連動している？それとも影響を及ぼして主人格の性格になりつつあるのでしょうか？ともかくこれだけやつて全く要因がつかめないのは困りましたね」

「次の作戦……かなり過激ですぞ。本当はここまでである程度は解決する算段でしたし、本当にやる意味あるんですかな？」

「漣、ここまできてやらないうつて選択肢はないわ。あんな優しい姿見せられたら余計にね。大丈夫、次で必ず時雨を引き摺り出してあげるわ」

「ではすみませんが、提督様、曙さん。よろしくお願ひします。周りを巻き込まないようになりますだけ人のいない場所でできるよう我々も善処します」

「うむ……。ではいこう、最後の作戦開始だ」

作戦3 このクソ提督！罵詈雑言を時雨の前で浴びさせる作戦！

作戦2 よりもさらにシンプル。曙が時雨の見える前で私に対してもりつたけの罵詈

雑言を浴びせる。それを見た時雨が曙に對して怒りをあらわにする、というシナリオ。ここで重要なのが配役。普段からおとなしい艦娘や私を明らかに慕つてゐる艦娘ではこの作戦が破綻する。そこで普段からツンケンとした態度を取つてゐる曙にお願いすることと、状況を自然とすることを可能とした。

「はい、では作戦開始します。時間的に終業後の夕食どきです。提督からお昼にできなかつた話も込みで今晚のみたいとさそつてあります。場所は居酒屋鳳翔の2階の個室、できるだけ端の席を取りましたので思う存分罵詈雑言言つてください。おそらく賑わつてゐる店内であればそこまで目立つこともないでしょう。提督様はその…頑張つてください」

〔了解（した）〕

一居酒屋鳳翔

1階2階と昔ながらの佇まいをした居酒屋。鳳翔が店主をしており、色々な地方のお酒を用意している上、メニューもリーズナブル。宴会場やカウンター席、テーブル席に個室席と、多くの用途に対応しており、料理は絶品。お酒好きはもちろん、普段からあまり飲まない艦娘も鳳翔には足を運ぶ子も多い。

「あら、いらっしゃい。懐かしい組み合わせですね」

「鳳翔さん、なんだかお久しぶりな気がしますね、すみませんが今日はよろしくお願ひし

ます」

「ええ、事情はわかりませんが、提督の頼みです。周りの席はできるだけ開けておきますので思う存分討論してください」

鳳翔さんにはあらかじめ店でもしかしたら喧嘩が起きてしまうかもしないこと、それだけ重要で危ない話をするかもしないことを事前に話してある。…まあ私がただ悪口言われまくるだけなんだけど。全面的に協力してくれるとのことで助かつた。「ご協力痛み入ります。このお礼はいつか必ず。本当にありがとうございます」といいます

「あらお礼だなんて、楽しみにしてますね♪」

「ほら！さつさと行くわよ！クソ提督！お腹空いてるんだから！」

「あ、ああ。では鳳翔さん、また」

曙に腕を引かれ、指定された個室に行くとすでに時雨は日本酒を片手に座っていた。

「おっせえな、あんまり待たされるもんだから先にいただいちまつたぜ」

「ああー、すまんな、今日はよろしく頼む」

「……よろしく」

「しつかし懐かしいメンツだな。最後に曙と提督と飲んだのはまだこの居酒屋が1階しかない頃じゃないか？あの時はほんと曙の態度悪かつたよなあ、あー今もそれは変わんねえか」

「うつさいわね！それはこいつが悪いんでしょ！溜めてた鬱憤吐き出すために今日は思いつきり飲んでやるんだから！」

2人は初期の頃からいるメンバーで私は提督だ。話のネタは尽きることがない。この雰囲気も、お酒に酔ってしまうのもある種作戦内だ。酔った勢いとあれば悪口も自然と言えるし、居酒屋ならある程度大声出してもただの飲んだくれと思われて不審がられもしない。ある程度全員がお酒が回ってきたと判断し、曙は作戦を実行した。

「おい！クソ提督！私あんたに前から言いたいことあつたのよ！」

「ど、どうした曙、急に…」

「急にもクソもないわ！日頃からあんたの指揮見てるとイライラすんのよ。作戦も消極的だし、指揮もいつもどつちつかず！これでうまくいってるのが嘘みたいて今も思つてるわ！」

（うむ、自然だな。演技とは思えない、演技だよね？）

「なんだなんだ？愚痴ぶちまけコーナーか？いいねえ」

「いや、これはお前らのことを思つてだな…」

「思つてるならなんで積極的にコミュニケーションしないわけ？そんなの一部の艦娘からは嫌わてるつて勘違いされてもしかたないわよ？その子の気持ち考えて行動した

ことあるわけ?」

(曙さん……普通にこの前の件の愚痴じやないですか‥‥ごめんよそんなに気にしてたんだ)

「おうおう、確かに提督は艦娘とのコミュニケーションが足りねえな。今日1日だけでもよくわかつたぜ」

「時雨まで‥‥」

「それにあんた、いつも書類業務に追われてて、まともにご飯食べてない時期もあつたじゃない。秘書艦制度だつてイヤイヤつけて‥‥そんなに自分の能力を高く見てるのかしら?」

「ははっ‥‥痛いとこ突かれたな」

「‥‥‥へつ、まあ確かにそういうとこあるよね、提督は」

曙は話に夢中で気がついていないが、ピクリと反応した時雨の口調はいつものものに戻りかけていた。

「この前だつて、秘書艦業務なんていらない、終わる量だから休めつて言われて休んだら、一人でヒイヒイ言いながら業務やつてたのよ。見榮はるんじやないわよつて感じ」「‥‥‥」

「まああれは確かに、私の技量不足だつたな、迷惑かけた。‥‥‥つて時雨どうしたさつき

から俯いて」

「ふん、私訂正する気は無いわよ」

時雨の顔を見ると酔っていたはずの赤い頬は元に戻つており、コップを握る手は震えていた。そして何かを覺悟するかのような大きなため息をつくと静かに話し始めた。

「本当に昔から……嫌になつちやうよ。モットーだかなんだか知らないけど一人で理想を抱いて、抱え込んで……。どんなに辛くなつたつて変わらないのが余計に腹が立つ。望むことをやつて、嫌なことを自分で肩代わりする。そんな愛情押し付けだつて、なんで気づかないのかな……正直迷惑だよ。ただのエゴだよそんなの」

(主人格の時雨が出ている……これは……！)

「し、時雨！ 言い過ぎよ！ 確かにこいつは不器用なやり方かもしれないけど、私たちのことを考えての行動なのは本当よ！ 私たちはそれを支えてあげるのが役目でしょ！ 私たちが提督を信じてあげないでどうするの？」

「曙も言つてただろ？ 作戦が消極的だとか、コミュニケーションが足りないだとか。ぼくらのような古参の艦娘にそう思われる提督を支えてあげよう？ 笑わせないでよ」「それは……その言葉の綾で……信頼しあつてるからこそその軽口で……」

少し涙目になる曙、だが間髪を容れずに時雨はそんな彼女をまくしてくる

「曙は大きな勘違いをしてるようだから伝えておくよ。僕はこの提督を一度だつて信頼

したことはないし、信じようつて思つたこともない。あるのは提督と艦娘の関係それだけだ。いい機会だからいつておくよ。僕はね、提督のことが大つ嫌いなんだ、こうしてこの場にいることにも虫唾が走るレベルでね。今後はこういう会にも呼ばないでもらえると嬉しいな」

『~~~~~』

「そん……な……。時雨なら……こいつのことわかってるつて思つたのに……」

「じゃあそういうことだから僕はここら辺で失礼するよ。本当に苦痛な時間をありがとう、奪われてしまつた分、せいぜい残りの休日を楽しむとするよ」

『~~~~~』

(時雨……お前……)

そういつてぴしやりと襖を閉じ去つていつた時雨。それを見て泣き出してしまつた曙と最悪の雰囲気、最悪の状況だが提督はある確証が得られた。

「ごめんなさい……でいどく……私のせい……こんなことにいい……」

「大丈夫、気にしていない、むしろ感謝している。曙が本音を引き出してくれたおかげで今回の件、解決できそうだ」

そういつて曙の頭を撫でながら私は次の策を考えていた
(時雨、お前のその願い、木つ端みじんに打ち砕いてやる)

メガネから見えた本当の願いを見た提督は今回のトラブルの原因、そして時雨の行動の意図を理解し最終作戦に移行するのであつた。

交差する思い

「みんな、話がある」

居酒屋での一夜をあけ、4人は提督に呼ばれ、執務室に集まつていた。

誰一人言葉を発さず、重苦しい雰囲気が一面に漂つていた。この状況を作つてしまつた医者は申し訳なさそうにうつむいている。

「まず時雨の人格形成の要因、おそらく推測がついた。そしてそれに対する最終作戦も考えてきた」

「要因が?...」 提督様本当ですか? 昨日の一件で確かに時雨さんはあなたを嫌つている事実はわかりましたが... それと要因がいまいち繋がりません。第一嫌つてているという事実は時雨さんによれば前々からではありませんか」

医者が口火を切つて話し出す。

「確かに時雨殿がご主人を昔から嫌つているとしたら、今回の件とは無関係ですな。今回突然人格形成されたにしてはタイムラグが大きすぎますぞ」「正直今でも信じられない...。昔からそんな素振りを見せたことなんて一度もなかつたもの。あの笑顔が偽りだつたなんて思いたくないわ... きっと何かの間違いで...」

「時雨の行動は偽りだ、このメガネで本音を見た以上。これは揺るがない」

「そんな……じゃあ本当に時雨は……」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた曙。それに対して慌てて訂正を入れる。

「ん？……あー！すまんすまん、そうじゃない。今まで行動ではなく、嫌っている素振りそのものが演技つてことだ」

「提督様。どういうことですかな？詳しく述べて欲しいです」

「まず、今までの他人格の願いも他の検証で覗いていたが、どれも目まぐるしく変化するもので大した願いはなかつた。『漣を喜ばせたい』だとか『潮を守りたい』とかな。だがあの居酒屋の席で、時雨の主人格が出た瞬間、願いは『提督に嫌われたい』の一点のみに固定された。しばらく時雨を観察していたがこの願いは全く変化しなかつたんだ、違和感あると思わないか？」

「確かに・本当に提督が嫌いなら、あの場の願いは『帰りたい』とかの方が自然よね。もうすでに嫌いだつたらそれ以上相手に関心を持つとは思えないわ」

「自発的に嫌われに行つてるつてことですか？」

「そう、つまり本当に私が嫌いなのではなく、私に時雨を嫌いになつて欲しいのではないから。理由はわからないが私への態度の急変したのに対し、私以外への人当たりがさほど変わつていないことも、この願いがあるとすれば合点が行く」

「なるほど……だから私たちには今まで通り優しかったんですね」

「付け加えると『提督に嫌われたい』という願いを実現可能時以外は他人格の時雨2さんが出て、普段通りに振る舞っている……推測ではありますが時雨さんの主人格は『嫌われる行為』に全力を注いでいると思われます」

「でもどうして？ 要因はわかつたけど理由が全くわからないわ」

「そうですなあ、そこまでして嫌われても時雨殿にメリットがあるとは思えませぬ」

「そう。結局我々は時雨の変化の要因はわかつたが、本音にはたどり着いていない。つまりこの行動の真意を究明することが目標となつてくる」

「やつと見えてきたわ。そこであんたのいつてた最終作戦ね」

「そうだ。これから私は時雨に対して過保護と思われるぐらい常にそばに付き、優しくする。どんなに嫌がつても貫き通す。具体的な方法の一つとして、手始めに秘書艦業務を今週から1週間全て時雨にやつてもらう。この鎮守府初の提督命令で強制的にな」「ちよ、ちよつと！ それが作戦な訳!? なんでそんな事する必要あんのよ！ 羨ま……じやなかつた、それで時雨の真意がわかるとは思えないわ！」

「待て待て、話は最後まで……」

「ダメ！ダメよそんなの！認められないわ！ダメつたらダメ！！」「曙光ちゃん……」

「ボノたん……」

「ツンデレジエンド曙さん……」

「何よそのかわいそうなものを見るような目！てか医者あ！なんでそのあだ名知つてんのよ！はつ倒すわよ！」

「まあ、聞いてくれ。作戦目的はシンプルに『嫌われること』を諦めてもらう、これだけだ。時雨の『嫌われたい』という想いは恐らく手段。真の目的のための行動の答えの一つだ。ならばこちらの対策は単純明快、その手段が無駄である事を本人に思い知らせればいいんだ。そうすれば自然と手段を変えてくる、その際にこちらから歩み寄ればいいだろう」

「つまりゴチャゴチャと理由は並べましたが内容としてはご主人が嫌いな相手だからこそ燃えるど変態ドM野郎になるってことであつてますかな？」

「提督が… 変態…」

「ほんと最低ね、時雨が悩んでるつづーのに、ふふつ」

「えー… 結構これでも眞面目に考えた答えなんだけどなあ…」

重苦しかつた雰囲気は若干明るくなつた。解決に期待がもてるようになつたのはのはもちろんだが、やはり時雨は自分たちの思う時雨のままだつた、そんな言いようのな

い安堵感が彼女達の緊迫した心を弛緩させたのだろう。医者と提督も含め全員が冗談を言えるほど顔の表情は緩んでいた。

(しかしながら、時雨……)

打開策は見出したものの提督は全くと言つていいくほど時雨の真意は理解できないでいた。だがこの提督の嫌われることが手段である、という考察は概ね正しかつたのであつた。

この問題の発端、時雨の変化の要因は半年前のある事件だつた

—3年前（時雨視点）

「提督が倒れた!?」

「はい……先ほど執務をしている最中に突然……。医者の診断によると過労らしいです」

「そんな……提督は大丈夫なの!?ねえ！」

「どうどう……。落ち着いて時雨ちゃん。今は落ち着いたわ。医務室で寝てるみたいだけど命に別状はないって」

「……そう……なんだ。よかつた……取り乱してごめん、明石」

「その気持ちは痛いほどわかるからいいわよ。それより提督の様子を見に行つてあげな

さい」

今の提督が新しく着任してから3年目の秋。たつた7人しかいなかつた鎮守府を救つた英雄は過労で倒れてしまつた。

提督が無理をし始めたのはたつた5人での新海域突破以降、ここで戦うことを志願する艦娘は大量に現れたのがきつかけだつた。

『私の管理さえ滞りなければ確実に艦娘一人一人の負担が少なくなる』

そういうつて提督はその志願を全て承諾し鎮守府は瞬く間に賑やかになつていつた。確かに彼の言つた通り出撃や遠征は日毎の交代制で行えるようになり、艦娘の休息の時間の増加につながつた。また鳳翔や間宮、伊良湖といった艦娘をサポートする艦娘も受け入れたため休息の質も大きく向上した。提督は変わりゆく鎮守府の様子を自分の子供の成長のように喜び、毎日嬉しそうに業務に励んでいた。

しかし僕らは知らなかつた。その笑顔の裏で、提督の負担が増え続けていたのを。新しい艦娘の受け入れ態勢を取つて以降、設備の改築、修理、新しい子の戦闘データの分析など提督業務は多忙を極め、ほとんど寝ていない状態が続いていたらしい。だが、元々艦娘とはほとんど接せず、執務室でほとんどを過ごしていたため周りの艦娘はもちらん、古参である自分たちですら提督の異変に気づくことができなかつた。その結果、ある日その疲労は限界に達し今回の事件が起きてしまつた。

急いで医務室に行くとベッドには提督、そして隣の椅子から提督のベッドに突っ伏して寝ている曙がいた。僕を見るや否や顔をゴシゴシと拭き、体勢を立て直した。目は赤くなり、まぶたは腫れ上がっていた。どうやら相当な時間泣いていたらしい。

「曙、こんなところで寝ると風邪ひくよ」

「……はえ!? わ、私寝てた!？」

僕の呼びかけにビクツとして跳ね起きる。顔を上げた曙の目は赤くなり、まぶたは腫れ上がっていた。どうやら相当な時間泣いていたらしい。しばらく恥ずかしそうに身だしなみを整えたり、顔を制服で拭いたりした後、静かに話し始めた。

「……医者からはもう大丈夫だつて、意識はまだ戻つてないけどじきに目を覚ますだろうつて……全く、ほんと馬鹿なんだから、こいつ。こんなに心配させて……」

「そつか、それを聞いて安心したよ、曙が言うなら間違いないね。見守つてくれてありがとう」

「べ、別にこれは……。まあこいつが来てからは多少この鎮守府もよくなつたし、モット一かなんだか知らないけど私たちのために動いてくれるみたいだしね。使えるやつがいなくなつたら困ると思つただけよ！」

「不思議な提督さんだよね。建前じやなく本当に僕たちを幸せにしようとしてるって今回件でよくわかつたしね」

「でも、それがわかつたのもこいつが倒れてからようやくよ。どうしてもつと私たちを頼つてくれなかつたのかしら、それだけが不満よ。あーあ、そんなに私たち提督様から見ると頼りないのかしらねえ？……つて時雨？どうしたのよ」

「……僕らが……頼りない……」

さりげなく言つた曙の言葉が僕の頭の中でこだまする。頼らないんじやない、頼れないんだとしたら。無理をしているのではなく無理せざるを得ないとしたら……？

心配してくれている曙の手を強く握つて僕はいつた。

「曙、僕ら強くなろう、もつともつと強くなるから、提督が頼れるように」

「……そうね。私たちはこんなもんじやないつて見せつけてあげましょ」

それから僕らは強くなるために必死に出撃した。有休だつてほとんど使わず、出られる日は全部出撃か遠征に当て、ひたすら毎日をがむしやらに過ごした。少しでも早く提督を楽にするために、頼つてもらえるようになるために。

そうした日々を過ごして約2年。遂に僕は適性検査の結果、大本営が認める最高練度に到達したとの通達が来た。総合的な実力は曙の方が上だが、最近出撃が減つている分、自分の方が見た目上、若干早く到達した。

「提督！遂にやつたよ！レベル99だよ！ほら見てよ！」

誰もが認める強さの最高ランクの数値に到達したのだ。文句なしこの鎮守府、いやこの国の最高戦力と言つていい。長年この日のために血の滲むような努力をして来たんだ。

「ああ、おめでとう、時雨。初めてあつた時よりずいぶん頼りになる存在になつた」

「だめだ、笑みが抑えられない。嬉しそうな提督とこれから頼つてもらえるそんな未来を考えるだけで喜びでいっぱいになつた。だがそんなときは一瞬で提督の口から出た言葉は僕を絶望に落とし込んだ

「ありがとう！これで提督も少しは……」

「さて！これからもつと忙しくなるぞ！準備準備つと！」

「……忙しく……なる……？……どうしてさ」

「さつき大本営から追加で通達が来てな、国の最高戦力のいる鎮守府としてより一層の設備投資をするよう、資金が下りたんだ。これからこれで色々とやつしていくつもりだ。……お前のおかげでこの鎮守府をもつとよくできる、改めて感謝したい。……あ、もちろん言葉だけとは言わんよ。この資金はいわばお前の努力の結晶。何か望みがあれば全力で応えよう」

「そ……そんな……望みなんて……僕は提督が楽になればそれで……」

「ははっ、さすが時雨、謙虚だな。まあ考えておいてくれ。今後はより一層お前のサポー

トに回る。雑務は私がやるつもりだから、時雨は出撃と遠征に集中してくれ、これからもよろしくな」

そのとき、自分の中へ何かが壊れた。

意識が切れた僕、目を開けると真っ暗な空間が広がりそこに一人の艦娘が立っていた。

「ここは……？」

『よう、目が覚めたかい。……てまあ覚めてはいないんだけどな。ここはお前の思考の中、お前は今意識を失ってるんだよ』

『そうか、あの後、僕は倒れて……。きみは……誰だ？ 僕とそつくりの姿をしているけど』

『そつくりも何も俺はお前が作り出したお前自身だよ。お前に本当の願いに反応してできた、な』

「本当の……願い？」

『ううさ、お前は提督から頼られたいんだろう？ その強い思いに反応して俺は生まれたんだよ』

『頼られたい……ね。ふふつおかしいや、おかしいよそんなの。だって僕の願いはつきつき夢く散ったんだよ。もう諦めたんだ、だから君が生まれる理由なんて元からないだよ』

よ

『へつ、情けねえな。お前、提督に対する思いはその程度だつたのか？やつすい魂だな。
最高戦力様が聞いてあきれるぜ』

「何言われたつてもう何も感じないよ、もう、怒る気力すらないしね」

『そんなダメダメなお前に一つ、いいこと教えてやろうか？提督がお前に頼つて、樂せざ
るを得ない状況を作る方法があるぜ』

「樂せざるを得ない……？ そんな方法あるのかい？」

『簡単さ、嫌われりやいいんだ』

「嫌われる……？ そんなの提督の心労を増やすだけじゃないか」

『ちげえな、根本的に考え方を変える。嫌われるのはあくまで手段だ。例えばよ時雨、お
前を嫌いな奴がいたとする。当然時雨本人もそうよくは思つてない奴だ。そいつは有
能で、時雨の命令には背かず、戦果は取つてくるがこつちに全く興味がない。そんなや
つがいたとして、お前だつたらどうするよ』

「その子、僕のことが嫌いなんだろ。だつたら勝手にやりたいようにやらせるね。命令
だつて必要最低限に……？ 嫌いな人間に興味なんてわかれないしね……」

『そうだ、その通り。嫌いな相手のために動き、気にかけるバカはそういうねえ。当の本人
が望まないなら尚更な。だがお前は有能だ、この鎮守府で一番と言つていいほどにな。

なら業務上頼らざるを得ない』

『……！ そうか…… どうでもいい相手だが仕事だけはしてくれる。なら選択肢は一つ……。僕をこき使う、きっとそれが望みだつて思つて……なるほどね。……君は僕の願いに反応して生まれたつて言つたよね。だつたらもちろん、この計画、協力してくれるんだよね』

『へつ、ようやくその気になつたか。…… 当然だ。お前の願いは俺の願い。叶うまでは嫌つて言つてもとまんねえからな』

「じゃあ…… よろしく頼むよ、えつと』

『しぐれでいいぜ。これからはおもてに立つからな。…… お前は嫌われることに全力を注げ、案外気力を使うからな嫌うことつてのは。俺はお前がその事態になる時だけ切り替わつてやる。いいな』

『確かに、それなら提督に対してのアプローチを考える余裕もできる。なるほど頭も切れるじゃないか……』

『じゃ、合意も得られたところで、これから作戦開始つてとこだな、提督に嫌われてみせろよ時雨』『もちろんさ、よろしく頼むよ、しぐれ』

嫌われることを諦めて、頼つてもらうために奮闘する提督と、頼られてもらうために

嫌われようとする艦娘。

二人の奇妙な攻防戦が幕をあけるのだつた。

対立

— 9 : 0 0 執務室

「へえ、あれから数日しか経つてないのにね。新手の嫌がらせかな？」

「そんなつもりはないぞ、時雨。あくまでお前の病み上がりの体調を管理できるようになるのが目的だ。他意はない」

「僕はむしろここにいるだけで気分悪いんだよね、わかるかな」

「それは大変だ。隣の部屋に秘書艦用のベットもある。使いたい時はいつでも使ってくれ」

「……チツ、最悪だね今日は。今日と比べれば他のどんな日だつて最高に見えると思うよ、ありが：とつ」ガンツ

「はつは、なんだそれ、時雨はポジティブだなあ。足痛くない？」

あの居酒屋での『提督嫌い宣言』から数日後、私は時雨を呼び出し、これから1週間秘書艦業務をやつてもらうことを告げた。露骨に嫌がり、舌打ちをし、机をわざと足で蹴った時雨は大きなため息をついて私の方を睨みつけていた。

『う、うわあ…。女つて怖いですな。演技つてわかつてもこの場には居たくないです

ぞ

『… というか提督様のメンタルの強さには驚かされますね。全く動じてないよう見えます』

『動じてないっていうより鈍いのよ、多方面で。時雨の言葉を皮肉だつて理解してるかどうかも怪しいわ』

『じゃ、じゃあ… ある意味適役中の適役つてことですね…。奇跡です』

執務室に仕掛けられた隠しカメラとマイクで一人の様子を見届ける医者と艦娘3人。私はいらないと言つたが、念のため本気で提督に敵意を向けて来た際にすぐに援護できるようにと取つた対策らしい。あちらの声も私の小型イヤホンから聞き取れるので、動きの指示もできるしまあ、いいだろう。

(なんかよくわかんないけど、医者以外にすごいばかにされてる気がするぞー??)

「さ、さて、早速仕事やつちやうかー！ ジャあ時雨はこいら辺の簡単な書類を午前中までに…」

「は？ なにそれ、僕をばかにしてるのかい？ こんなのは1時間もあれば全部終わるよ。

本当に指揮能力がないね、君と二人きりの時は無能提督つて呼ばうか？」

「そ、そうか。時雨は優秀だな、じゃあ終わり次第休憩していいぞ。無能提督かあ、曙にクソ提督つて言われ慣れてるから正直違和感がないのが怖いな」

「… ふん、張り合いがないね。僕はもう作業に入らせてもらうよ… できるだけ早くこの空間から解放されたいしね…」

曙、というワードに若干声のトーンを下げ、顔を曇らせた時雨。宣言通り、1時間と経たず私が指示した書類を全て片づけてしまった。そして何故か私の書類の方に目をやり、やり残しているものに手をつけ始めた。

「おい、いいって。これ終わったら休んでいいって言つたろ?」

「嫌だね。さつきも言つたろ、この空間から早く抜け出したいんだ。… それに随分僕を安く見てるようだからここではつきり実力を見せておかないと、腹立たしいんだよ」

「いやいや、十分時雨の実力はわかっている。単純に病み上がりのお前が心配なんだよ。そんなに量もないしな、ほら書類返せって」

「… くつ、う、うるさいなあ! やるつて言つたら黙つて渡せばいいだろ!」

私が返してもらおうとつかんだ書類を、反対から時雨が引っ張つた。勢いが良かつたのか書類を持ったまま机の横に尻餅をついてしまった。

「ちょ! 大丈夫か時雨! 無理するなつて」

「つてて…。誰のせいだと思つて… つて提督… ? 血が! 血が出てるよ! 僕のせいで…」

「ん? あ、本当だ。紙が擦れたときに切れちやつたかな。問題ないしお前のせいじやな

い、気にするな。それよりお前の方が心配で……」

運悪く提督の手の平を通った時に切れてしまったのか血が滲んで来た。みるみる顔を青くして動搖する時雨だつたが私の言葉を聞くと冷静になり、怒つてゐるような、悲しんでるような複雑な表情をした。

「……もういいよ、なんかもうやる気なくなつちやつた。ちょっと休憩してくる。……その手、消毒くらいしなよ、それくらいは無能な君でもできるだろ?」

そう言つた時雨はスッと立ち上がりと早足で執務室から出て行き、思い切り扉を閉め何処かに行つてしまつた。

結局時雨はその後お昼を過ぎても戻つてくることはなかつた。

『時雨殿、戻つてきませんな……』

「これも嫌われるための行為の一環なのかなあ、こちらとしては来てもらわないと作戦もありそ�うですが……」

『提督、時間も時間ですし、私たちも一旦お昼にしませんか？ 改めて作戦を見直す必要もありそ�うですし……』

「まあ、そうだな。とりあえず休憩にするか」

『あー、すみません、私はもう病院に戻らないといけないので、お昼は遠慮しておきます。作戦成功、祈つてます』

「わかりました。本当にありがとうございました。携帯で隨時報告しますね」

『はい、よろしくお願ひします』

「……さて、お前らも付き合つてくれてありがとう。お礼に今日はお昼おごるぞ」

『やつたー！』

「あー、曙？ さつきから声が聞こえないぞ？ 具合悪いか？」

『……あ、ごめん、大丈夫よ、心配してくれてありがと。…… ちょっと時雨のこと考えてて』

『キマシタワー！ ボノたんまさかの両刀ですかな！？ ご主人、聞きました！？』

「ん？ ちよ、ちよつと待て、漣の声が大きくて音が……」

『りよ、両刀つてなによ！？ 私は提督一筋よ！ バカ!!』

『曙ちゃん……。マイク繋がってるから……』

『あー！！ 今のはなし！ クソ提督！ 今の嘘だから！！』

『音割れしてて全然聞こえん……』

なにやらわからないが騒がしそうにしている3人。本当に仲がいいようで微笑ましい。自然と笑みをこぼしながら無線を切り、3人のいる部屋に向かう。

その途中、私は時雨のことを考えていた。

(早く何か解決の糸口を見つけたいんだが……。今のところ収穫はないな……。午後から

もつとこつちからグイグイ行く必要があるかもな)

一間宮食堂

「ちよ、ちよつと島風！またファストフード食べてる！たまには他のも食べないと体壊すわよ!?」

「だつて早いんだもーん！早くて安くてうまいんだよ！チキチー最高！コーラも最高！」

「なんで太らないのかしら？いつ……」

「ーそれでねー、吹雪ちゃんたら遠征で戯装忘れてきたんだよお、ドジよねえ」

「ちよつと！言わないでお……気にしてるんだから……」

「それはドジのレベルなのか……？」

「ダメだ……お昼は力が出ないよ……早く夜戦……エナジーを貯めなきや……」カシユ

「川内姉さん！食事をモンスターで済ませようとしないでください！」

「わかつたよー、じゃあこれで……」プシユ

「レッドブルもダメです！」

3人を連れて久々に食堂に来た。お昼時ということもありほぼ満席状態だった。好きな食事について口論するもの、会話に花を咲かせながら楽しく食事をするもの、食堂で全く食事をしないものと十人十色の過ごし方をする艦娘たちが散らばっている。先ほどの曙たちの絡みでも思つたが、やはり艦娘が自然に過ごしている姿を見るのは微笑ましい。

(ウンウン、みんな幸せそうだ。私まで嬉しくなつてくるな。だが食事の栄養面で少し問題があるようだな……しかし好きなものを食べるからこそだしな……)

「龍田殿！赤城殿！こんにちはです！」

「こ、こんにちは！」

「……ふん、早く行きましょ赤城さんはともかく、龍田に絡むところなどないわ」

「あらあら、相変わらずイケズねえ、曙ちゃんは」

「あなたの日頃の行いのせいでは？」

「だつて、曙ちゃんからかうと反応面白いんだものお…………つてあらあ？」提督じや

「ないですかあ」

「あらほんとですね、これは珍しい。どうしたんですか」

食堂の様子を観察し、考え込んでいた私に声をかけてきたのは鎮守府の主力の二人、赤城と龍田だつた。

入口近くに座つていた二人のテーブルには所狭しと次の作戦用の地図や関連の資料が広げられていた。どうやら次の作戦の見直しをしているようだつた。

(時雨の件は…… 真面目な二人だ。余計な心配をかける可能性もあるし黙つておくか)
 「まあ…… なんだ、色々とあって、今までの私ではダメだと感じてな。これからはもつと艦娘とコミュニケーションを取ろうと決めたんだよ。今日はその第一歩として曙たちと食事をと思つて食堂に来て見たんだ」

「なるほどねえ、私としては嬉しいけどお、無理はしないでくださいねえ」

「そうですよ。お気持ちはわかりますが、あまり自分を追い詰めないでくださいね。提督は今のままで十分素敵だと思いますよ」

「ああ、ありがとうございます。無理せず頑張るさ…… ところでそこに広げられているのは明日の作戦関係か? どれ、見直しが必要なら私も……」

私が地図に目をやり一人の輪に入ろうとしたとき、後ろの曙から服の袖部分を強く引つ張られた。

「クソ提督…… 私もうお腹すいたわ。おごってくれるんでしょ、早く行きましょうよ!」「ふふつ提督、可愛いお連れ様が待つてますよ。作戦は私たち二人で十分ですから、提督

は艦娘とのコミュニケーションという業務に専念してみては?」

「あらあら、私たちはお邪魔だつたかしらあ? ジエラシーなんて可愛いわねえ」

「あーもう! だからこいつらに絡むのは嫌だつたのよ! もう行くわよ!」

足早に去ろうとする曙に袖を引っ張られ、赤城と龍田の元を去つた4人はなんとか席を確保した。テーブルでの注文を終え、曙と私は先に料理を取りに行くのだつた。

「あんた… またカレーな訳? どんだけ好きなのよ」

「カレーはいいぞ。料理としてももちろんだが、まずこのバランスが素晴らしいんだ。ルーという下地に入る具材が織りなすハーモニー、だが決してお互いに喧嘩はしない。これは私のモットーにも通じるものがあるんだ」

「モットーに?」

「いいか、ルーは言うならばこの鎮守府。そしてこのカレーの具材たちはそれぞれ個性を持つた艦娘だ。例えば」のジャガイモは…」

「あ、あれって時雨じゃない? 声かける?」

「お前から振つたんだから最後まで聞けよ… 無論だ。作戦は進行中だ、接触できる機会は全てこちらからするぞ」

曙が指差した方を見ると、姉妹艦の夕立と話している時雨の姿が見えた。カレーのお盆を持ちながら私はゆつくりと二人に近づいたのだつた。

「一つてな訳よ。今度連れてつてやるぜ、めっちゃうまいぞ」

「楽しみっぽい！」

「あー、おほん。時雨、夕立、少し邪魔していいか？」

「あー提督っぽい！珍しいね、どうしたっぽい？」

「何、日頃あまり接せられてなかつたのを反省してな、ちょっとと話そうと思つたんだ」

「……ごめん夕立、僕もう行くよ。お昼は別の子と取つて欲しいかな」

私がきたのを確認した時雨は、すっと立ち上がり私をにらみながらその場から去ろうとした。先ほどの様子から察するに主人格に入れ替わっているようだつた。

「し、しぐれ……？ どうしたっぽい？」 イメチエンやめたっぽい？」

（イメチエンで通してたのか……つてか通つたのか……）

「ちょ、ちょうどいい。お昼がまだなら一緒に食べないか？」

「……うんって言うと思つたの？」 午前中の執務は仕事と割り切るけど、プライベートまで邪魔されるのは流石に困るんだよね」

「まあまあそんなさみしいこと言うなよ…… そうだ、今日は暇たちに飯おごるつもりなんだが、時雨たちにも奢つてやろう、これでどうだ

「やつたつぽーい！なんでもいいっぽい？ 提督！」

「ああ、いいぞ好きにしろ」

「なんでも…か。わかつたよ…じゃあさ、その提督が持つてるカレー、それちようだいよ」

さつきまでの否定的な態度からは一変、時雨は急にご飯に対して乗り気になつた。だがその言葉とは裏腹に何か思いつめたような、または覚悟したような表情をしていた。

「え？あ、ああ、これか。あーそういえば、時雨は俺と一緒にで昔からカレー大好きだもん。ほれ、さつきとつて来たばつかの出来立て間宮カレーだ。私の今日はカレーの気分でなあ氣があうじやな…」

「…提督・間宮さん…ごめん…」

トレイを受け取つたその瞬間だつた、時雨は私のカレーのトレイを食堂の地面に叩きつけた。飛び散る皿やカレー、そして大きな音は先ほどまでの食堂の空気を変え、一瞬の静寂が襲つた。

「し、時雨？ 手が滑っちゃたか？ すまん渡し方が…」

「そんなわけないだろ？ わざとに決まつてるじやないか…ふふつ…ははつ！ でも…これは気持ちがいいな！想像以上だよ！今日は最悪な日だつたけどこれで少しは気も晴れたよ」

「時雨!!! あんた何してるかわかつてんの!!」

落ちた皿の破片をしゃがんで拾っていると突然すごい剣幕の曙が時雨の胸ぐらにつけみかかった。

「…何つて、見てわからないのかい？ 提督が好きにしろっていうから、言われた通り好きにしたんじやないか… 何かおかしいかい」

「人の気持ち考えなさいよ!! 何企んでるか知らないけど、やつていいことといけないとの区別くらいつかないわけつつってんのよ！」

「何も企んでなんかいないさ。ただ僕はこの男のカレーをこうしたかつた、ただそれだけだよ」

「提督に謝りなさい、今日は時雨の日頃の行いに免じてそれで許してあげる」

「君は提督のなんなんだい？ むしろこつちが謝つて欲しいくらいだよ。… それに提督は優しいんだろ、こんな些細なこと笑つて許してくれると思うな」

「… 優しいわ、本当、バカみたいに優しいわ。私たちのことを思つて行動して倒れちゃうような人よ。でもね、そんな人だからこそ人一倍私たちの些細なことに気を配っちゃうの、小さな変化の原因を知るために無理しちゃうの。だから私は決めた、どんなに敵を作ろうと私だけはこいつを信じようつてね」

「… ぼ、僕は…」「もういい… てめえじゃ力不足だ。ここからは俺がやるよ（じ、人格が変わった？ なぜだ、私がらみの時は変わらないはずでは…）」

「さつきから聞いてりや提督提督つて……こいつのどこにそんなに惹かれるんだか……優しい面を被つてるかもしてないけどなあ、この男は『あの事件の犯人』かもしれないんだろう？」

「……しなさい」

「あ？ どうした、よく聞こえないぜ」

「……訂正しなさい。それは提督じやないつて結論が確かに出たこと、もうそんな可能性はないわ」

「結論だと？ 証拠もないらしいじやねえか。お前だつて反論はできないだろ。それつて

ぽかすんじやねえよ、艦娘殺しの……」

「訂正しろつつてんのよ!!!」

ガシャンと音を立て、曙に艦装が展開される。先ほどの怒りとはまた違ひ、明確で本気の敵意を時雨に向けているように感じた。時雨はそんな曙に全く怯まず、一つ小さなため息をついた後静かに口を開いた。

「……へえ……面白えじやねえか。曙！ お前がそいつを盲信して盾になるつていうなら、いいぜ。受けて立つよ。鎮守府最高戦力をなめんなよ」

「おい！ やめろ二人とも！」

時雨も艦装を展開し、お互いの砲塔が体に向けられている状態。先ほどの音で集まつ

た周りの艦娘もただならぬ雰囲気を察し、止めに入ろうとするが、伝説の5艦同士といふこともあり誰一人その場から動けずにいる。緊迫した空気の中曙が静かに話し始めた。

「最後通告よ。10秒以内にさつき言つたこと、全て訂正しなさい。誤解を与えた艦娘にも伝わるように大きな声でね。そうしなかつたら私躊躇なくあなたを撃つわ」「嫌だね、事実は事実だ。結論の出ていねえ以上、俺は絶対に訂正しないぜ。撃てるもんなら撃つてみろや」

「残念よ、時雨。せめて苦しまないよう沈めてあげる!!」

ガチャリと音を立て激しい轟音とともに曙、時雨の砲塔から砲弾が発射されたのが見え、二人の姿は煙に包まれるのであつた。

〈続く〉

決着その後

「残念よ、時雨。せめて苦しまないよう沈めてあげる!!」

曙の砲塔から光が出た瞬間に反射的に自分も引き金を引いた。
 （まずい！この距離で外せば大破は防げねえ！）

だがそんな思いを抱いた次の瞬間、砲塔を何者かに蹴り上げられ、体勢を崩された。発射された砲弾は、勢いよく放たれた矢によつて天井を突き破り、食堂の外に飛ばされた。

「そこまでです!! 何事ですかこれは!!」「曙ちゃん、提督の前でおいたはダメよお?」

ようやく事態を飲み込み目の前に広がったのは、艦装も展開せず弓矢と薙刀で対処した赤城と龍田の姿だつた。表情は普段通りで変わらないが、圧倒的なプレッシャーから有無を言わぬ絶対的な実力がにじみ出でていた。自分の砲塔に目をやると相当強い衝撃が加えられたのか、ひしやげて使い物にならなくなつていた。

「おいおい… 出た砲弾に打ち込んで軌道変えるなんて… バケモンかよ…」

「そんな… 私の艦装が…」

反対サイドの曙を見ると砲弾は真つ二つになつており、艦装もバラバラになつて足元

に無造作に転がつていた。しばらくの静寂が食堂全体を包み、一人の艦娘が驚嘆を漏らした。

「すごい……」

「「「「うおおおおお！・すげええええ！」」」

「「「これが伝説の5艦の実力かあああああ！」」」

「「赤城（龍田）さんかっこいい！！」」

その小さな驚嘆は多くの艦娘に伝播し、食堂全体の歎声へと変わった。目をキラキラと輝かせるものや夢中で写真をとるもの、うつとりと二人を眺めるものなど多数いたが、誰一人被害を受けた様子はなかつた。

「けほっ・・・けほっ・・・。くそつどうなつたんだ全く・・・」

「て、提督！お怪我はありませんか!?」

「大丈夫よ赤城、この人案外タフなんだから」

「ああ、龍田、赤城か。様子を見るに、この騒ぎを止めてくれたのだな、すまなかつた。私なら大丈夫だこの通りピンピンしている。それよりもしかしたらこの騒ぎで周りの艦娘の誰かが怪我をしているかもしけん、至急巡回してくれ。念のため食堂で被害があつた付近全域を頼む」

「わかつたわあ、切つちゃつた砲弾、爆発しないうちに処理もしないいけないし、その仕事は私がやるわあ。とりあえずそこの伸びてる夕立ちゃんを保健所…じゃなかつた保健室に連れて行くわねえ」

特に大きな爆発はなかつたものの、砲弾が出た時の衝撃をもろに食らつた夕立は目を回して倒れていた。それを軽々と持ち上げた龍田は他の艦娘に怪我はないか呼びかけつつ、目で追えないようなスピードで保健室へと向かつていつた。

艦娘は人間よりも丈夫で身体能力もかなり高く作られている。深海棲艦と戦うため、ある程度人間離れした動きをしてなんら疑問は浮かばない。だが、この二人はそのような能力を持つ同じ艦娘から見ても異常な存在だつた。

(赤城といい、龍田といいこの鎮守府の上位層はどうなつてやがんだ…：人間離れ：いや艦娘離れしそぎてる。今も震えが止まんねえ)

俺は得体も知れない畏怖と驚愕で動けないでいたが、曙もそれは同じようでぺたんと壊れた儀装の近くに座り呆然と穴の空いた食堂を見ていた。

ー保健室

食堂に残つた赤城の無言の圧力で連れてこられた俺と曙は正座させられ部屋の隅でうなだれていた。少しでも逃げようとすると龍田の遠慮ない薙刀での牽制が飛んでくるためそれもどうに諦めた。

「改めてすまんな、二人とも。迷惑をかけた。龍田、夕立の方は無事か？」

「ええ、命に別状はないし、怪我もしていないわ。軽い気絶みたいよお。あ、それから周りの艦娘も特に目立つた被害はなかつたわ。」

「そうか、とりあえず一安心だな、ありがとう。では赤城、改めて今回の騒動の被害報告を頼む」

「はい、ではご報告させていただきます。物的被害に関しては曙、時雨の艦装と砲弾2発が大破、食堂の床と天井の一部が破損しました。しかし人的被害に関しては龍田が説明したように現状ではゼロです」

「うむ、了解した。一先ず一件落着かな。では今回の損害を至急大本営に報告する必要がある。事件の発端である私が抜けるのは心苦しいが、後のことは頼む」

「了解です（よお）」

提督はその場から出て行き、バタンと扉が閉められると赤城が龍田に監視されている俺たちの方に歩いてきた。

「さて……説明してもらいましょうか、どうしたらこんなことになるんですか全く」

「へっ、説明はいいけどよ、まず言わせてもらうぜ、俺は悪くない……。「今回の件は全て僕が悪いです。提督からいたいたいた物を粗末に破棄した挙句、ひどい悪口を言つてしましました。曙が艦装を展開してしまったのもこれが発端です。曙は提督を守ろうと秘

書艦の義務を果たした、それだけで非はありません。ですので今回の責任は自分に全て取らせてください。…本当に申し訳ありませんでした』『おい！何言つてんだよお前！』

「時雨…あんた…」

主人格である時雨は懇切丁寧に事情を説明したのち、頭を床に押し付け深く謝罪と反省を示した。その様子を見ていた曙は状況が掴めずただ時雨の方を睨んでいた。

「あらまあ…あの時雨ちゃんがそんなことを…」

「…にわかには信じられません。曙、本当なのですか？あなたをそこまで怒らせる」となんてそんなに…」

「僕は『例の事件』を掘り返して提督を罵倒しました… 僕は彼を犯人呼ばわりしてしました!!」

それまでは要因を探るように優しい声色で接していた二人だつたが
その単語が飛んだ瞬間、目の色が変わった。

「なるほど…。それは確かに時雨さんに非があるかもしれませんね… 合点がいきました」

「曙ちゃんが怒つたのも納得ねえ… 私だつたらこんなじや済まなかつたかも… まあでも今回は時雨ちゃんの日頃の行いに免じて許してあげるわあ」

「時雨、曙、今回の騒動、大方把握はできました。それを踏まえた上で伝えなくてはいけないことがあります。まず艦装は決して……」

結局その日は赤城さんの2時間に及ぶお説教を受けた後、喧嘩両成敗として曙と食堂の修理と間宮食堂での配給業務、に携わり1日が終わった。その間、僕と時雨は一言も会話を交わすことはなかつた。

部屋に戻ると、夕立はまだ保健室にいるようで、自分一人だけの状態だつた。それを確認すると他人格のしぐれがここぞとばかりに文句を言って來た。

『おい！てめえ、なんであの時勝手に入れ替わつたんだよ！でしやばんなよ！』

「全く……文句を言いたいのはこつちだよ、いいかい。疲れているから手短に話すよ。今回の一件で君に言いたいことが2つある。1つ、『例の事件』について触れるな。あれはそんな簡単に口に出していいことじゃないんだよ。今後一切あの話はしない、いいね」

『はあ？ 僕が共有した記憶では……』

「いいね？」

『ちつ……。わかつたよ』

『2つ、僕の許可なしに勝手に行動しないで。君の行動は過激すぎるし短絡的だ。何か行動を起こす際は僕に相談、いいね』

『へつ、それについては俺も言いたいことがあるぜ。俺が勝手に出て来たのはお前があまりに中途半端だからだよ。何を迷つてるのが知らねえけどあんなんじや作戦が進まねえよ』

「それについては反省している。確かに僕は覚悟が足りなかつたかもしれないそれは素直に直すつもりだよ。でもね僕が言いたいのはそこじやない」

『じやあどこだよ、俺の行動は強引かもしだれねえけど、あくまでお前の願いの後押しをしてるつもりだぜ?』

「その『後押し』が問題だつたんだよ。この鎮守府で一番厄介な二人に目をつけられたんだからね。もう後の祭りかもしれないけど今後は一人への接触は全て僕がする。特に龍田は一番慎重にいかなきやいけない相手だつたのに……」

『確かにあの二人の実力は別格だ。敵にまわしたくはねえよ。……だがよ、今回の作戦にそこまで影響出るもんなのか?』

「それに関しては明日以降、嫌という程わかると思うよ。……」

『……そりや楽しみだ』

時雨のこの言葉、正直ピンとこなかつた俺だつたが、次の日から俺は思い知つた。二人の本当の恐ろしさを。

〈続く〉

2つの障壁

騒動から一夜明けた朝。俺は秘書艦業務のために執務室の前に来ていた。正直、提督に嫌いと言つてしまつた手前、こちらから接するのは不自然だと感じていた。だが、運がいいのか悪いのかあつちの方から接触する機会を振られたのはこちらにはとても都合が良かつた。

（昨日でだいぶ嫌われた気がすつからな…。もうひと押しを今日の秘書艦業務で…まあ若干気まずい感もあるけどな）

「何やつてるのかしらあ？」

その声が聞こえたと思つた瞬間、掴もうとしていた執務室のドアノブがスパッと切れ足元に転がつた。それに遅れて風を切る音とともに目に前に薙刀が現れ、思わず俺は尻餅をついてしまつた。

「つ……！　つぶねえな！　何考えてんだ！」

「それはこつちのセリフよ、時雨ちゃん？　昨日の今日でどうして提督のそばに行けるなんて思えたのかしら」

「なつ… 龍田…」

そこに立っていたのは先日の夜、噂していた張本人の龍田であつた。その姿を見るや否や、主人格の時雨が瞬く間に表に立ち話し始めた。

「……えっと、ごめん、龍田さん、僕今日は提督に呼ばれているんだ。僕の意思できた訳じやないよ」

「あらあ、そうだつたの。私つたら早とちりしちやつたわあ、ごめんなさいねえ」

「いやいや、気にしてないよ。実は昨日から一週間、提督の命令で秘書艦業務を頼まれる……」

「じゃあ、今日からもう来なくていいわよ、というか来ないでねえ。提督の命令なら心配しないで、その間は赤城に秘書艦を頼むし、提督にはあなたは体調不良とでも伝えとくわあ、これでいいでしょ？」

緩んだ口元とは裏腹に、目は氷のように冷え切つた龍田から突然の秘書艦解雇宣言をされてしまつた。優しい口調ではあるがその言葉の端々にはナイフのような鋭さが垣間見える。

「なつ……なんで急に、別に僕は提督に危害を加える気なんてさらさら……」

「時雨ちゃん、あなたは昨日提督に敵意を向けた挙句、彼の近くで艦装を開いたの。危害を加えようと思つてなかつたとしても加わる可能性はあつた、これは事実よ。そんなあなたの言葉が信用できると思うかしら？」

「確かに…… そうかもしれない。でも僕だつて流石に昨日はやり過ぎつたつて反省して
るんだ。謝りたいことだつてあるよ……」

「もちろん、このまま一生このままな訳じやないわ。あなたが信用に足る人物で、提督に
対して害がないと私たちが判断できれば、それ以降はこれまで通り接してもらつて構わ
ないわ。だからその判断が下るまでは、提督からは離れてねつてだけよお？」

「わかつたよ…… で、でもさ秘書艦業務は仕方ないにしても、話すことすらできないつ
てのは……」ドンッ

「あなた、さつきから何か思い違いをしてないかしら。これはお願ひじやなくて命令。
昔のよしみで多少譲歩してこの程度の罰にしてあげてるだけで、あなたが変な気を起こ
すならより重い罰にしても構わないのよ？」

執務室の前に刺さつた薙刀に自然と身が震える。たとえ古くからの仲間であろうと
提督に仇なすものは容赦しない。そんな躊躇のない薙刀での無言のメッセージは本能
的に僕を震えさせたのだつた。

「は、はい。わかりました」

「ふふつ。分かればいいのよ。しばらくはおとなしくしててねえ」

結局提督の姿はおろか、声すら聞くまでもなくとんぼ返りで自室に戻つてしまつ
た。

『なるほどな…。こりやあ厄介だ。あの様子じや提督側も赤城が俺に近づけないよう
にさせてるのは明白だな。これじや作戦もクソもねえ…』

「はあ…。わかつてはいたけどやつぱりこういう事態になつたか。龍田はね、根はとて
もいい人なんだ。気遣いはできるし誰にでも面倒見がいい。ただ提督のことになると
なんというか…：かなり攻撃的になつちやうんだ」

『んなもん見りやわかるぜ、怖えなありや。俺が下手に挑発したらマジでぶつた切つて
きそうな勢いだぜ』

「そこまではしないとは思うけど…。障壁になつたのは間違いないね。ただまだチャ
ンスはある』

『チャンス？』

「龍田の遠征中を狙えばいいんだよ。あの人のことだから代わりを用意してはいるだろ
うけど、本人に比べたら提督に接近する難易度はかなり下がるはずだ』

『そうか！　その手があつたか！　あいつが不在つてなりや最大の障壁は突破したも同
然つてわけだ。遠征に絞つたのは不規則な帰りの出撃より時間も読みやすいからか？』

『そう。こちらの猶予も把握したいしね。この日なら執務室に入るのは厳しくてもお昼
くらいになら接触可能なはずだ』

『うつし。決まりだな、じやあ確か次の龍田の遠征が明後日だったかな。その日に作戦

決行だぜ』

「ああ、絶対に成功させよう」

—翌々日 食堂前

「おいおい……聞いてないぜそりや……」

龍田が早朝から遠征で不在の今日、俺は昼時を狙つて再び提督に接近を試みようとし
たのだが……

「前方！ 異常なし！ 提督殿、赤城さん、どうぞご使用ください！ 瑞鳳！ 事前偵察の
報告頼みます！」

「個室周りおよび食堂周囲も不審物も見当たりませんでした！ 心配ありません！」

「了解、報告ありがとうございます。赤城さん、食べる間は私たちがドアの前で見張りに就きま
す。あなたは気にせず提督とお食事なさつてください」

龍田が何を吹き込んだのかはわからないが、提督の周りにはこれでもかというほど警
備の厳戒態勢が敷かれていた。食堂の個室で死角がない場所を選び、その入り口には見
張りであろう、飛龍と蒼龍が立っている。見回りに飛鷹とその艦載機が鎮守府の周りで
常に監視しており、食堂の入り口には翔鶴、瑞鶴が入るものすべてを入念にチェック
している。

「あ、あの蒼龍？ そこまでしなくてもいいのよ？ 提督なら私にいるだけで十分……」

「ダメです！ 提督とあなたの身に何かあつたらどうするんですか！ それに、龍田から帰つてくるまでは提督にどんな艦娘も近づけるなど伝言を受けています。理由はわかりませんが緊急事態だと考えての行動です。本日はFC一同総動員して赤城さんを見守……じゃなかつた守らせていただきます！」

「龍田……またあの子、説明ほどしないで……わかりました。えつと……瑞鶴さん？ お願ひしますね。」

「はっ！ この命に代えても使命を果たします！ a l l h a i l A K A G I ! 」

「「 a l l h a i l A K A G I ! 」」

統率のとれた号令とともに、頭に赤城命と書かれたハチマキを巻いた警備隊一同は自分を持ち場につき、警備を再開した。

「赤城、加賀と何を話してたんだ？ それにこの警備はなんなんだ、朝から思考が追いつかんぞ！」

「すみません提督、どうやら昨日の騒ぎを過敏に反応した艦娘の自主的な行動みたいですね……あとで私から言つておくので気にしないでください……」

「え、ああ、まあ、赤城がそういうなら……気にしないでおこう……」

その様子を傍で見ていた時雨は若干、いやかなり引いていた。

「おい！ 聞いてねえぞ！ なんなんだよあいつら！ 頭のハチマキも相まって完全にや

ベー集団じやねーか!』

『あー… あれは赤城ファンクラブの皆さんだね… きっと龍田さんが警備をお願いしたんだ』

「ファ、ファンクラブ? 赤城つてそんな人気あるのか?」

『人気なんてもんじやないよ。憧れ通り越して神格化されてるからね赤城さん。あの隊の結束力はすごいよ… ある種龍田と同じレベルで脅威だよ…』

「こりや… ダメだな…』

『だね… これじやあ龍田いる日の方がまだ可能性ある気がするよ… まあないけど…』

ただでさえ接触が厳しいのに、それに加えて統率のとれた軍隊のような艦娘がいたるところに配置されたとなつては、作戦決行を断念せざるを得なかつた。

事件から丸7日、龍田と赤城(の周り)によつて会うことが許されない状況となり、俺の作戦は完全に封印されてしまつた。時雨とも話し合つた結果、とりあえず打開策が見つかるまではおとなしくしているのが賢明だと判断し、龍田の言いつけを守ることにした。

そんな俺の様子を見た龍田は提督から大量の遠征をもらつてきてはこれは罰だと言つて俺に行かせるようになつた。暇を持て余すことになつた俺に気を使つてくれた

のだろうか、それとも嫌がらせ？

しかし、そんなことを考えながらも、やることもない俺ははおとなしく朝から晩まで遠征に参加するのだつた。

8日目の朝、いつものように龍田から遠征の依頼がきた。その日は風も強く、雨が降つており朝から憂鬱な気分となつた。

「はああ……。結局今日も打開策は思いつかず……かあ」

「あー、時雨ちゃん、ちよつといいかしら」

「な、なんだい？ 龍田さん！ 僕何か悪いことしちゃつたかな？」

「もー、そんなに怖がらないでよお、私だつて傷つくのよ？ あなたに伝えることが2つあるわあ。1つは今日の遠征は初心者の駆逐艦を中心に連れて行くとのことだから、その指導、手助けをお願いするわあ」

「なるほど、わかつたよ。最近入つた子の育成が目的かな？ 先輩として教えられるところは教えるよ」

「うん、いい返事よ。もう一つは報告よ。最近のあなたの様子を見てて昨日、赤城さんと話し合つたの。それでそろそろ時雨ちゃんの罰も終わりじやないかなつて判断になつたわ」

「え？ ということは……提督にあつていいんだね！」

「ええ、そういうことよ。… ただし、会うのは今日の遠征が終わつたらねえ、帰つてきたら私に一声かけて頂戴。そこでまた話をするわあ。… それにしても随分嬉しそうねえ」

「あつ… そ、そうだね、別に提督は嫌いさ。でもちゃんと言いたいことを言えなくてモヤモヤしてたんだ、全く嫌になつちやうよ、もう」

「ふーん、ふふつ、そういうことにしといてあげるわ。じゃあよろしく頼むわね」遠征に送り出された僕は雨なんて吹き飛ばせるくらいの勢いで急いで飛び出し、ほかの艦娘を先導し目的地へ向かうのだつた。

朝、時雨を見送つた後、龍田が自室に戻ると、龍田が時雨から誕生日にもらつた湯飲みにヒビが入つていた。

「あらあ、湯飲みが急に…」

—執務室 昼

朝よりもさらに雨は激しくなつていた。

「うーむ、雨がひどいが遠征組は大丈夫だろうか。確か今日はその中に時雨もいたよな、赤城？」

「はい、いますね。今日は比較的安全なエリアでの遠征でしたので、提督の指示通り時雨には旗艦をやつてもらい、経験の浅い艦娘の指導に回らせました。彼女とでも嬉しそうだつたと龍田が言つていました」

「うむ、ありがとう。あの騒動以降、なぜか全く顔を合わせられず心配だつたからな。元気そうで何よりだ」

「あ、それで時雨の件なのですが、今日の遠征が終わつた後にでも会つてくれませんか。そろそろ彼女も心の整理がついて話したいこともあるんじやないかと…」

「おお、それはもちろんだ。私からも色々と伝えたいことがあるしな」

「あんまり怒らないであげてくださいね、時雨もきっと何か考えがあつて…」

バンツ

「… つはあ、はあつ… 失礼します！ 大淀です！」

「落ち着きなさい、大淀。どうしたのですか、何かトラブルですか」

息を切らせて執務室に飛び込んできたのは普段から遠征、出撃の管理をしている大淀だつた。相当焦つてているようで報告の紙はくしゃくしゃになつており、上がつた息とともに話せない状態だつた。赤城に諭され、ようやく息が落ち着くと、大声で叫んだ。

「たつ、大変ですっ！ 先ほど部隊の一人から報告があり、時雨旗艦の遠征部隊が壊滅したとの情報が!!」

パリンツ

龍田の自室の湯飲みは二つに割れ、地面に転がるのだつた
〔続く〕

壊滅の真相

一遠征開始直後

「ひい、ふう、みい……うつしこれで全員だな。今日はよろしく頼むぜ」

「「よろしくお願ひします！」」

「いい返事だ。じゃあ出発すっか」

雨が強く降り続ける中、俺の遠征部隊は目的地へと出発した。部隊編成は俺を合わせて4隻。新しく入った睦月型の睦月、弥生、皐月、そして旗艦の自分で構成されており、自分以外は遠征は初とのことだった。

「き、旗艦が時雨さんなんですね……。足を引っ張らないでしようか……心配です……」「えっと、目的地に着いたら、種類ごとに詰めて、出発前には量を確認して……それからそれから……」

「み、みんな緊張しすぎだよ。今回は簡単な航路だし、距離もそこまで遠くない。学校で教わった通りやれば問題ないさ」ガシツ

「そうだな、皐月。だが、とりあえずお前が一番落ち着け。さつきから俺が抑えてねえと変な方向に進んでんぞ」

新人の弥生を先頭に向かわせ、俺はあえて一番後ろでそれを見守る形で進んでいた。目的としては地図を見ながらゴールまで到達できるようになると、逐一全員の様子を確認できるようにするためなのだが……。初めてということもあり、3人とも緊張と不安でガチガチであった。

「へへっ……懐かしいな、俺も緊張したもんだぜ、初めての遠征は」

「し、時雨さんも私たちのような時代があつたんですか……？」信じられません……

「あー、あつたよ、俺なんかは心配性でよ、遠征前から怖くて眠れなくてな。そのまま一睡もせずに向かつたんだぜ。そのせいなのかミスしまくってよお、周りにや迷惑かけまくったのを今でも覚えてるぜ」

「い、一睡もせずに!? そんなんじやまともに……」

「ああ、そりやもうフラフラで向かつてよ、途中で転んで小破するわ、積んだ荷物おいて行くわでそりやもう散々だつたぜ。当時の旗艦だった龍田にも『こんなできの悪い子は初めてよお』なんて笑われたつけな。ははっ」

「……でも、やっぱり信じられません。今の時雨さんはこんなに強くてかつこいいのに……」

「旗艦の龍田にな、そのあとこうも言われたんだ。『不安は持つておけ、緊張はしておけ。その全てを払拭できるまでは心に刻み込んでおけ』ってな。そこで気づかされたんだ。

俺は周りに迷惑をかけないかそればつかりが不安で、実際にはどうしたら改善できるなんて考えは浮かばなかつたんだつて。きっと龍田は俺のそういうとこを見抜いてたんだと思うぜ」

「不安を… 刻み込むですか…」

「ああ、誰しも最初は不安なのは当たり前だ。大事なのはその不安と向き合えることができているかどうかだ。一步ずつでいい、それを潰して行くだけだ。それがわかつてからは俺は毎回の遠征、出撃が少しずつ楽しくなつた。もつと強くなれる場なんだつてことを理解できたからだ。そしたら自然と周りを守れるくらい強くもなれた、それだけだ」

「… 今日のこの気持ちを大切にして、次回はもつと強くなるようにする、ということですね。確かにそう考えると頑張ろうつて思えてきました」

「そういう積み重ねなんだよ結局、お前らだつて絶対に強くなれる。だからまずはこの遠征、成功させるためにはどうするか考えな」

「「はい！」」

そんな小話をしている間に、無事に目的地に到達した。しかし資材調達している間も雨はさらに激しさを増し、所々では雷がなつていた。予想外の天候の悪化に当時の予定を切り上げ、早々に撤退することを決めた。

「雨、すごいですね。嵐になるかもしません…」

「こりや、早く帰らねえとまずいな。資材は持てるだけでいい、帰るぞ！」

「「「了解です」」

その時だつた。一瞬近くで光つたかと思うと、大きな爆発音とともに砲弾が睦月をめがけて飛んできた。

「避ける！ 睦月！」

その言葉とともに、反射的に俺は睦月をかばい被弾した。幸い当たりどころが良く、艦装の一部が壊れる小破で済んだ。が、周りの状況は最悪だつた。天候が悪くよく見えないが、少なくとも10隻はいるであろう、おびただしい数の敵。それは激しい雨の音に隠れ、いつの間にか自分たちを囮む形で接近していく深海棲艦だつた。

「時雨さん！！ ごめんなさい！ 私がぼーっとしてたばっかりに…」

「嘘…。どうしてここに深海棲艦が…」

「俺のことは気にすんな！ それよりよく聞け！ 全員資材を全部捨てて、艦装を展開して目を塞げ！ 今からこの緊急用の閃光弾をあいつらにぶつけて、砲撃する！ 俺が合図したら、お前ら3人は俺が開けた穴から脱出して鎮守府に戻れ！ いいな！」

「そんな！ 3人つて… 時雨さんはどうするんですか！」

「俺はあいつらを引きつける！ その間に逃げろつってんだよ！」

「おいてなんかいけないです！時雨さんが被弾したのは……私のせいなのに……」

「そうですよ！いくら時雨さんでもこの敵の数で一人で挑もうなんて無謀です！私たちも戦います！」

「勘違いすんな！お前らにも鎮守府への報告つていう大事な役目があるんだよ！この状況を伝えられるんはお前らだけなんだから。それを全うしろ！」

「でも……でも……わたしい……」ポンツ

俺に庇われた自責の念からか、睦月の頭を優しく叩いた。涙目になりながらもこちらを見た睦月に俺は諭すように話し始めた。

「バーカ、安心しろ。このくらいの敵の数、時雨さんにとっちゃ屁でもねえよ、全員ぶつ潰して土産話聞かせてやるよ。だからたのむ……今は俺の指示に従ってくれ」

「わかり……ました。……必ず使命を果たしてきます！時雨さんもどうかご無事で……」

「絶対に帰ってきてくださいね！！」

「おうよ！帰りは豪華な出迎えに期待してるぜ！じゃあ……行くぞ！作戦開始！」

俺は閃光弾のピンを抜き、敵に向かつて一直線に投げた。一瞬の眩い光に包まれた敵艦隊は動きを止めた。その一瞬の隙の間にできる限りの砲撃をし、爆発は深い煙の壁を作った。敵部隊に致命的な損害は与えられなかつたものの、包囲網に穴を作るには十分

だつた。

「いまだ！ 早くいけ！」

一瞬できた穴に滑り込むように3人は全速力で離脱。それを捉えようとする深海棲艦だつたが、時雨の猛攻により動きが鈍つたおかげで、無事脱出に成功。煙が晴れる頃には3人の姿は遙か遠くにあつた。

「うつし・ とりあえず、第一関門突破つてとこだな。後はこいつらだな」

接近してきた敵の数は20…いや30はいるだろうか。統率のとれた部隊のリーダー格らしき深海棲艦が先頭を切つてこちらに話しかけてきた。

「… ワレワレモナメラレタモノダ。ナカマヲカバツテノコツタノガ、テオイノクチクカンイツセキノミトハ」

「へつ、実力差考えりや、この傷だつてハンデになつてちようどいいくらいだぜ、こいよ、まとめて相手してやんよ」

「ソノヨユウ、イツマデモツカナ！ クラエ!! イツセイシャゲキ!!」

「上等だあ！ 齒あ食いしばれよ！」

無数の砲撃が雨に混じつてこちらにめがけて飛んできて、瞬く間に時雨の周りは硝煙に包まれたのだつた。

それから俺は長いこと戦い続けた。四方八方からくる砲撃の雨を避けつつ、無我夢中

で応戦し、一体、また一体と撃破していった。途中避けきれず何度も被弾したが、相手が全員いなくなるまでは決してその砲塔を下すことはなかつた。

「バ、バ… カナ… タツタヒトリノクチクカンゴトキニ…」

「ハア… ハア… これで終いだ、あばよ。久々に乐しかつたぜ」

「バカナアアアアアア!!!」パアン!

最後の深海棲艦を撃破し、俺は近くに岩場に寄りかかつた。

夢中で気が付いていなかつたが、戦闘が終わる頃には、体はボロボロで艦装は半壊、片腕の感覚は全くない状態であつた。激しい雨に体温を奪われ、体力は激しい消耗をしていたせいで意識は朦朧としていた。

「つてて… 無様だな… すまねえ時雨。てめえの体こんなにしちまつて…」

『ふふつ、いいんだよ。むしろありがとう。本気での子達を守ろうとしてくれて、素直に嬉しかつた。君は本当の強さを持つていたんだね。それがよくわかつたよ… 色々とひどいこと言つてごめんね、僕君のこと全然わかつてなかつた』

「鎮守府の仲間を守るのは当たり前だ… それに謝らなきやいけねえのは俺の方だ。ここ数日の記憶の共有の中で、お前がどれだけ提督や周りの艦娘をよく思つてゐるか、大事にしているかがわかつた」

『まあ、この鎮守府には思い入れもあるしね、僕って心配性だから余計に周りを気にしちゃうんだ』

「…なのに俺は… そんなお前に『嫌われればいい』なんてひどい提案しちまつた。その行為がお前にとつてどれだけ酷なのか、辛いのかなんて考えもせずに、問題の解決に比べれば些事なものだとタカをくくつちました』

『提案したも何も君は僕だろ？ それにその提案に乗つたのも、嫌われることを解決の糸口と判断したのも僕自身だよ。謝るようなことじやない。君の言う通りそれ以外なんて些事なことだよ』

「ふつやつぱすげえよ… お前は俺に、本当の強さを持つてるつて言つてたが、そんなことねえ。お前は強い、俺なんかよりよっぽどな…」

『ふふつ、それは自画自賛ととつていいのかな？』

「へへっ… そうかもな。お前は俺で、俺はお前だからな。さすがは俺だぜ… うつ… クソつ… こりやまずいな…』

混濁する意識の中、お互に笑い合い冗談を投げかけあう二人（一人）だつたが、次第に、意識は薄くなつて、走馬灯のように今までの記憶が蘇つた。

『提督… ごめん…』

歪む視界の中で時雨の言葉とともに流れる涙は、雨にかき消されるのであつた。

一同時刻 鎮守府

龍田は湯飲みの不吉な予兆に不安になり、港付近で時雨の部隊の帰りを待っていた。しかし遠征の帰りの時間になつても彼女たちは帰つて来ず、不安はより大きなものとなつていつた。

「おかしいわね……。初心者がいるとはいえあの時雨ちゃんがここまで大幅に遅れるなんて……あら……あれは?」

予定時間より30分が過ぎたあたりだろうか、時雨部隊らしき艦娘が息を切らして帰ってきた。だがその部隊の中に時雨の姿はなかつた。よほど焦つているのか何度も転びそうになりながら鎮守府に行こうとする3人を呼び止めた。

「あなたたち、どうしたのよ? そんなに慌てて。時雨ちゃんの部隊の子よね?」「た……龍田さん! 大変なんです、時雨さんが……時雨さんが私たちを庇つて……深海棲艦に一人で……つて龍田さん!? どこへ……」

皐月がそういかけた次の瞬間、艦装を開いた龍田が鎮守府を飛び出したのだつた。

時雨の願い

(温かい…… 大きな何かに包まれているような……)

意識を失つてから、体のかすかな振動と浮遊感で再び目を覚ました。曇げな視界に一人の人物を捉えた。だが体が言うことを聞かず、薄眼を開けて確認する程度しかできない。かなり焦っている様子の彼女は頻りに「ごめんなさい、ごめんなさい」とブツブツと言っている。

(誰だろう…… 僕を運んでいる……？ でも……ダメだ…… 力が入らない……)

時雨は再び深い眠りについたのだつた。

「ここは…… 見覚えのある天井だ……」

「目が覚めた？ 全く、3日もねむりこけるなんて、いいご身分ね」

以前、他人格が生まれた際に運ばれたときと同じ、鎮守府の医務室だつた。横には座つてリンゴを剥いている曙が優しそうな目で僕を見つめていた。

「医務室…… 僕は深海棲艦と戦つて…… はっ！ 阜月たちは！？ くつ……」

「こちら、無茶しないの。いくら艦娘といつても今回はかなり重症だつたんだから、しばらくは安静にしてなさい…… それに安心して。阜月たちなら無事よ、私たちにあんた

のこと、事細かく報告してもらつたわ」

「… そうか… よかつた、みんな無事帰投できたんだね…。僕をここまで運んでくれたのは曙かい？ なんて言つたらいいのか…」

「運んだのは私じゃないわ。 龍田よ。 それにあんたが無事だつたのも半分はあいつのおかげなんだから、お礼はあいつに言いなさい」

「た、龍田さんが!?」

「そうよ、本当はあいつから口止めされてるんだけどね、まあ悪いことでもないしね。全部伝えとくわ」

その後、曙から僕が意識を失つた後のことと説明してもらつた。龍田が提督の命令を無視して、単独で僕を助けに行つたこと。帰つてきて自分の血を迷わず輸血させたこと。そして僕が目を覚ますまでの3日間、医者よりも長く自分の元につき、ほぼ徹夜で僕の看病をしてくれたこと。その報告のすべてが僕の胸に突き刺さつた。

「あんなに焦つた龍田を見たのは初めてだつたわ。医者にもう大丈夫って言われてからもご飯だつてろくに取ろうとしないであんたの手を握り続けてたわ。こつちが心配しちやつたわよ」

「龍田さんは!? 今どこに!?」

「落ち着きなさい、あんたらしくもない。 龍田は遠征に出ちやつたわ、ちょうどさつき

皐月たちを連れてね。『あとはよろしく』って私にりんご押し付けて出てつたわ。いつも照れることあるのね』

「…………」

「……とりあえず、あなたの目覚め、提督に報告してくるから、おとなしくしてなさい。あいつから伝えたいこともあるらしいしね」

そういうつて出て行つた曙をぼーと見つめながら、僕は考え事をしていた。

(伝えたいことか…… 提督の戦績…… 僕のせいで傷つけちゃったしな…… 龍田の命令無視の件もあるだろうし…… 嫌われる通り越して恨み節言われる勢いだねこれは…… ははっ…… でもいいんだこれで…… 計画通りさ……)

そんなことを考えているとドタドタと慌ただしい足音が近づいてきた。その足音は医務室の前で止まり、荒々しくドアを開いた。

「しつ、時雨！ 無事か!?」

「…… 無事だよ、何？ 解体めいれ……」

言葉をいい終わる前に、提督が強く僕を抱きしめた。提督の匂いが僕を包み込む。突然の出来事で声も出ず、混乱している僕だったが、その真意はすぐにわかつた。
「よかつた…… 本当によかつた…… 無事だつたんだな……」

「どう…… して……」

体温を、吐息を、鼓動を、生きている証を探すように提督は僕を抱きしめ続けていた。この男は本当の意味で自分の無事を噛み締めている。それが嫌という程伝わってきた。だがハツと我に帰り、再び、態勢を立て直し僕を見つめた。

「はっ！ 病み上がりなのに、こんなことを！ すまん！ 痛くなかったか？」

「どうして……」

「どうした？ 痛むか？ どれ、ちょっと見てやろう、これでも応急手当てくらいなら……」

「どうして！ 僕を嫌ってくれないんだよ！」

我慢をしていたがダメだつた。次々と溢れる想いは止まらず、ついにそれは言葉になつた。

「わからないんだよ！ 提督の行動はわからないことが多すぎる！ どうして嫌いと言つた艦娘を秘書艦にするんだい？ どうして嫌がらせをし続けた拳句君を犯人呼ばわりした僕を怒らないんだい？ …… どうして僕の無事をそこまで喜べるんだよ？ …… わからんない！ わかんない！ もう分かんないよ！！」

「嫌われようとしているなら諦めろ。お前がどんなに悪いことをしたって、それで私がどんなに苦しんだって、私はお前を好きでい続ける」

「どうして……」

「理由は簡単だ。時雨がこの世界に一人しかいないからだ」

「ふん、そんなの綺麗事だよ。僕らは所詮兵器。代わりなんていくらでもいるさ」

「いや、いない。例え兵器として何人も時雨がいたとしても、『私の時雨』はお前だけだ。…… それにな時雨、私は艦娘を兵器とは思っていない。人間だろうが艦娘だろうがこの鎮守府で共に戦ってくれる仲間、ただそれだけなんだ。全員が大切で、愛おしい、かけがいのない存在、その一人がお前だ」

「かけがいのない… 存在…」

「そうだ。だからこそお前がどんなことに悪さをしようと、それに対しても面と向き合つて考える。幸せになつて欲しいと本当に思えるからな」

(知つていた。そんなこと前から知つているさ。提督が本当に僕らを大切に思つてることなんか…… でもだからこそ…)

「でも僕は… 僕は… それでも…」

「… 嫌われなきやいけない… か？」

「え… ? どうして…」

「実はな、時雨。私は人の願いを見るこことのできるメガネを持つてゐる。これで見て

いたからお前が嫌われたがつてゐるのは知つていたんだ」

「はあ？ 突然何を言い出すのさ、そんな魔法みたいな…」

「私も最初は信じられなかつた。嘘だと思うなら試して見るといい、これをかけて鏡を見てみろ」

そう言つて提督はポケットから一見なんの変哲もないメガネを取り出して僕にかけた。するとどうだろう、鏡に映つた自分の頭に確かにはつきりと文字が浮かび上がつた。『嫌われたい』とただそれだけが書かれていた。

「へ、へえ。やつぱり最低野郎だね、こんな道具使つて、黙つて人の心を覗くなんて。嫌いになるのは当然だつて改めて思つたよ……」

「そうだな、その通りだ。私はこんなものを使わないと時雨の思いに気がつくことすらできないクソ提督だよ。だから時雨、せめて教えてくれ。私のどこが嫌いなんだ？ 何が不満だ？」

「何がつて……」

思いも見なかつた質問に一瞬たじろぐ。嫌いじやないんだから理由なんてあるわけない。言葉に詰まつた僕に提督が詰め寄る。

「私ははお前が……お前がまるで何かを我慢しているように感じて仕方がないんだ……もうそんな姿見たくない……」

「僕は嫌い…… 僕を思つてくれるそんな提督が…… 嫌い……」

喉から力を振り絞つたような、弱々しい声が涙とともに病室に静かに流れた。

「嫌い……無理してゐるのに氣を使つて、いつもヘラヘラしてゐる提督が嫌い……夜遅くまで執務してゐるくせに遠征から帰つてきた僕らを必ず出迎える提督が嫌い……自分のことなんて二の次で、倒れたつて次の日には執務しようとするその姿勢が嫌い……何もかもが嫌い……嫌い！ 大つ嫌い！！」

もう作戦のことのなんか頭になかつた。今まで燻つていた思いを、願いを、不満を、夢中で叫んだ。今までの偽りの言葉ではない、本当の意味での自分の不満を提督にぶつけた。

「どうして僕を頼つてくれないのさ！ どうして支えさせてくれないの！？ どうして一人で頑張ろうとするのさ……僕だつて……僕だつてもう提督のそんな姿……見たくなあんだよ……」

止まつてくれない涙はシーツを濡らした。それを見ていた提督は何故か嬉しそうに笑つて優しく僕の頭を撫で始めた。

「ありがとう、本当のことを言つてくれて。そしてすまなかつた。優しいお前をここまで悲しませてしまつて。私は本当に人の気持ちがわからない男だな……」

「提督……」

「艦娘を支えよう、そればかりを思つてしまふばかりに私は、私を思つてくれる人のことを考えられていなかつた。一方的な幸せなんてこの世に存在しないなんて簡単なこと

に気がつかなかつた……。なあ、時雨。私からのお願いだ。こんな人の気持ちすらわからぬような提督を、どうか支えてくれないか？　お前がいないと私はまた大事なものを見失つてしまふ気がする」

「ふふつ。　本当にね。　じゃあ約束してよ。これからはもつと僕らを頼つて、無理をしない。僕の願いはね『提督も幸せになれる鎮守府』を作ることさ、これからはそれを目標にしてね。　指切りげんまんだよ」

「ああ、約束だ。もうお前の願いをむげにはしない」

提督と指切りをした。長かつた提督と僕の不思議な攻防戦はようやく幕を閉じた。だがそれと同時に僕には今までとは別の感情が生まれた。熱を帯びた目は確かに自然と提督をとらえてしまつていた。

（もう少しこの時間が続けばいいのに……）

（おうおう、お熱いねえ。その願い、手伝つてやるよ！）

突然心の声がしたかと思うと、僕の体は勝手に動き出し、ベットから落ちそうになつた。それを見て提督は慌てて僕を抱きしめる形で支えた。さつきとは比べ物にならぬくらいに心臓は高鳴つていたのを感じた。

「お、おい、大丈夫か時雨！　やはり病み上がりで気分が……」

「……そうだね。気分が優れないからもう少しだけこうさせていてよ。全く、最後まで

やり方が乱暴なんだから… ふふつ」

窓から流れる風は心地よく、外を見ると空は清々しく晴れ渡っていたのが見えた。

「ちょ！ 終わり！ ストップ！ ストップ！ 憲兵！ 憲兵を呼びなさい！」

「ちょ！ 曙さん、今日は見守るつて約束じや」

「ダメ！ 教育上よろしくないわ！ 提督も時雨も早く離れなさいよ！」

「て、提督と時雨さんてそういう関係なんですか？？」

「これが… 伝説たる所以…」

「ふーむ、提督殿、これは通報してもいいのですかな」

「ちょ！ お前ら！ これは誤解だ！ 時雨はいま気分が悪くてだな…」

突然扉が開き、慌てて病室に駆け込んできた曙の後ろには、恥ずかしそうに目を塞ぐ
皐月他2人。そして医師が立っていた。静かに流れていた病室の空気は一気にんや
わんやの状態になつた。僕は決して提督からは離れず、その心地よい空間に身を委ねて
いた。

(頑張れよ、時雨)

最後に心に届いたその短い言葉には、今まで聞いた中で一番の優しさを感じたの
だった。

番外編

朝の喧騒

「はあ？ あんたほんとわかつてないわね！ クソ提督は甘い卵焼きが好きなの！ 大根おろしなんてもつてのほかよ！」

「はあ、何事も好きなものだけ作ればいいってもんじやないよ、新しい味にはそれだけ提督にとつて新しい好きが生まれるつてどうしてわからないのかな？」

「ま、まあ、まあ……どちらも食うから安心し……」

「（クソ） 提督は黙つてて！！」

「はい……」

事の発端は前日

時雨の事件の夜、落ち着きを取り戻し以前のようになつてくれた（？）時雨は私にお詫びとして秘書艦をやらせて欲しいと懇願してきた。もう無理はしない、といった手前、この手の提案を拒否なんてできないため、これを承諾した。そして嬉しそうにしている時雨を横目に執務室に戻ろうとすると袖を引っ張られた。

「じゃ、じゃあ、明日は朝食を作つてもいいかな？ こう見えて料理には自信があるん

だ

「ん？ ああ。無理はするなよ。すまないが私はもう寝るぞ……」

「本当に!? やつた!! ジヤあ明日！ 楽しみにしててね！」

急いで準備しなくちゃ、と張り切る時雨が小走りで自室に向かうのを眺めつつ。私は執務室に向かつた。

「朝食かあ… ふああ、だめだ… 今日はもう寝よう」

色々と緊張の糸が切れぽーつとしていた私は特に深く考えずに執務室に向かい、寝る準備をしていると、ノックをする音がした。

「あー、すまん、今日はちよつともう…」

「大丈夫！ は、入らないからよく聞きなさい！ 明日、料理の練習を兼ねてまたあんたに朝ごはん作りたいんだけど、いいかしら？」

「ああ、曙か。料理というとこの前の続きか、いいぞ。無理はするなよ」

「ふん。美味しすぎて腰を抜かさないように気をつけることね！ ジヤあまた明日！ お、おやすみ！」

布団を敷き終え、静まりきった執務室の天井を見上げ、私はウトウトしながら感慨に浸つていた。

(時雨も… 曙も… 随分心を開いてくれるようになった…。二人して私の朝食

を……全く私は幸せ者だな……）

私はここで意識が途切れた。

「つてこれ、まずくないか!?」

朝、いつも通りの時間に布団から飛び起きた私は事の重大さを理解した。

「時雨が朝食作つて……曙も作るつてそれ、朝食がブツキングしてるじゃん！え？何この状況!? とにかく急いで……」

コンコン ガチャ

「クソ提督ー……起きてる？ 朝ごはんいまから作るから執務の30分前にはできると思うんだけど、何か要望とかあるー？」

「あー、曙か！ すまん！そ、そうだな、卵焼きが食べたいかな！ それとすまんがすごく腹が減つてしまつては仕方がない。曙の朝食を執務の1時間前に用意してもらひすぐ

（こうなつてしまつては仕方がない。曙の朝食を執務の1時間前に用意してもらひすぐに完食。少し用事があるふりをして曙を執務室に留守番させ、食堂に向かう。まだ作つているであろう時雨の朝食が出来次第、別の場所で食べる。よし完璧だ）

「え？ ええ、まあいいわ。あんたから要求なんて珍しいわね……じやあ急いで作つてくるわ！」

食堂に向かい走つていつた曙に冷や汗をかいたが、そもそも言つてられない。急いで身

支度を済ませ、時雨の様子を見に食堂に向かつた。

（とにかく早く見つけ鉢合わせするのを防がなくては……）

食堂に着くと先に見つけたのは曙とそのお供、間宮さんだつた。

「ちよ、ちよつと！ いくらお腹空いてるからって息切らして見にくることないでしょ！」

「あらあら提督さんたら、そんなに焦らなくとも朝食は逃げませんよ？」

「あ、ああ、二人とも作っている最中にすまんな！ 時雨を見なかつたか？ 今日秘書艦なんだ」

「時雨？ 見てないわよ。大体まだ執務1時間以上前なんだから寝てるんじゃないの？ 逆に私と間宮さん以外で今日はまだ艦娘には会つてないわ」

「了解だ！ ありがとう！ では引き続き頑張ってくれ！ 楽しみにしている！ 済まないが少し用事があるので私はここで！」

「え？ ええ！ なんなのよ！」

息が整つた後、間髪を容れずに私はまた食堂を飛び出した。

（やや困惑氣味ではあつたが自然とまだ『食堂』にはきていない事を聞き出せた。となるとやはり…：あつちか）

この鎮守府には食堂以外に朝食を作れそうな機材が揃つてゐる場所がいくつも存在

する。曙のように料理を教わるため間宮さんが必要な場合は食堂で行うが、男一人の朝食を時雨一人で作る場合、だいたい場所に検討はつく。私は急いでその場所に向かつた。

——第四自炊室兼イートインコーナー——

艦娘の中には料理が好きな子や、曙のように練習したいという子、また休みの日に集まつてみんなで料理をしたいという子が一定数いる。その様な子たちの為にこの鎮守府には自炊室なるものが存在する。

ここではお湯、ガス、水はもちろん、オーブン、電子レンジ、冷蔵庫、まな板、包丁などなど料理に必要な道具は全て一式揃えられており、希望の道具の不足や破損があった場合はおいてあるモニターパッドで自由に注文できる様になつてている。もちろん自炊というだけあって自室から近くないといけない。その為各艦娘の自室から必ず1分以内で到達できる場所に設置されるよう、鎮守府に自炊室は複数存在する。

もちろん部屋にも一般的なキッチンは存在するが、思いつきで料理をしたくなつたものや、料理を極めたいものはわざわざここで料理をするのも珍しくない。

(料理が得意と言つていたし、日頃からよくここを使つていると聞いていたからな、おそらくここに…あたりだ)

自炊室を開けると丁度、味噌汁の味見をしている時雨の姿が飛び込んできた。エプロ

ンに三角巾をしたその姿は実に家庭的な姿で、普段戦う姿ばかり見ていたので新たな一面を見たような気分だった。

「提督!? どうしてここに!?

「はあ… はあ…。お、おはよう! 時雨。いや何、どんな朝食を作ってくれるか楽し
みでな…」

「うなんだ… そんな息を切らして走るほど楽しみに… えへへ。ちよつと待つて
ね。急いで作つて提督の部屋まで持つていくから!」

しばらくの間、鼻歌を歌いながらチラチラとこちらを見つつ、楽しそうに料理を進め
る時雨を見つめていた。出来れば彼女を確認できた時点で急いで曙の元に戻りたいと
ころではあるが、様子を見にきたと言つてしまつた手前すぐにこの場を離れるのも不自
然なのでとりあえず話題を切り出すタイミングを探していた。

15分ほど経つて一段落したのか、時雨は私に近づいてきた。
「あー、そうそう、提督は何か朝に食べたいものとかある? 今なら追加で作れるから
さ」

「うーん、そうだな、卵焼きが食べたいな」

(話題を… 話題を自然に持つて行くんだ…)

「卵焼きね… ふふつ提督つて意外と子供っぽいんだね。」

「それとな、時雨、朝食の件なんだが」

「ん？ なになに？」

「時雨の朝食ここで食べてもいいか？ 実はこの後少し用があつてな、また戻るができればこちらの方が近いからこちらで食べたいのだ。時間はそうだな、執務開始の30分前くらいになるかな」

「う、うん。それは別に構わないけど……。どうしてさつきから目を合わせてくれないので？」

（やばい、二人の想いを守るためとはいえ…… 罪悪感で胸が痛い……）

「いや何、メニューを先に見てしまうのもあれだなと思つてな。おつと、すまないが用事の時間だ。引き続き頑張つてください！」

「…… 用事…… ねえ……」

逃げるよう自炊室を飛び出し曙のいる食堂に再び向かつた。一瞬時雨の目から光が消えたような気がしたがおそらく気のせいだろう。

（まずいな…… もうすぐ執務1時間前だぞ。 間に合つてくれ！）

バタン！

食堂のドアを開くともう盛り付けと配膳を行なつてゐる間宮と曙の姿が見えた。

「あークソ提督。あなたの要望通り、1時間前までに完成するように巻いて作つたから、

「執務室行つてなさい。運んどいてあげるから」

「いやいや、様子を見にきたついでだ。私が運ぼう」

「そう？ ありがとう。じやあ自分の分は自分で頼むわ。行きましょ」
ふと視線が気になり、その先を見てみると、頬に手を当て微笑みながらこちらを見て
いる間宮さんがいた。普段から笑顔を絶やさない間宮さんだが、この時はなんだか一段
と嬉しそうに見えた。

「あ、間宮さん。手伝つていただきありがとうございました」

「いえいえ。うふふ… それにしても…」

「何よ、どつかに食材でもついてる？」

「いえ、先ほど提督が来られてから曙ちゃん、『わざわざ見に來てくれた』つてとつても
嬉しそうだつたのを思い出して…。手伝つた甲斐があつたなあって… ふふつ」
「ちょ！ ちょつと！ なんでそれ今言うのよ！ あれは別に深い意味はないわよ！ こん
な朝早くから暇ねつて嘲笑つてたのよ！ ばか！」

「そ、そうだつたのか」

「提督さん、曙ちゃん。今日のために一生懸命練習して、何回も作つてたんですよ。しつ
かり味わつてあげてくださいね」

「は、はい。もちろんですとも… はははつ…」

(うーん、いい笑顔。胸が… 胸が苦しいよ…)

朝食を曙とともに執務室に持つていくと机の上にできたての朝食を置いた。

(よし、ここまで作戦通り、後はここで曙の朝食を食べ、自炊室で時雨の朝食を食べれば完璧だ…)

「よし、じゃあ、いただこうかな曙が作ってくれた自信作とやらを… ではいただき…」コンコン

一瞬で吹き出る嫌な汗、ドア越しに光るシルエットは間違いない時雨だつた。

「提督…！ あれ？ もう電気ついてる…。用事が終わつたならできたら、もうこつちきてほしいいんだけどー」

「時雨？ 秘書艦とはいえ随分早いわね… いいわ私が応対するわ。」

「あーいや！ 私が対応する！ ちょっと待つてくれ！ そこで！ 動かずに！ 時雨もドアを開けないでくれ！」

「え？ ええ…」「うん… どうしたの提督今日なんか変だよ？」

全速力でドアを開け、一瞬で閉めて時雨に曙の姿が見えないようにする。幸い、曙の方は時雨を秘書艦か何かの用事だと思っているようだったので時雨を説得してこの場を収めることにした。

「し、時雨！ すまんな、用事は執務室でやることでな、もうすぐ終わるから自炊室で

待つてくれないかな」

「そ、うなんだ……でもなんだかい匂いがするのは気のせいかな?」

「いやいや! 多分食堂が近いし、朝の仕込みの匂いが今日はこちらまできているんじゃないか?」

「食堂ねえ……。あ、後、誰かと話してた感じだつたけど中に誰かいるの?」

「え? い、ないない! 最近独り言が多くてな……。それだろう! すまん余計な心配をかけて!」

「ふーん……。独り言ねえ: まあいいや、じゃあ: ガチャ「ちょっとクソ提督!」

「朝食(朝ごはん)が冷めちゃうから早くきてよ」

「え?」

「は?」

「終わつた……」

最悪のタイミングでドアが開き曙と時雨が鉢合せ。全ての計画が無に帰した瞬間であつた。

そして現在

「はあ? あんたほんとわかつてないわね! クソ提督は甘い卵焼きが好きなの! 大根おろしなんてもつてのほかよ!」

「はあ、何事も好きなものだけ作ればいいってもんじやないよ、新しい味にはそれだけ提督にとつて新しい好きが生まれるつてどうしてわからないのかな？」

気持ちの良い快晴の朝。執務室の角に響き渡る二人の声。そして正座する私。

目の前に置かれているのは綺麗にメニューが被つている二食分の朝食。ご飯に味噌汁、漬物と卵焼きが並べられ美味しそうに机で食べられるのを待っている。

「もういいわ！　とにかく最初は私だからね！」

「はあ!?　今日の秘書艦は僕なんだから僕が最初だろ!?!?」

「ま、まあ、まあ……どっちも食うから安心し……」

「（クソ）提督は黙つてて!!」

「はい……」

しばらく睨み合いになつていた時雨と曙だが、しばらくして曙が一息置いて話し出した。

「埠があかないわ、もうこうなつたら対決よ！　こいつに先に朝食を食わせられる資格がある艦娘は誰か！　白黒つけようじやないの！」

「いいね、その勝負。乗つた!!　この際はつきりとさせておきたいしね！」

執務開始時刻はとっくに過ぎている。だが事件原因張本人である私は、今や指揮能力を失つただだの一般市民のごとく、事の行く末を不安そうに見つめていた。

次回

提督朝食王決定戦

開催!!

朝食王決定戦 前半

「さあ！ 始まりました！ 第一回！ 鎮守府朝食王は誰だ！ 決定戦！ 司会を務めさせていただきますは私青葉ですーー！！ よろしくお願ひしますーー！！」

食堂を埋め尽くす艦娘たちとそれと対峙して楽しそうに司会をする青葉。 唐突に始まつた料理対決？ は広報部の宣伝効果もあり、 みるみるうちに観客を集め、 本日非番の子のほとんどがここに集結した。

「今回対決しますはこの二人！ 鎮守府最強の駆逐艦二人組！ 曙さんと時雨さんでーす！ お二方、 意気込みのほどをどうぞ！」

「絶対に勝つわ。 あいつ（時雨）とは白黒はつきりつけないとと思つてたからね！」
「ほう、 提督は絶対に渡さないと？」

「べつ、 別に提督は関係ないわよ！ 料理の腕前の話よ！ ばか！」

〈ガンバレーボのたーん！

〈ファンサービス流石っす！！ 「うつさいわね!!」

「対する時雨さん！ どうでしよう？」

「悪いけど負ける気がしないよ。 料理は人一倍努力してきたんだ。 戰闘ならともかく、

「その腕に関しては曙には譲れないね」

「なるほど、かなりの鍛錬を積まれているようですね！ 気迫があります！」

「かつこいいっぽい！」

「昔みたいにヘマしないでねえ

「はい！ ありがとうございます！ では続いてルール説明に移ります！ モニターをご覧ください！」 パチンつ

青葉が合図すると食堂の後ろの壁が変形し、巨大な画面となつた。元々は大きな作戦用に改造した特注の品なのだが……まあ活用してくれるなら特に使い方を咎めるつもりもない。

「ルールは至つてシンプルです！ 朝食に合う料理3品目をこちらでご用意しましたので、お二方はそのお題に沿つて自由に料理を作つてもらいます。完成した料理をこちらの審査員3名に味見していただき、美味しかった方にこちらのボタンで投票していただきます！ 1品目ごとに3人中、相手より多くの票を手に入れた方に1ポイント！ 合計で2ポイントを取つた方の勝ち！ となります！」

「なるほど……それで私たち3人が審査員つてわけか」

「ご名答！ 本日はよろしくお願ひします！」

厨房で意氣込む曙、時雨の目の前におかれたテーブルの前に座られたのは、私以外

に2名。間宮と鳳翔だった。お店や食堂の料理を日々行つてゐるのだ、この鎮守府でこれ以上ない審査員だろう。

「お二人とも、わざわざすみません…。あくまで余興なんで用事があつたら抜けちゃつて大丈夫ですよ!」

「い、いえ! これも大事な経験だと思うので! (提督の味の好みがわかるなんて大チャンスじゃないの!)」

「私達の仕事はもう別の子に頼んでいるから大丈夫です!! (頼み込んで代わつてもらつたこの場を譲るわけにはいかないわ!)」

「そ、ですか…」(なんだろう… 厳がすごいな、怒つてるのかな)

「ご協力感謝します! それでは早速! お題は! こちらです!」

お題: 1品目 味噌汁 2品目 卵焼き 3品目 自由料理

「制限時間は15分! 3品同時に完成できなければその時点で失格です! では!
よーい! スタートです!!」

カーン!

どこからともなく鳴らされたゴングとともに二人は一斉に作り始めた。

見た感じでは、あの言葉通り時雨はかなり慣れているようだ。長年培つてきたであろう包丁さばきや手際の良さは素人目から見ても料理が得意なんだとわかる。

一方で曙の方も負けていない。技術は多少時雨には負けるものの、無駄なく、効率よく、全ての料理に着手している。

時間がないときに作る料理、朝食にとつては理想的な動きだ。

二人とも系統は違うがこの朝食にかける熱意と気合は十二分に感じられた。

「すごい…本当に一人とも料理がすきなんだな…」ボソツ

無意識に出てしまつた言葉に、なぜか間宮と鳳翔は目を丸くした。

「え？ 本気で言つてるんですか？」提督…

「時雨ちゃんの言つてた話は本当だつたんですね…かわいそう…」

「えつ…」

それつきり何も言わずうつむく二人。 まざいなこれは。昔も似たようなことを…

「は、はーい！なぜか気まずい空気が審査員席で流れていますが、ここで調理タイム終了です!! お二方は審査員に料理の提供をお願いします！ 一品目はこちら！ 朝食のど定番！『お味噌汁』です！」

「まずは私からよ！」

「はーい！ 先攻は曙さん！ これは…しじみの味噌汁でしようか？」

審査員の方々

！ 実食お願ひします！」

「これは……いいですね。具材メインのしじみは丁寧に砂抜きもされていますし、副材の玉ねぎも相性抜群ですね。」

「ん……？ 少し山椒がきいているようだな？ ピリツとしてていけるなこれ……」

「しじみには二日酔いを緩和する作用もありますからね。お忙しい中上司との飲み会が多い提督にはぴつたりの一品かもしませんね」

先攻

曙の味噌汁：しじみと玉ねぎの味噌汁

材料：しじみ、玉ねぎ、唐辛子、山椒、合わせ味噌

作り方……

審査員の実食を終えると先ほどのモニターに作られた味噌汁の写真とともに、具材や作り方が事細かに記載され発表される。観客にもどんな料理が運ばれたかわかるように、運営側の配慮のようだ。普段料理をするものはもちろん、来ているもののほとんどが食い入るようにメニューを眺め、中には必死にメモをするもののちらほらといった。（随分料理好きな艦娘が増えたな……曙や時雨の影響か？）

「これは！ 審査員全員から、いきなりかなり高い評価だあ！ 時雨さんも続けるかあ！」

「ふん…。当然ね！」

「くつ…。そこまで提督ダイレクトな商品を持つてくるなんて…。でもこれはあくまで料理の味！ 僕はこれで勝負だよ！」

「これは…？ み、味噌汁なんでしょうか。赤い汁をしていますね！」

「名付けて！ミネストローネ風味噌汁だよ！ 長年培ってきた僕の味噌汁の集大成！トマトと味噌の合わせ技だよ！」

「ど、トマトって…。そんなの味噌と合うわけ…」

「い… いえ！ これ合います！ すごい美味しいです!! スッキリしていてとても飲みやすいのに濃厚！」

「ごぼうや大根といった普通のミネストローネには入らない具材も入っているのに…。全く喧嘩をしないのは味噌のおかげでしょうか。素晴らしいアイデアです。参考にさせていただきます！」

「おーっと！ 見た目のギャップは裏腹に料理人お二人から大絶賛されていますね!! これは勝負決まつたか!?」

「… うむ。野菜たくさんで健康にも良さそうだな…」

「あれ？ 提督…？ まだ一口も食べてないようだけど…」

「あ、いやその… これはだな…」

「おーっと審査員である提督！ なぜか時雨さんの料理に全く手をつけない！」

「あつ……もしかして提督さんのトマトが苦手つてお噂は本当だつたんですか？」

「いやあ……その……はい……すまん、時雨……」

「え……ええええええ！」

「おーっと！ 全く料理の腕とは関係のないところで時雨選手思わぬ失点だあ！」

「そ、そんな……」

「うなだれて膝をつき、がつかりする時雨とそれを慰める曙。申し訳ないとしか言いようがない。

「提督はトマトが苦手……つと」

「間宮さん達は何をメモしてるんですか……」

後攻

時雨の味噌汁・ミネストローネ風味噌汁

具材：赤味噌、にんじん、トマトの水煮、ごぼう、コンソメ、オリーブオイル……
作り方

「さあ！ 料理も出揃いました！ お三方！ ボタンをどうぞ！」

鳳翔：時雨

間宮：時雨

提督：曙

「はーい！ということで提督以外の票を得たので、1回戦は時雨さんの勝利です!!」

「う、うん。とりあえずは1ポイントは1ポイントだね……やつたあ……」（なんだろ
う…すごい複雑だよ……）

「時雨……敵ながら同情するわ……」

「ごめんな……時雨……」

「えっと……時雨さん！おめでとうございます！さあ！じゃんじゃん進んじゃいま
しょう！続いての料理は卵焼きです！」

「今度は僕から行かせてもらうよ!!!」

「はい！非常にテンションの高い時雨さん！料理をお願いします！」

「僕はこれだよ！名付けて！春巻き焼きだよ！」

先攻 時雨

時雨の卵焼き：春巻き焼き

具材：卵、しいたけ、ナス、チーズ

時雨の卵焼きは春巻きと名がつくだけあって台形状に切られた形をしている。中に
は、普通の卵焼きでは到底入らないような具材がひしめき合っているが、決してごちや

ごちやとはせず、むしろお互いの具材が映えている。周りに彩られたソースも食欲をそ
そる。

「では審査員の皆様！ 実食をお願いします！」

「なるほど…すごいインパクトですね。卵焼きの具材中に春巻きの具材を入れたよう
な感じですか…。あ、美味しい」

「周りにポン酢がかかっているんですがこれもまたいいアクセントですね！ 居酒屋で
出すとしたら写真付きで出したい料理です」

「うん、甘い卵焼きしか知らなかつたが、うまいな、味の幅が広がつた気がする」

「いいですねえ、長年の料理愛が光つていると言つたところでしようか！ 対して曙さ
ん！ お願ひします！」

「私のはこれよ!!」

「おーっと、これは!? 一見普通の卵焼きのようですが… 見た目にこだわらず味で勝
負といった感じでしようか！ では実食をお願いします！」

後攻 曙

曙の卵焼き：青のりの卵焼き

具材：卵、青のり

丁寧に作られた卵焼き。いい感じの焦げ目がついており、形もしつかりと崩れずに保っている。甘い卵焼きの為か、周りに装飾は一切せず、あくまで卵焼き本体のみ。青海苔がほのかに香る。

「これは… シンプルイズベスト… と言つたところでしようか。優しいお母さんのように甘みですね」

「ふむ… 何やら普通の卵焼きとは微妙に違つた風味ですね、何か隠し味でも？」
「さすがは鳳翔さんね…。ご名答よ。隠し味に納豆のたれを入れているわ」

「この味の深みはそれのせいだつたんですね… なるほど。 素直に勉強になります」
「いいな、それ。朝の時間帯なら余つたのを使って一石二鳥だしな。実用性があつて… つてあれ、残りの私の分は？」
「くつ… 美味しい…。これが提督好みの甘い卵焼きなのか…」
「なんであんたも食つてんのよ!!」

「はい！ 実食も終了したところで！ 審査員の皆さん！ ボタンをお願いします！」

鳳翔：曙

間宮：曙

提督：曙

「出ましたあ！ 曙さんパーfectで勝利！ 1ポイント獲得です!! おめでとうございます!!」

「やつた!! これで追いついた！」

「さて、審査員の方々。インパクトでは時雨さんが優勢だつたようですがどうして曙さんに？」

「はい、確かに見た目は時雨さんには負けますが、朝の忙しい時間帯に作る、ということを考慮すると曙さんかなと感じました。朝食に大切なのは『毎日無理なく作れること』ですから。食堂でもこれは守つて作つています」

「それに加えて曙さんの隠し味の納豆のたれも良かつたですね。余り物を効率よく使えるのは料理をするに当たつて持つべきスキルの一つです。経験的にはまだまだかもしれませんが、今後もこの技術は生きてくると思います」

「なるほど！ 朝食として、そして料理を作るものとして、優つている点があつたということのようです！」

「くつ… 見た目に注力しすぎたか…。これは完敗だよ」

「さあ！ 現在ボイントは均衡状態！ 勝負はついに決勝戦です！ 最後の料理はこち

ら！ 自由料理です！ 朝食に合う料理を作るというシンプルながら非常に幅が広い料理勝負ですが勝つのはどちらになるのでしょうか！ では料理の方をどうぞ!!

次回ついに朝食王が決定!? 後半へ続く

朝食王決定戦 後半

「さて！ 泣いても笑つても最後の勝負！ 最終戦では勝つた方には何と！ 100ポイント差し上げちゃいまーす！」

「今までの勝負は何だったのよ！」

「クイズ番組によくあるじやないですか！ どのみちこの勝負で決まるんだしいじやないですか。一度やって見たかったんですけどよお!!」

「ま、まあ……どの道次で決まるし特に支障ないからいいけど……」

（なんだろう……なぜか嫌な予感がする……）

「お二人の了解も取れたということで!! 最終戦いつちゃいましょー！ 先攻はどちらが行きますかー？」

「私よ！ 先手必勝！」 バン！

「はーい！ 先攻は曙さんでーす！ …… 曙さんのお料理はー…… うーんとこれは…… 何でしよう、何かの揚げ物でしようか……？」

出された料理は長年料理をやっている僕ですら見たことのないものだつた。黄色い衣に包まれた揚げ物？ のような見た目をしている。周りには大根と人参らしき和え物

もついているところを見ると和食だろうか…？

「ピカタですね。イタリアが発祥のお料理で豚肉やスパムに小麦粉と卵をつけて揚げたものです。曙ちゃんよくこんな料理知つてましたね」

「おお、流石間宮さん、そんな料理もあるんですね…しかし本人の手前申し訳ないが、朝から揚げ物つてのは…」

「確かに、朝食から油を使つたお料理はなかなかハードルが高い気もしますね…卵もかなりのカロリーですし…」

「まつ、とりあえず食べて見なさいよ。この料理には自信があるのよ！」

自信満々といった様子の曙。確かに二人の言う通り朝からこんな高カロリーのものはなかなかへビーだ。何か工夫されているのは間違いないようだけど、元の料理がわからない以上推測すらできない。

「…ふむ。なるほどな、これはいい。見た目とは裏腹のさっぱりさだ」

「お豆腐が生地に練りこんでありますね。ぺろつといけるのに、栄養はしっかりと取れる…。素晴らしいです」

「横に添えてあるわさびマヨネーズも絶妙ですね。このお料理とベストマッチです」

「めっちゃおいしそー!!

「私も食べたーい!!

「おーっと！これは過去の料理の中で最高評価をされているのでは!? 全員が文句なしの評価です！ 時雨さん続けるか!?」

「めっちゃおいしそー!!

「私も食べたいっぽい」

「ふん！ どう？ 時雨。これが私の切り札よ。おばあちゃんから教わった曙家直伝の料理！」

「ふん、私もそれなりに勉強してきたからね」

「やられたよ、じゃあ僕も遠慮なく切り札を出させてもらうよ！」

「な！ これって……！」

「出ましたあ！ 我が鎮守府の朝食で最も人気の料理、フレンチトーストを出してきまし！ なるほど、これは考えましたねえ。では！ 審査員の方々、実食をお願いします

！」

（鎮守府内でこの料理を知らないものはいないはず……。鎮守府で食事を摂つていれば誰もが一度は食べたことがあるこの料理で唸らせることができれば勝つたも同然……後は評価をもらえば……）

「…… !!」

「これは……」

「おつと……？」

！」

出されたフレンチトーストを口にはこんだ瞬間、3人の動きはピタリと止まつた。少し間が空いてから、今度はまじまじと料理を眺めつつ、一口、また一口と頬張り始めた。「うまい……こんなにうまい料理は生まれて初めてかもしねりない……手が止まらん……」

「なんと！審査員提督！泣いております！どんだけ美味しかつたのでしょうか？」

「はい、感無量の一言です。これほどのフレンチトーストを食べたのは初めてだと思います。バケットに染み込んだ卵液のきめこまやかさ、焼き目をつけるくらいしつかりと焼いているのに食感はプリンのよう……。正直私の食堂のものとは比較にならないレベルです…… 相当な腕前と経験がないとできませんよこれ……」

「正直洋風のお料理はあまり詳しくありませんが、素人目から見ても味、見た目ともに高級ホテルで出されてもいいほどだと感じます。特にこの上にかかる粉砂糖の装飾が……」

（あれ……？ 周りにそんな装飾なんかしたつけ……？ というか確かに自信はあつたけどそこまで本格的に作つた覚えは……）

「何よそれ！　あんたどこでこんな技身につけてきたのよ!!　聞いてないわ！　こんなの
ふあふえつふおないじやないの!!　何これ！めっちゃうまい!!」モグモグ

「これ…　僕の料理じゃない…」

「へ？　じゃあこれは…」

「では審査員の方々！ボタンを…」バタン！

「はあ…　はあ…　取り込み中にごめんなさい!!　食堂に置いてあつたお皿取り違え
ちゃつて…　つてもしかして…」

全員が時雨のボタンを押そうとしたその瞬間、勢いよく食堂のドアが開かれ、何故か
息を切らした榛名が会場に飛び込んできた。どよめく会場をかき分け、審査員席でまじ
まじと料理をみると深くため息をついた。

「あー…　食べちゃいましたかー…　申し訳ないです…」

「榛名、どういうことだ？　これは時雨が作つたんじや…」

「あー…　えつとですね…　かくかくしかじかで…」

榛名の話をまとめると、大会が開かれる前日、偶然榛名は金剛さん用にフレンチトーストを作つていたのだが、それを食堂に忘れてしまった。翌朝に慌てて取りに行つたの
だがタイミング悪く料理大会をやつていた。それを邪魔してはいけないと、裏で
こつそりとつたお皿と料理が、これまで偶然時雨の作つたものと同じで取り間違えてし

まつた。それに気がついた榛名は急いで食堂に引き返して今に至る……。
とまあ、こんな感じらしい。

「抜け出してお姉様に持つて行こうとした時に付箋が貼つていなることに気がつきまして……本当に申し訳ありません……」

「あ、本当だ。お皿の横によくみると付箋が貼つてある……全然気がつかなかつた……」

「えつとじやあ何だ。さつき食べたこのフレンチトーストは……榛名が作つたのか。
正直驚いたぞ……あんなに料理がうまかったのか」

「い、いえ……この料理が得意というか……昔から朝食にお姉様や他の方に振舞う機会が
多かつたので、自然と味や見た目にこだわるようになつてしまいまして……」

「なるほど……長年の経験が生み出した料理だつたんですね。これは……決まりです
ね。私は榛名さんに一票」

「同じく私も榛名さんに！ 提督さんは？」

「え？ あ、ああそだな。この料理に関しては文句のつけようがない」

「と、いうことで！ 何やら色々と一悶着ありましたが満場一致のパーフェクトという
ことで！ 『自由料理』部門 得点は榛名さんに入りまーす！」

「くつ…悔しいけどぐうの音も出ないわ」

「まあ… しようがないね。 こればっかりはこのあと出しても勝てる気が… ってん?
? この部門の得点つて確か…」

「はい! ということで最終結果、榛名さん100ポイント! 時雨さん1ポイント!

曙さん1ポイント! という結果になりましたので! 第一回! 朝食王は、榛名さんに

決まりました!! おめでとうございまーす!!」

「へ? 私? あ、ありがとうございます?」

「榛名さん! 料理そんなにうまかっただ! 今度教えてください!」

「私も! 私も知りたいです!」

「コツとかあるんですかー!!」

優勝の言葉とともに畳然としている榛名の頭上でくす玉が開かれ、青葉からは優勝トロフィーを差し出された。困惑しながらも受け取った榛名の元に多くの艦娘が押し寄せ、質問責めにあつていた。

「はーい! お後もよろしいようで! 第一回朝食王決定戦はこれにて閉幕でーす!

みなさんお付き合いいただきありがとうございましたー!!」

結局、嵐のように訪れた二人の料理対決は、お互に何とも言えない敗北感を味わい

ながらドローという結果に終わった。まだ質問責めから解放されない榛名以外の曙と僕、そして提督の3人で料理の後片付けをしていた。提督がゴミを捨てに食堂から離れると、皿洗いをしている曙が話し始めた。

「にしても……榛名には完敗ね。まさかあんなダークホースがこの鎮守府にいたなんて」

「そうだね……。僕ら二人は井の中の蛙つてことを思い知らされたよ……」

「そうね……。まだまだ努力が必要ってことね……はあ……料理つて難しいわね……いつつ……」

洗剤が傷にしみたのか、絆創膏だらけの手の平を眺め涙目になる曙。目の下にはよく見るとクマができていた。ここ最近色々あって知らなかつたけど、提督のため相当練習をして来たのが勝負の中でひしひしと伝わってきた。

「でもさ……僕は榛名以上に君に驚かされたよ」

「は？ 私？」

「うん。実はこの勝負が始まる前は経験的にも知識的にも絶対に曙には負けないって、思い込んでた。戦闘ならともかく長年好きでやつている趣味だったから自信があつたから余計ね。でも勝負して行く中でやつぱり曙はすごいなってなんども驚かされた。」

「そんなことないわ……正直今回の勝負だって私が有利な条件があつてやつと成立した

しね。審査員（提督）の好みを知っていた時点でアンフェア……それを利用して私は1点もぎ取つただけよ」

「提督の好みは僕の研究不足、作戦ミスさ。僕がすごいって思ったのはそこじゃないよ」

「じゃあ……どこよ」

「曙はさ、負けず嫌いで強気で、たまにわけわかんないプライド押し付けてくるけどさ……やっぱり努力家なんだって。絶対に勝ちたいって、そんな気合いが伝わってきて僕は思つたんだ、『どんな勝負でも曙には負けちゃうかも』つてね」

「ふん。努力家なんじやなくて負けるのが嫌なだけよ。それに結果だけみれば私の慘敗。まだまだ修行が必要ね」

「僕もさ。知識や経験以上にまずは提督に気に入つてもらえる料理を作れるようにならないとね。まずは提督の研究からかなあ……」

「あのさ……その……今度料理を教えてくれないかしら。べ、別に私は一人でも全然いいと思つたんだけどね！ 同年代の経験者から教わるのが一番つて間宮さんにも言われて……も、もちろんただで、とは言わないわ！ 対価に私と潮たちで作つた提督の好みのリストを……いや……その一部を提供するわ！」

顔を真つ赤にしながら必死に自分にお願いする曙。そこは素直にお願いすればいい

のに、なんて思つたけどまあこれもまた曙らしいな。

「いいよ。その話のつた。せめて僕のライバルに見合うレベルにはなつて欲しいしね」「くつ：・言つてくれるじやない。今に見てなさい、教えなきやよかつたつて後悔させてあげるんだから！」

「おーい！ 一人ともー！ 一息ついたらちよつとこつち手伝つてくれー！」

「提督の朝食は譲らないよ（わよ）」

事件後、ギクシャクしていた二人の関係は春先の雪解けの如く、静かに融解し始めた。

提督への朝食勝負が再び行われる日もそう遠くはないそうだ。

次回金剛編

金剛の願い

艦娘つてなんですか？

「……しかし、榛名のフレンチトーストはうまかつたな。人生で食べ物で泣いたのは初めてだ」

特に何を思ったわけでもなく呟いたこの言葉を曙は見逃さなかつた。

「何？ 私たち一人に喧嘩売つてるわけ？」

「あーいやいや、そういうわけじゃ……」

「だいたいねえ！ 元はと言えばあんたが約束かぶらせるからでしょーが！ わかつてんの!? あんたはほんといつとも!!」

「まあまあ、もういいじゃないか」

どんどんとヒートアップをしてにじり寄つてくる曙の肩を後ろから掴み、どうどう、といなした。曙には申し訳ないが、その姿はまるで小型犬のリードを引っ張る飼い主のようだと思つてしまつた。

「提督も反省して、お詫びに昼食になんでも好きなだけ奢つてくれるつて約束したじやないか。今回は初犯だし許してあげようよ」

「な、なんでもとは……」

「提督?」

そう言いかけた私に笑顔を向ける時雨。それに反比例して刺さるのは氷のような冷たい視線。あ、ダメだこれ変なこと言つたら殺されるやつだ。

「あ、はい……仰せの通りに」

「よろしい」

温厚な人間を怒らせるのが一番怖いとはよく言つたものだ。まあ、時雨がそういうなら……と少し不満そうな様子ではあつたが、ようやく曙は引き下がつた。このイベントを通して随分二人の関係も変わつたのを感じた。

「……ふん、時雨は甘いわね。まあいいわ、死ぬほど奢らせるから覚悟しなさい、ふふつ」

「もう好きしてくれ……」

料理対決終了後、片付けを終えた二人と合流した私は今回の騒動の謝罪として飯を奢ることとなり、食堂に向かつていた。結局勝ち負けがつかずにうやむやになつてしまつた挙句、榛名の料理をべた褒めしたせいか不機嫌だった二人も、この提案を聞いてからはなぜか終始上機嫌だった。

「ふふつ……じやあ僕も少しづがままを……ん?なんだあれ……」

ふと時雨の足が止まつた。視線の先では榛名の部屋の前に駆逐艦の人だかりができていた。よくみるとほとんどが先ほどの料理大会を見ていたギャラリーの艦娘たちであつた。各々が嬉しそうに自身の手帳に何かを書き込んでいるようだが……。

「じゃ、じゃあ私は来月の水曜日に！よろしくお願ひします、師匠！ 楽しみにしてます

！」

「はい、こちらこそ。楽しみにしていますねー……」

列の先頭をよく見ると輪の中心に立つっていたのは今回の大会の優勝者、榛名。疲労が見えるその笑顔は終始引きつっていた。

「榛名さん、お疲れ様。質問攻めにあつてたみたいだけど大丈夫？」

「あ、皆さんお揃いで……いやはやなんというか……」

そう言つて差し出されたスケジュール帳には来月の最後の日までびつしりと『料理講座』の文字。どうやら質問にあつていた全艦娘に対して個別で料理を教えていくことになつたようだ。その原因の張本人であると思うとなんだかものすごい罪悪感に苛まれ、自然と声をかけてしまつた。

「榛名、これからお昼食べるんだが、榛名もどうだ。今日は私がおごるぞ」

「提督とお食事!? い、行きたいです！……けど……すみません、今回は遠慮させていただきます」

誘つた途端、先ほどの様子は嘘みたいな目の輝きを見せたが、何か気がかりがあるのか、即答はできない様子だつた。まあ、急な誘いだつたししようがないかな。じやあまた別の機会に…言いかけた私に、横にいた曙が横槍をいれた

「何よ榛名、もしかしてこいつに奢らせること気にしてんの？ それなら気にななくていいわよ、今回の件のお詫びを兼ねてるらしいからね。好きなもの好きなだけ奢つてもらいましょ？」

悩んでいる榛名に嬉しそうに悪魔の囁きをする曙。ここぞとばかりにグイグイくるなこいつ。まあ今回は身から出た錆だししようがないけど…。

「あ、いえそうではなくて… うーんでも…」バンツ！

「榛名！ おっそいネー！！ いつまでキッズ達と戯れてるネー！！」

榛名が悩んでいると、扉を勢い良く開かれ、中から金剛が出てきた。

「あつ… お姉様、これは… その…」

バサツと手に持つていてるスケジュール帳を落とした榛名はなぜかとても慌てていた。金剛がいるとまずい話でもしてしまつただろうか？

「ワオ、二人と提督も一緒だつたのネ？ グットモーニング！… で、皆サンも榛名に何か用でしたかー？」

「あー金剛、もしよかつたら…」

「提督がお昼奢つてくれるつていうから榛名も誘つてたのよ、金剛、あんたもどう？」
先ほどのように、曙がまた横槍を入れた。なぜか異様にテンションが高いせいか他の
ものへの絡みも積極的になつていてる気がする。

「提督と……食事……デスか……」

先ほどまでの笑顔が消え、なぜか険しい表情になる金剛。私にはその真意はわからなかつたが、少なくとも想像していた反応とはかけ離れていたので少し驚いてしまつた。
普段から明るく、ハキハキした性格の金剛だ。この手の誘いには乗るにしろ乗らないにしろ元気な返事が返つてくると思っていた。少し悩んだ様子を見せたが、すぐに誘いの返事は返つてきた。

「うーん……ソーリー今回はやめとくネ。今日は午後に用事もあるしネ」

「そつかー……残念だな。僕も金剛さん達と食事してみたかった……」

「まあ、仕方ない、また別の機会だな。じゃあ、榛名はどうする？」

改めて榛名に質問を投げかけた。先ほどの様子から察するに榛名にも何かあるのだろう。先ほどから金剛の事をチラチラと眺めては心配そうにしている。せっかくの休日が被つたんだ。姉妹で何か用事でもあるのかもしれないしな、無理強いはしたくない。

「はい……では私も……『いつてきなヨ、榛名。私の事は気にしなくていいネ』

おそらく断ろうとしていた榛名の言葉を遮り、金剛が榛名の背中をグイグイと押し出し、部屋から榛名を突っぱねた。

「行きたいんでしょ？ 榛名のことならお見通しヨ」

「で、でも… いいのですかお姉様？ お姉様が行かないなら私も…」

お姉様が： と言葉にした瞬間から、だんだんと押す力が弱まり、そしてゆっくりと手を離した金剛。 部屋の前に落とした榛名のスケジュール帳を拾い上げ、榛名に手渡した。

「いいも悪いもないネ。 榛名が行きたいなら行けばいい、それだけネ… もう私には気を使わなくともいいんですねヨ？」

「ゞ、ゞめんなさい！ そんなつもりは！ 私はただ…」

申し訳なさそうに手帳を握りしめる榛名、いまにも泣き出してしまいそうだつた。優しい性格の榛名だ。もしかしたら自分の行動が姉を傷つけてしまつたと感じてしまつたのかもしれない。

「……なーんて、冗談！ 冗談ネー！ もう榛名は相変わらず真面目だネー、私少し心配になっちゃいますヨ！」

そんな榛名の心情を読み取ったのか、金剛がまた元の明るい表情になつて榛名の肩をバンバンと叩きながら笑つた。先ほどのまでの思いつめた表情とは違い、いつもの金剛

に戻った気がした。

「じゃー提督、榛名をよろしく頼むネ」

「了解した、任せておけ」

「さ、じゃあいきましょ。食堂こんじやうわよ！タダメシが私を待つてゐるわー！」

「早めに行かないと席埋まつちやうかもね！提督、先に二人で席とつとくよ」

「あ、ああ、すまない。廊下は走るなよー」

よっぽどお腹が空いているのか、時雨と曙は金剛に軽く挨拶すると、そそくさと食堂に向かつてしまつた。

普段の私であればこれに続いて食堂に向かうところだが、いまは違う。

最近、少しずつだが、艦娘と前向きにコミュニケーションが取れるようになつてきた。そしてそれと同時に、交流する重要性もわかつた。艦娘の不満、不安、悩みは物質的な拡充だけでは叶わない。直接話をし、そして聞くことが何よりの解決策なんだ。そう思つていたからか、私は自然と口が動いていた。

「…まあ、なんだ、金剛もまた機会があれば、食事にでも行こう。不満や不安があるならそこで聞きたいしな。艦娘の相談を受けることも立派な提督の役目だしな」「えっと…先ほどから気になつていたんデスが… 提督、何かありました？ 嫌に積極的というかなんといいますか…。昔だつたら自分たちが誘つても避けるレベルだつ

た気が…」

怪訝そうな顔でこちらを見つめている金剛。かなり困惑している様子だ。まあ、無理もない。

「まあ、あれだ、ここ最近色々とあつてな。心境の変化というやつだ。艦娘の幸せのためにはより親密なコミュニケーションが必要だとわかつてな」

「コミュニケーションが必要…? WHY?」

「え?…何故つて言われてもな…そりや艦娘のことを理解してより良い関係をだな…」

「より良い関係つてなんですか…? 私たちは艦娘で、提督は人間ですよ? それ以上のお関係つてなんですか?」

「えつ? えつと、その…なんだ」

唐突に私に詰め寄ってきた金剛に矢継ぎ早しに質問をぶつけられた。思つてもみなかつた状況に、思わず私は発言を言い淀んでしまつた。困惑して立ちすくむ私にハツとした表情を浮かべた金剛は慌てて距離を取り直した。

「…ソーリー。取り乱しマシタ。今のことは忘れて欲しいネ」

明らかにおかしな素ぶりを見せた金剛に聞きたいことは山ほどあつたが、何一つとして聞いてはいけないような気がする。そう思つた瞬間から、金剛の周りに踏み込んでは

いけない目に見えない壁のようなものを感じた。

「お、おう！別に気にしてないからな。まあ、積もる話は今度ゆっくり話そうな！」

「そう…ですね。提督、最後に一つ聞いて良いデスか？」

深く息を吸い込んで、呼吸を整えた金剛は、私を見上げるようにゆっくり、だがしつかりと私と目を合わせた。

「提督にとつて艦娘ってなんですか？」

その問いに、私は答えることができなかつた。

疑念

『提督にとつて艦娘ってなんですか？』

先ほどの金剛からの質問がぐるぐるとこだます。その意図、真意はわからないがそれを話す金剛の顔が頭にこびりついて離れない。私にとつて……？いや、提督として……？ということだろうか……？どうして急に金剛がそんなことを……？

「あの……提督どうされました？さつきからずつと無言ですが……」

「ん？あ、ああ、すまない。先ほど金剛に妙な質問をされてな……」

「妙な質問？」

「ああ、私にとつて艦娘は何か、と。真意はわからないが、とつさに答えることができなくてな……。考え込んでしまっていた」

「そう……ですか……。お姉様がそんなことを……」

その質問を聞いてから、榛名は俯いて、黙り込んでしまった。結局、食堂に着き、暁たちと合流するまでの間、榛名と言葉を交わすことはなかつた。榛名も私と同じタイプで、考え込むと周りが見えなくなるタイプなのだろうか。

「おーい！ 提督！ 榛名さん！ こつちこつち！」

食堂に入ると、先に席をとつていた時雨と曙から声をかけられた。丁度窓の外に鎮守府の正門が見える窓際を陣取っていた。

「ごめんねー。やつぱり混んでて、あんまりいい席取れなかつたよ…」

「そうですか？ 私はいい場所だと思いますよ？ ここから見る風景は綺麗ですし」

「… 僕たち的には問題なんだよね… 牽制の意味で… はあ…」

「ああ… 提督との食事… 周りの艦娘に見せつけられるいい機会だつたのに… なんでこんな地味な席に…」

「あー… そういうことですか… ふふつ」

「？」

私の知らないところで、何か納得した様子。私には全くわからない。

確かに、広い食堂の奥ということもあり、受け取りカウンターの真反対という微妙な立地だ。だが、入り口の近くには海があり、心地よい風も入つてくる。景色を楽しみつつ、食事をいただけるいい場所だと思うのだが…。二人は（特に曙）は終始不満げに外を眺めては、軽くため息をついていた。

「まあまあ、お二人とも。気を取り直してお食事しませんか？」

「… それもそうね。うんと食つてやるわ！ 覚悟しなさい」

「僕は普段は食べないような高いやつ食べちゃおうかなあ」

「だつたらこれ美味しそうですよ。新作のトリュフパスタ、ウニも入つてますよ」「はーい！ それ注文しまーす！」

「榛名さん、さり気なく私の財布にキラーパス入れるのやめてください」

本当に食べられるのか不安になる量を、スナック感覚でポイポイと注文する曙、ウニ、フオアグラ、キャビアなど、単価の高い高級料理を惜しみもなく注文する時雨。まあ、惜しまないよね私持ちだし。まあ、だが予想の範疇だ。あとは榛名の注文によるか：

「私は今日はそんなにお腹が空いてないので」

「あ、そうなのか。まあ食える分でいい。好きにたの…え？ なにこの注文量」

榛名が曙の2倍以上の量を笑顔で注文したのを見て、財布の中身を確認するのをやめた。お腹すいてないでこれなの…？ 金剛型おそるべし

その後、来た料理だけでは足りなかつた榛名の尋常じやない量の追加注文、それを見てなぜか負けじと頼み出す曙、じゃあ僕もと、高級食材料理を堪能する時雨の3連撃によりたつた一回の昼食で1ヶ月分の給料レベルの金額を払う羽目になつた。

「ふー！ もう無理！ お腹いっぱい。榛名に対抗してたら思つたより頼んじやつたわ。悪いわね提督」

「全く悪いと思つてないだろ… お前。ここ最近で一番いい顔してるぞ」

「人のお金で食べるご飯の美味しさを知つてしまつたよ…。これは癖になりそうだ」

「すみません… 控えめにしたつもりだつたのですが気がついたら料理を注文してました」

「正直榛名の新しい一面が見られただけで十分だ。ま、まあその代償があまりに大きかつたがな…」

「すみません提督ーー！」

空っぽの財布を開き、苦笑いしている私に、心底申し訳なさそうに謝る榛名。まあ、こいつら3人の笑顔を見れたんだ。やす…くはないがいい買い物でもしたと思おう。

そんなことを考えながらふと、窓の外を眺めると見覚えのある艦娘が正門から外に出て行くのが見えた。

「む、あれは… 金剛か？」

遠くてよくわからないが、金剛が正門を出て、タクシーをよんではいる姿がみえた。その声に反応して時雨と曙を外の様子を覗き出した。

「あー確かに！ 金剛じゃないのあれ、何しに行くのかしら」

「あーそういうえば午後は用事あるとか行つてたね、ずいぶんめかしこんでるみたいだけど… 何しに外にいくんだろう」

「も、もしかして！ デート!? あー！ よく見たら手に花束持つてるし！ 間違いないでしょ！」

「なんだろう！ 気になるね！ 尾行でもしてみる!?」

確かに言われてみれば手に花束を持っているように見える。正直金剛の素行はあまり把握していないので心配といえば心配だが…。

「ふむ…まあ、何か用事でもあるのだろう。無理な詮索はしてやるな」

「うわ！ 提督ノリ悪！ つまんない男ね！だから友達少ないんじやないの？」

「余計なお世話じや」 ガツ

「あうつ」

「さて、そろそろいくぞ、食堂で長居するのも悪いしな」

「…」

クソだの、冷血漢だのうるさい曜をいなして、話を切り上げ食堂を後にした。その後午後非番の二人は間宮さんのところに向かうとのことで別れた。

別れ際、「特訓してうまいもん作つてやるから首、いや腹洗つて待つてろ！」と捨て台詞を吐かれた。声にこそ出さないが二人ともさらつと榛名に優勝されたのが相当悔しかつたのだろう。

その後、榛名も用事もないのに部屋に帰ることだったので、話がてら部屋まで送ることにした。

「提督、今日はありがとうございました、とっても楽しかつたです」

「ああ、また気軽に誘ってくれ、今度は金剛とも一緒に行きたいな」

「そう…ですね」

横を歩く榛名の表情が少し曇つた。先ほどの謎の外出の件も関係してゐるのだろうか、それとも別の悩みが…？ 杞憂だろうか。

「提督は気にならないんですか…？ お姉様のこと

「…まあ気にならないと言えば嘘になる。金剛のあんな表情初めて見たしな」

「だつたらどうして…？」

「こんな話、榛名の前で話すべきではないかもしけないが、私は金剛に距離を置かれているような気がしてな。情けないが原因もわからぬまま金剛に近づくのが怖くなつた」というのが正直なところだ

「…距離…と…？」

「もちろん、嫌われている…とは思つてない。ただ何か感じるんだ、壁…とか…隙間…」

そう榛名に伝えると、しばらく無言の時間が続いた。その後「提督になら…？」と榛名が話を始めた。

「提督、午後から少し、お時間いただけますか？」

「ああ、執務はもうほとんど終わってるし問題ないが……どうした？」
「来て欲しいところがあります」

そういつておもむろに手を引かれた私はされるがままに榛名についていくのだった。

光と闇

一 国立横峯総合病院

榛名に手を引かれ連れられたのは鎮守府から車で20分ほどの艦娘専用の総合病院だつた。鎮守府の正門を出ると慣れた手つきでタクシーを呼び、「いつものところで」と運転手にいう榛名。

あつという間にこの病院に連れて行かれ、何が何だかという感じだ。病院について最初に気になつたのは、不自然に厳重というか、警戒が激しいようと思えるところだ。無数の警官が入り口では巡回?しており、病院のいたるところに監視カメラがついている。

艦娘専用の病院としか聞いてないが、そこまで厳重にする必要性が私にはいまいちピンとこなかつたので困惑してしまつた。

「ここは… 初めて来るな。 誰か入院してますのか?」

「はい。 私の姉妹艦である比叡がここで入院してます」

「榛名に姉妹艦がいたのか…。 全然知らなかつたな」

「無理もないですよ、横峯鎮守府在籍の頃ですからね。 まあ立ち話で話すような内容で

もないですし……経緯は追つて話しますね、ではこちらへ

タクシードと同様、手際よく警備員らしき人に私のことを説明してくれたらしく、厳重な警備の中入館証をもらい、すんなりと入れることができた。一つ引つかかるのは榛名が私が提督だと説明した際、警備員に「B病棟では他の艦娘とは関わるな」と念押しされたことだ。初めて来る場所でなんのことと言っているのかはさっぱりだつたが、何やら嫌な胸騒ぎがした。

中に入ると案内板があり、その前で榛名から病院についての説明を聞かされた。

「この病院は大きく分けてA、Bの病棟の2つのエリアに分かれています、ここがA病棟です。比叡お姉様はB病棟の201号室で入院されていますので、少し距離がありますがご辛抱ください。あ、あとAからBに移動する際には提督が首から下げられている許可証の提示を求められますのでその際は見せるようにお願いします」

「わかった。じゃあすまないが案内を頼むぞ」

（病棟の移動で許可証が必要？　さつきから解せないことが多いなこの病院は……）

榛名の後ろをついていきA病棟を歩いているとちらほらと他の艦娘の姿が目に付いた。必死に松葉杖をつきながら歩く練習をする軽巡洋艦、弓を引く動作を繰り返しては手の震えを抑える空母、他の鎮守府の提督らしきものにしがみ付き「ごめんなさい、ごめんなさい」と泣きじやくる駆逐艦の姿。

戦いという使命を背負つた艦娘を指揮する以上、このような事態も想定するべきだろう、そう頭ではわかつていても実際にその現場を見てしまうと思わず目を背けてしまう。苦渋の表情でその様子を眺める私に榛名が声をかけた。

「…提督は艦娘の損傷ステータスはご存知でしようか。こここの病院にも関係しているのですが」

「え？ あ、ああ。もちろんだ。小破、中破、大破そして… 轟沈だな。ここにいる艦娘たちは皆きつと大破以上の損傷を受けたが轟沈には至らなかつた。だがあまりに損傷がひどいため入渠しても直らないのを復帰を目指して治療している… といったところか。そもそもそうでなきや艦娘の病院があること自体に違和感があるしな」

「さすがですね。提督の仰る通り、大破と轟沈の間の艦娘がこの病院に入ります。実はこの間には正式ではありませんが損害状態には2つ名前がついています。1つはここA病棟に入る艦娘たち、そのステータスを『瀕死』としています」

「A病棟で『瀕死』… か、ということはB病棟はさらに…」

そう口にしけけ、前を向くと、重たい鉄の扉が立ちふさがつた『B病棟入り口』と書かれた場所にたどり着いた。扉の前には4人の屈強な警備員、いや武装している様子を見ると警備兵が立ちふさがり許可証を要求してきた。慌てて許可証を見せると、表情をピクリとも変えず、比叡が入っている201号室まで連れて行かれた。B病棟は薄暗

く、窓もない、またA病棟と病室には何重にも鍵がかけられており、外を出歩く艦娘も見当たらない。

（なんだこー・： さつきとまるで雰囲気が違う、病棟が分かれていることには意味がありそうだな…）

「ここだ。面会が終わつたらそこのブザーを押せばまた迎えに行く。では鍵を閉める」
淡々と指示され部屋に入れられた直後、ガシャンと、重たそうな扉が閉められ目に飛び込んできたのは口には酸素マスクらしきものがついている『比叡』の姿だった。眠る比叡のベッドの隣には先ほど金剛が抱えていた花束が置かれており、金剛型の姉妹艦だろうか、4人で写つた写真が飾られていた。

「彼女が比叡… なのか」

「はい、2年と5ヶ月前、轟沈しかけの状態で発見された比叡お姉様です。かろうじて生命活動は維持していますがいわゆる『植物状態』で現在も意識が戻らない状態が続いています」

「そう… だつたのか。しかしこの様子だとやはりこの状態は『瀕死』ではない… それ以上…」

「はい、御察しの通りです。先ほどの話の続きになりますが、B病棟は通称『亡霊病棟』。状態『亡霊』の艦娘が入渠します。比叡お姉様もこの『亡霊』として登録されこの病院

に入院しています」

「ほ、亡靈……？」

『亡靈』……轟沈することはなかつたにせよ、戦線復帰は絶望的、もしくは心に一生癒えない傷を負つたような艦娘を指す言葉です。死ぬこともできず、また艦娘としての使命を果たすこともできない。そんな生死の狭間を漂つているものたち……それがここB病棟の住人です』

そう話した榛名は長らく使われていない様子の来客用のパイプ椅子を取り出し、寝ている比叡のベッドの傍に用意すると

「長い話になるとお茶を用意してきますね」と奥に消えていった。

しかし……窓の無い部屋、外側から閉められる鍵、そしてこの異様なまでの警備……本当に病院なのか？　まるで……

「……まるで刑務所みたい……ですよね」

部屋を観察し、深く考え方をしていると、まるで心を読んでいるかのように
「あ、いや……まあ正直そういう印象だな。とても治療するために入る病院とは思えんな」

「無理もないですよ、私も最初ここにきた時はそのような感想でした。『亡靈』に登録され入院する艦娘の中には、提督、広義で捉えれば人間に對して嫌悪感を持ったものや、あ

まりの甚大な損傷ゆえに暴走する可能性のある艦娘も少くないんですよ。そのため、外の監視や先ほどの警備兵によつて厳重に警備されているんです。艦娘は人間よりも優れた身体能力を持つ故、反旗を翻した時の被害は甚大です。ここはそれを抑制する施設もあるんです」

「亡靈……か……しかしどうしてこんな状態に……」

大抵の戦闘において損傷を受けた際は被害の大きさの有無に問わず一旦撤退するのが定石だ。これは戦場の情報を持ち帰る意味と艦娘たちの方が一に備えての意味を持つており、よっぽど逼迫した状況でなければこれを基本に作戦指示をするようにと教わった。

だからこそ不思議なのだ。運悪く一撃で大破することはあっても、状態が万全の状態から轟沈直前まで陥ることなど、想定上まずありえない。

「私も詳しくは知りません……。2年と5ヶ月前……。正確にはその前後1週間の間の戦闘の中で負傷し、この状態になつた……とだけお姉様から聞かされました。それ以上はお姉様も話そうとしなくて」

「原因は比叡自身の練度が低かつたか……もしくは疲労がたまつていて判断能力が鈍つていたとかか？」

「いえ、それは考えにくいです。比叡お姉様は金剛姉様に次いで練度は高かつたですし、

その……言いづらいのですが前の提督とは仲が悪くほとんど出撃させてもらえてなかつたようで」

「そうか、ならその線もないか。しかし情報が少ないな。その事件後に金剛に変わった動きはなかつたか？」

「あります。というか……変わりすぎてどこから話していいのか……一つ確実にかわつたと言えるのはそれ以降の提督への態度……ですかね」

榛名の話によれば金剛はその鎮守府の着任した当初は、提督への忠誠心はかなり高かつたらしい。どんな命令にも『提督のために』と二つ返事で従い、無理な出撃を組まされても文句ひとつ言わず、むしろ嬉々として出撃していた。だがある日、榛名が長距離遠征に行き、1週間後に帰港すると唐突に、比叡の戦線離脱、同時に金剛が問題を起こし、処分されたと聞かされたというのだ。

「榛名の遠征中に何かが起き、態度が急変……か。話を聞く限りにわかには信じられないな」

「私も最初は耳を疑いました。盲信……という言い方が悪いかもしけませんが提督に全面の信頼を寄せていた金剛お姉様が些細なことで問題を起こすとは思えませんでし

たし……」

「ふむ……となると前提督と比叡がらみで何かあつたという線が一番強いな。金剛はと

もかく前の提督は比叡と仲が悪かつたみたいだしな。前の提督の名前とかわかるか？
もしかしたら士官学校で知り合つてゐるかもしけん、そいつと連絡を取れば……
「名前……ですか？　ええと確かに着任時に一回だけ……確かに『西条イツキ』って名のつて
たような……」

「西条イツキ……まさか……。榛名、そいつ右目に眼帯か何かしてなかつたか？」

「あー！　そうです！　大きな黒の眼帯を常につけました！」

「やつぱりか……。金剛の話や比叡の状態でもしやと思つたが……。そいつは私の同僚、
いや同僚だったやつだ」

「だつた？」

「辞めさせられたんだ。私が士官学校在籍中に、全生徒の中で唯一退学処分にされた男
だ。それ以降は親の元で働いていると聞いたが……まさか……」

「ちょ、ちょっと待つてください！　確かに提督になるには士官学校を卒業しないといけ
ないんじや……」

「あいつの親、本部に配属されてる軍関係者なんだよ。そこのつながりで提督になれた
のかもしれん」

「そうだつたんですね……確かにそう言わるとあまり作戦指揮には参加していません
でしたね」

「榛名、できるだけ前の鎮守府での西条について教えてくれ。艦娘の扱いとか、作戦指示の方法とか、とにかくなんでもいい。もしかしたら今回の一件の手がかりになるかもしけん」

「わかりました！　ええと…　そうですね…」

眠る比叡の横で、昔の記憶を必死に掘り起こし榛名は私に情報を伝え続けた。どうやら私が思つてた以上に金剛の件、いやこの国の艦娘の扱いは闇が深い。言いようのない不快な悪寒が私の周りを包むのだつた。

悪夢の始まり

「早く！ 早く手当てを！ 血が止まらないぞ!!」

「ダメだ… 傷が塞がらない。 許容できるダメージを超えている」

「おい！ 誰か酸素マスク取つてこい！ 緊急だ！」

周りを取り囲む救助隊や医療関係に努めている艦娘、その中心には自分が最も愛する妹の一人、比叡がいた。絶え絶えの呼吸、止まらない出血。目の前の命には確実に終わりが迫つてきている。だが、人波をかけ分け比叡に近づこうとすればするほど、暗闇は広がり、取り巻きは遠のいていく。

「… !!」

叫ぼうにも声が出ない。手を伸ばそうにも力が入らない。そうしている間にも比叡はどんどんと遠ざかる。

「えい… 比叡!!」 ピピピピ ピピピピ ピピピピ…

「遠征30分前です。担当の方は準備をお願いします。繰り返します…

ベッドから飛び上がり、必死に伸ばした手は虚しく宙を掴む。

けたたましい目覚ましのアラームが鳴り響く中、眩しい日差しが差し込む部屋で目覚

めた私は全身が汗だくだった。

部屋の外では朝の遠征アナウンスが流れ、一気に現実に引き戻される。

「ハア・： 最悪の寝覚め・： つてやつネ」

どうやら夢だつたらしい。いや、悪夢か。右手で顔を抑えながらゆつくりとベッドから洗面所へ。まるで二日酔いしているかのような気持ち悪さと頭痛を忘れさせるように、思い切り顔を洗う。

手をつき、顔から滴る水分を眺めながら、ようやく落ち着きを取り戻す。この悪夢を見たときはいつもこうだ。

「榛名はー・： またお出掛けですかネ。 今日は一緒にフレンチトースト食べる予定だつた気がするのですが・：」

今週一週間は珍しく二人同時に2日間の休みが取れた。まあ休みが取れたと言つてもこの鎮守府なら特別2日くらいの休みいくらでも希望を出せば取れる。実際は私自身が前の鎮守府の影響が全くと言つていいくほど休みを希望せず、あまりに取らない為提督の方から「艦娘健康ウイーク」と称された休暇強化月間に付き合わされて取らされた休みが偶然榛名の希望休とバツティングしただけだ。

慣れない休みに悪夢で目覚める最悪な休日の2日目。

窓の外を眺めると外のグラウンドでは駆逐艦達が楽しそうにラジオ体操に興じてい

た。ああ、そういえば健康ウイークの要綱にはそんな企画もありましたね。

ほんと…この鎮守府は…

「甘々過ぎておかしくなりそうね…」

この2つ目の鎮守府に配属になつて、もう2年は経つのに、私自身はこのぬるま湯のような生活にいまだに慣れない。今でこそ多少は順応できるようにはなつたが、着任当初は驚きの連続で開いた口が塞がらなかつた。

週に少なくとも2日以上の休み、豪華で選択の権利のある食事、体調不良や怪我に対する異常なまでの気配りとそれに備えた高価な設備。以前いた鎮守府とはまるで違う扱いに、正直困惑する毎日だつた。…いや今もそうか。

鎮守府に順応できない私は対照的に、同時期にきた榛名はすっかり今の生活を楽しんでいる。姉として幸せそうな榛名を見られるのは嬉しい限りだが、なんだかこの鎮守府で自分が除け者のような寂しさや虚しさばかりを感じる毎日だ。

「榛名は前に進んでいるのに…。私の時はあの時から止まつたままね…」

初夏のじんわりと暖かい風に髪を揺らされながら、空を見上げると雲ひとつない快晴。

ああ、あの日もこんな日だつたな。窓に頬杖をつきながら“最初の鎮守府”的記憶を思い出すのだつた。

—3年前

建造されてから約半年。研修センターと呼ばれる艦娘育成学校に通った後、私は「西鎮守府」に配属となつた。当時の現場では珍しく、成績に応じた研修免除が適用され、本來1年かけて行うカリキュラムをその半分で卒業できた。

自分でもわからないくらい、当時は提督という存在が大きな存在で、生きる意味でもあつた。

「早く提督の役に立ちたい」

顔もまだわからない”提督”に突き動かされ、期待とやる気で満ち溢れながらの着任だつたのを今でも覚えてる。

「俺がこの鎮守府の提督、西条だ。金剛…：だっけか、まあよろしく頼むわ」「はい！ よろしくお願ひしマース！ 絶対にお役に立つて見せマース!!」

「うんうん、流石はエリート艦娘だけはあるね。楽しみだわ」

夢だつた鎮守府での生活。本でしか見たことがなかつた憧れの提督。

ああ、これから私の素晴らしい艦娘人生が始まる。そう疑わなかつた。

その後、秘書艦であろうか、やけにオドオドとしている駆逐艦に二人一部屋の相部屋を案内され、その日は終了した。

軋む廊下、壊れかけの照明、窓はなぜか塞がれてるもののが多かつた。自分が想像して

いた鎮守府とは少しイメージが違つたが、まあ寝られる場所さえあればと特に気にしなかつた。

「こ…ここです。 比叡さんと相部屋ですので…では…」
開けられた部屋はがらんとしていて、無機質にベッドが2つ置かれているだけだった。

「アー！ ちょっと待つネ！」

「ひつ!! ごめんなさい！ ごめんなさい！ 許してください！」

「いやいや、別に怒つてないデスよ。ただ、他の艦娘とすれ違つた記憶がないのデスが…。同室の比叡もいないようデスね」

「…こここの艦娘は今全員が戦闘に出られてます。いるのは私と提督様、そしてあなただけです。では…」

「そう…ですか…えっとじやあ…つてあれ」

後ろを振り向くと先程までいた駆逐艦はもういない。

用件のみを伝えると、そそくさとどこかへ消えてしまつたようだ。

うーん、初日は同じ鎮守府の艦娘に挨拶したり、こここの雰囲気を聞いたりするものだと思つてましたが…。

今思えばこの時の違和感がすでに、この鎮守府の異常さを物語つているものだつた気

がする。

部屋のボロボロの窓から漏れる冷たい風が髪を揺らす。
なぜが妙な胸騒ぎが私を包むのだつた。

過ち

「へーイ！提督う！ 今日も資材ウンと持つてきたねー！」

「うんうん、ご苦労。 マジで助かるわー… ジや、次はここ頼むわ」

「OKネー！ ジやあ行つてくるヨー！」

鎮守府に着任して3ヶ月が経つた。早々に長距離遠征に連れて行かれた時は少し困惑したが、次第に順応もすることができ、メキメキと実力を上げることができた。そんなワタシの頑張りを認めてくれたのか提督は次々とワタシに新しい仕事を与えてくれるようになつた。段々と増えていく仕事に、うれしい悲鳴をあげながら、提督の「助かつた」を聞くために死に物狂いで仕事をした。

「さて… 今日はここと残り2箇所の遠征、あとは夜の出撃が1回で終わりですネ… ふー…」

部屋で次の出撃の場所を確認する。最近どうも疲労が取れない。高速修復材の効きも悪いし… どうしたものか。

ため息交じりにそんな考え方をしていると、部屋のドアが勢いよく開かれた。

「お姉さま！ 今日もお疲れ様です！ お怪我はありませんでしたか!?」

「ひ、比叡お疲れ様ねー。 大丈夫ヨ。 この通り、ピンピンしてるねー」

「そう…ですか。 で、でも絶対に無理はなさらないでくださいね！ いくらスーパー艦娘のお姉様でもお身体は一つしか無いんですからね！ 大体姉様はいつも頑張りすぎです！ この前も…」

（あー… また始まりましたネ…）

今、説教交じりのアドバイスをしているのはワタシの姉妹艦『比叡』。 同室のルームメイドで、姉妹艦の彼女とは、着任してから一番最初に仲良くなつた… と言うよりは一方的に彼女の方に好かれてしまつた。

きつかけは一緒の出撃で比叡を敵の攻撃からかばつたことが発端だつた。 正直そこまでする必要のある場面でもなく、「提督にいいとこ見せたい」と言う下心丸出しの行動だつたのだが、それが彼女にとつては何より嬉しかつたらしい。

「作戦よりも私をしてくれた… 命の恩人です！ 一生ついて行きます！」

そう言つて、この一件以降は何があつてもまるでコバンザメのように暇さえあれば私がついてきて色々とよくしてくれるようになつていた。
最初こそ可愛い妹ができたようで嬉しかつたが、日が経つにつれ過干渉の母親のようなうつとうしさを感じるようになつっていた。

後から来た榛名も姉妹艦ということもあり、私を慕ってくれているが、比叡には「流石にやり過ぎですよ……」といつも苦笑いをしていた。

だが正直そんなうつとうしさなんてかわいく見えるくらい「お疲れのようですね。よかつた、ちょうど渡したいものが……」「ん？ なんですかこれ……。はつ！」

「手作りのカレーが入ったおにぎりです！ 今回こそはうまくいったと思うので！」

漂う異様な匂い 何を入れたのか見当もつかない色合い。彼女が差し出したそれは間違いないなくカレーではない、いや食べられるかも怪しい何かだつた。

「うーん…… 香辛料たくさんいれたんですけど…… 足りなかつたかな」

（いやいやいや！ 香辛料とかそんな些事な問題ではないですよねこれ！）

「あー！ ソーリー！！ 今回はあまり時間がないのでそれはまた今度で!!」ガチャ

「ちょ！ お姉様！ この前もそれ聞きましたよ！ お姉様！」

（他は良いとしてもあれだけは回避しないとですね……）

比叡、改めお母さんを振り切つて出撃するため集合場所に到着したが、そこには絵に描いたように暗い顔をした艦娘たちがずらりと並んでいた。

「はあ…… 今日もお休みもないんだね」

「私なんてもうしばらく部屋にも戻れてないよ……」

こここの鎮守府では基本的には休みはない。よくて出撃や遠征で大破や轟沈寸前までいつた艦娘が臨時休暇という形でドックに入れられるくらいだ。今思えば異常な環境だったが、当時の私含め多くの艦娘にとつてはそれが「普通」であり、ワタシに至っては喜んでこの場を楽しんでいた。

「サー！みんな元気出して！ 提督にいいとこ見せましょーー！」

「…相変わらずだねー。金剛さんは」

「まあ、ぼやいてもしょうがないか。旗艦よろしくね！」

「任せるネー！ レツツゴー！」

さあ、今日も出撃だ。連日の出撃で尚且つ負傷もしなかつたから、すでに3日くらいはほぼ出ずっぱりだが、提督のためだ。少しでも役に立てるよう頑張ろう。あー、でもやはり疲れが溜まっているのかな、目が少し霞む。

本調子ではないものの、そこまで難しい海域ではなかつたので、難なく出撃を成功させた。

また1つ、提督の役に立つことができた。この喜びで疲れも吹っ飛ぶようなものだ。
一提督!! 敵全艦撃破したヨー！ 旗艦金剛、只今より鎮守府に戻りマース！
ういー。よくやつた、じゃあ早めに戻つてきてね。もう1つ出撃してもらうか

らー

「了解でーす！」

（…と威勢よく返事はしましたが、もう一戦となると結構きついネー… 一旦戻つたら補給を…）バタツ

「？ 金剛さん!? 誰か!! 金剛さんが！」

一瞬で視界が真っ暗になつたかと思うと、私はその場に倒れこんだ。

「… ザけないでください。 こんなに無理させといてなんですかその態度は！ それでも司令なんですか⁈」

「あー？ つセーな、ただの疲労だろ。鍛錬不足だろ」

誰かの口論の声で目を覚ます。どうやらここは病室か何かのようだ。

（あー… そうか… 私… 気を失つちやつてそれから…）

「こんなことが続くようじゃ… 上に報告しますよ？」

「あ？ んだと生意気だな、艦娘のくせに。お前の愛しの金剛お姉様だつて俺には解体する権利だつてあんだぞ？」

「つ… サイテーですね… ほんと」

ぼーっとしていた意識と視界が、だんだんと戻つてきた。どうやら近くにいるのは提督と比叡のようだつた。

「て… 提督？… それに比叡… どうしたんですか…？」

「!! お姉様！ ご無事でしたか!! 本当に… 本当に良かつたです!!」

ベッドからスッと起き上がり、声をかけると、今にも泣きそうになつていていた比叡が飛びついてきて、前から思いつきり抱きしめられた。

「ちょ… 比叡、苦しい！ 苦しいですよー！ もう！」

「はつ… すみません！ お姉様！ 安心してしまつてつい！」

「別にいいですヨー。それよりこれは…」

比叡の話を聞く限り、どうやら私は疲弊が限界を迎へ、倒れてしまつたらしい。隊の艦娘に医務室に運んでもらつたあと、約半日以上はこのベッドで寝ていたようだ。

「んだよ… やつぱ大丈夫じゃねーかよ。手間かけさせやがつて… 戻つていいか？ 忙しいんだよ」

奥の方で携帯片手に見ていた提督が、あくび混じりにこういつた。

(あれ… 想像以上に冷たいですね…。少し悲しいな。でも今回の失態で失つたものも大きいだろうし…)

「ティトク… 申し訳

「ツザケンな!! 良い加減にしろよ!! てめえ!!」

「!? ひ、比叡!？」

言葉を発しようとした次の瞬間、激昂した様子の比叡が提督に怒鳴り始める。

「……お姉さまの手前、これまでずつと我慢してきましたがもう限界です」

「つせーな……。急に大声出すなよ」

「なんなんですかその態度、元はと言えば無能なあなたのせいでしょ？　お姉様をこんなにして……司令としての自覚はないんですか？」

「自覚だあ……？　テメエこそ艦娘としての自覚あんのか？　さつきから逆らいまくりやがつて」

「クソみたいな環境で自分の昇級のことしか考えない上官になんて従わないといけないんですか？　私、マゾヒストじゃないんで」

「つち……。てめえ……」

「……めて下さい」

「あーすみません。恐怖政治敷いといて大した戦果も残せてない司令なんて例えマゾだつたとしても嫌と訂正しますね、このクソ……」

「ヤメテ！　私の提督を侮辱しないでください!!」

自分でもわからなかつた。気がついたら私は大声で叫んで……そして泣いていた。ただ、心が締め付けられ、これ以上聴いていたくない。そんな本能的な衝動が無意識に行動に変わっていた。

「お願ひだから……もうやめてください……」

「お… お姉様… ? よく考えて下さい！ こいつは… いえ… 司令は」
 「… 出てつて下さい。今は比叡とは話したくないネ」

「しつ… しかしですね、お姉様… 」

「出てつて下さい!! 」

「… 申し訳ありませんでした。… 失礼します」ガチャ… バタン

何か言いたげにしていた比叡だつたが、泣いている私を見て少しうつむいた後、静かに部屋を後にしていった。

「ふふつ… あつはつは！ すげえ… いや最高だよお前！ それでこそ艦娘だよなあ
 ! いやあひさびさに気分いいわあ。金剛… だつけ？ お前ますます気に入つたわ
 !」

(私… どうして提督を…)

ずっとと思い焦がれていた提督という虚像が、この事件をきっかけに少しづつ、崩れていくのを感じた。

終の始 前編

比叡とのあの一件以降、私は提督に大層気に入られトントン拍子で専属秘書艦まで上り詰めた。

出撃の時は毎回旗艦、遠征等の雑務は全く回されず、その時間を提督の上官との会議や食事会に使われた。

憧れだつた提督の右腕として毎日を過ごす日々とは反比例して、比叡とはめつきりと会うことがなくなつていった。

(比叡： 最近は部屋にも帰つてきませんね……)

相部屋ということもあり、この前の一件について話す機会はあるだろうと軽く考えていたのだが、当の本人がめつきり部屋に戻つてこない。提督に聞いても答えてくれず、周りの艦娘に聞いてもただ、遠征や出撃が大量に入つてているらしい、とだけ。

以前は割と暇そうにしていた印象だつたのだが……

(まあ…… いつか話せますよね。怒つてはないみたいデスし)

そう楽観視できるのはあの日以降はいつも部屋に作り置きのカレーと置き手紙があるからだ。

手紙にはいつも手書きで「今日も頑張つてください、私も頑張ります」とだけ書いてある。やけに殴り書きしているところを見るとほど時間の合間を縫つてくれてるのが想像できる。

もう一踏ん張りという意味がよくわからないが、

(うへえ・： 何度食べても結構厳しいですね・：)

そうは思いつつも、置いてあるカレーは完食した。

あの一件以降、私は提督というある種偶像化していた尊敬の念が崩れはじめ、それとは対照的に比叡に惹かれはじめた。

私のことをまるで自分のことのように怒つてくれた姿。正直ひどいことをしてしまった私を許してくれる寛容さ。

相変わらず刺激的な味のカレーだが、そんな思いがある今はとても愛おしく、そして温かかった。

「さーて！ 今日も元気100倍ネー！ しゅつげーき！」

いつしか、比叡のカレーを朝食べてから出撃するのが私の日課になつていつた。本物の宝物を見つけたようなワクワクした日々だつた。

それから1週間ほど経つたある日、なぜかいつもあるカレーや置き手紙が見当たらぬい。

(あれ？ 今日は忙しかつたんですかね？ まあ善意でやつてもらつてゐるわけですから
ネ。 文句は言えないデス)

まあ朝からドタバタして いたのだろう。 そう軽く考えて いた私の予想は最悪の形で
裏切られた。

お昼手前くらいだろ うか、 軽い遠征から戻ると何やら鎮守府内が騒がしい。 ひよいと
様子を除くと何やら人ばかりと、 医療班？ が大慌てで いるのが見えた。

「な、なんの騒ぎですか？ 誰か怪我でも…」

「金剛さん！ 大変です！ 比叡さん、 比叡さんが大怪我を！」

「？」

「早く！ 早く手当てを！ 血が止まらないぞ！」

「ダメだ… 傷が塞がらない。 許容できるダメージを超えて いる」

「おい！ 誰か酸素マスク取つてこい！ 緊急だ！」

周りを取り囲む救助隊や医療関係に努めている艦娘、 その中心には自分が最も愛する
妹の一人、 比叡がいた。 絶え絶えの呼吸、 止まらない出血。

「比叡！ どうしたの？ その傷！ 比叡！」

「ダメです！ 近づかないでください!! 今は一刻を争つてます！」

「イヤね！ ここを通す… 「今は一刻を争う状況です！ 落ち着いてください！ 事

情は後で話しますから！」

「…　はい」

「金剛さん…　ですね。お気持ちは察しますが、比叡さんのことについてはまた詳しくお話ししますので今は抑えてください、では」

「わかり…　ました」

必死に比叡に近づこうとしたが、医療班に制止された。若干パニックになつており、気持ちを抑えられず强行しようとした私は叱咤され、ようやく少し落ち着きを取り戻した。

「そうね…　今は比叡の治療を…」

運ばれる比叡は鎮守府を出たところのすぐ待ち構えた救急車に搬送され、おそらく病院へと運ばれていった。

「一体何が…　どうなつて…　比叡…」

全く状況の掴めない私はただその場に立ち尽くす。

比叡との最後の会話を思い出しながら、放心状態の私はただ、彼女の無事を祈つていた。

終の始 後編

比叡が病院に運ばれた日、私は初めて遠征を無断で休んだ。

医師の1人に渡された名刺に書いてある病院の住所に気がついたら走りだしていた。
(比叡… 比叡！ お願い無事でいて… !)

無我夢中で鎮守府から飛び出してどれだけ走つただろう。切れ切れの息でたどり着いた病院。急いで受付で尋ねる。

「…ひ… 比叡つて… 艦娘が… ここに… 運ばれてませんか… !」

汗だくの私が息を切らしながらたずねる私に受付にいた看護師は少し驚きながらも、一息おき、話し始める。

「… 金剛さん、ですね。 少々お待ちください… 先生… 金剛さんが…」

少しすると白髪でかなり年配の医者らしき人物がわざわざ受付まで駆けつけてきた。看護師から話を聞き、金剛に近づく。

「比叡さんのことですよね…。お話ししますので気を強くもつて聞いてください」

比叡という言葉に顔を曇らせる医師は、少し時間をおいて重たい口を開いた。

「現在… 意識不明の重体ではありますが、命に別状はありません。止血も終わり容態は

安定しています。ただ……」

「ただ……？」

「彼女が目を覚ますことは……ないかもしれません。こればかりはどうしようも……」

——鎮守府

『いわゆる植物人間の状態ですね。からうじて生命活動は確認ができますが……今後はこれを維持しつつ……』

『植物人間』その言葉が頭から離れない。その後のことはよく覚えていない。医者や看護師から励まされたり、医療費がどうとかの話をしていたがそんなことはもうどうでもよかつた。

もう比叡とは話せないかもしない。その場にいる愛しい人は決して自分を見ることも話すこともない。それは存在がある分、ある種死よりも残酷に感じた。

自室に戻り、ふさぎこんでいると、けたたましいアラームとともにアナウンスが流れた。

〈提督よりアナウンスです、本日遠征予定の金剛さん、至急提督室まで……繰り返します提督より……〉

「あ……そうか、遠征……無断で休んだの謝んなきや……」

トボトボと重たい足取りで提督室に向かう。

「失礼します。… その… 今日は申し訳ございません、遠征の件ですよね」

「おつ金剛か。 いーよいーよ。どーセクソみたいな消化遠征だつたし。それとは別件よ」

無断欠勤、普段だつたら激昂しかねないと思つていたのだが、意外にもそれに関してもお咎めなし。拍子抜けの顔をしていると、嬉しそうに提督が耳打ちしてきた。

「… で？ サボつてまで見てきた比叡の様子どうだつたよ」

「へ？ なんでそれを…」

「偶然窓の外眺めてたらお前が外走つてく姿目にしてよ。病院にでもいつたんじやねーのかつて思つてよ。まあなことどうでも良いや、報告たのむぜ」

「は、はい！ 病院で様子を見てお医者様にお話を聞いてきたのですが… 意識が戻らないかもつて…」

(ああ、やっぱ提督も心配で…)

「あー、まじか」

「は、はい！ でも！ 一命は取り留めたのでもしかしたら今後は…」

「んだよ、生きてんのかよ。疲労させ具合が甘かつたなあ、俺としたことがどちつたぜ」「…え？ それってどういう意味でしようか…」

「あいつ前々からウゼーと思ってたからさ、ちょうど良いし厄介ばらいしようつて計画

練つてたわけよ

思考がフリーズする。目の前にいる提督の言葉が耳に入つてこない。私がしばらく黙つていると、得意げに提督が話し始めた。

「1週間あいつのために特別無休の遠征メニューグループんでやつて、ようやく頃合いかと思つてやべえ海域、単体で放り込んだのによ。無駄に丈夫なやつだぜ全く」

「うそ……ですヨネ。提督がそんなこと……するわけ……」

「あー、まあ俺がやつたといえば嘘になるなw。あいつ『私がお姉様の分まで働けると証明させてください』とか抜かすからよ。ちょうど良いなと思つてさつきのプログラムにぶち込んでやつたんだよ。これ耐えたら金剛の件考えてやるよつてな、我ながら天才的な機転だわ」

『頑張つてください、私もお姉様のために頑張りますね』

提督の言葉を聞いた瞬間、カレーに置いてあつた置き手紙を思い出す。

(まさか……あの手紙の意味つて……！)

「そんな……じやあ比叡は私の……私のために……」

『お姉様！　今日も海域大変でしたね！　お疲れ様です！　明日も頑張りましょう！』

「まあ、そうなるなw。あん時の比叡の期待に満ちた表情w。忘れらんねえw　んなもん耐えたつて何にもないのになw」

「道具…？」

『怪我だけはしないでくださいね、あー！　私は大丈夫です！　この通り体だけは元気で…ははっ』

「あー？　何さつきからブツブツいつてんだ？　あー何？　自分もやられるんじやないかって心配なの？　まつ、そう気にすんな、聞き分けのねえ道具を処分したつてだけだ。明日は我が身だ、氣をつけろよ、比叡の後釜くん』

パリンッ

「B u l l s h i t !　お前だけは!!　絶対に許さない!!!」　ガチャつ

ズドンという鈍い音とともに提督の横の壁が吹き飛ぶ。気がつくと私は片手の艦装を完全に展開していた。

「ちょ…　おい…　待て冗談だよな…？」

「許さない!!　許さない!!　お前だけはあ!!!」

揺れる天井、きしむ床。次々と放たれる砲弾は提督室を完膚なきまでに破壊していく。

「おい！　誰か!!　誰か助けてくれ!!　誰かあ!!」

「バタン！　憲兵だ!!　なんだ今の音は!!」

「バカ憲兵！　おせえんだよ!!　早くこいつを止めろ！」

「おい！ こいつ艦装を…… 至急本部に連絡しろ！」

「くつ！ もう良い！ 発砲用意!! 打てえ!!」

パンツ パアンツ

提督の護身のために憲兵が騒ぎを聞き、提督室に駆けつける。

抑えようと発砲する憲兵だつたが、艦娘の前では全くの無力同然だつた。

「手を上げろ！ 暴れている艦娘が…… いると…… つてこれは…… 一体……」

その後、連絡をもらい後から駆けつけた本部の憲兵が見たものはガラガラと崩れ落ちる『提督室だつたもの』、そして倒れた提督や憲兵の横で血を流しながら艦装を展開し、立ち尽くす私の姿だつた。

「艦娘つて…… あなた達にとつて…… なに……？」

最後の意識を振り絞り

憲兵に問い合わせた後、私はゆっくりとその場に倒れ、事件は幕を閉じるのであつた。

無意識の拒絶

事件から程なくして憲兵たちに取り押さえられた私は、ひどい精神疾患を起こしていった上、狭い部屋での発砲による怪我の具合が酷かつたため、ひとまずは艦娘専用の病院へと搬送された。

精神鑑定も終わり、正常に戻った私のもとに数日後、軍部から通達があつた。

本事件主犯、金剛の処遇

別鎮守府へ異動（その後の異動は軍部の意向のみで決定する。自己希望は認めない）

今後一切の昇格、昇進なし

執行猶予10年

後から聞いた話では、艦娘が人間に逆らつたという事実、提督のバツクについていた大手軍事企業のイメージダウンを嫌つた軍の上層部が隠蔽のため、司法を仕組んだため、このような軽罪で済んだらしい。

人生というものはなんとも不思議なものだ。殺そとまで考えた奴らに救われるな

んてー

「… 皮肉なものデスね。どうせなら…」

言いかけた口を噤んで、新しい鎮守府へと向かう。

憧れていた提督と一番自分を思つてくれていた比叡、同時に失つた私はこれから何を目的に生きればいいのかわからなかつた。

「現在に戻る

「一まもなく夕ご飯の時間です。寮の方は準備が出来次第食堂に…」

夕ご飯の時間を知らせるアナウンスで、ハツと目を覚ました。

どうやらまた窓際でうたた寝してしまつたようだ。

頬杖の跡をさすりながらゆっくりと洗面所へ向かい顔を洗う。下駄箱にはまだ榛名の靴はなく、まだ何処かへ出かけているようだつた。

「はあ… たまの休みは結局… ほとんど寝て終わりましたね…」

軽く身支度をして、玄関前で靴に履き替える。靴を脱いだり履いたりする習慣が無かつた昔は窮屈に感じたこの作業も、今ではすっかり無意識にできるようになった。座つた状態で、ボーッと、寝ぼけ眼を擦つていると、ドアの向こうから聞き慣れた声がした。

「… りがとうございます。うまくいけばお姉様もきつと…」

「… こちらこそ。また例の件で何か情報が…」

(榛名と… 提督でしょうか)

普段から近くにいる私だからわかるのだが、榛名の声のトーンはいつもよりも高く、そして上ずつている。

昔に比べ大人びた性格になり、あまり好き嫌いを顔に出さなくなつた榛名だが、好きな相手には無意識にとことん甘える性質はいまだ変わつていないようだ。

だが… その相手は…

バタンツ 「随分楽しそうですねー?」

勢いよくドアを開けた先にはやはり提督と榛名の姿があつた。

急に出てきた私に予想外と言わんばかりに驚いた榛名は、明らかに動搖していた。

「つ!? お、お姉様！ すみません、戻られてたんですね！ てつきり…」

「てつきりなんデスか？ 私がいたらまずいですか？」

「あつ…いや、別に…」

トゲのある言葉に気まずそうに目を逸らす榛名。別にこんな嫌味を言いたいわけではなかつたのだが…

お互に何も発さない沈黙の時が流れる中、空気を読まず提督が割つて入つてきた。

「すまんすまん、声が大きかつたか。つい話が弾んでしまつてな」

「別に、もういいデスよ… で、榛名との用は終わりましたか？ 終わつたらさつさと戻つてくれますか？」

「お姉様！ 提督に対して失礼ですよ！」

「あはは… 手厳しいな。まあ用は済んだし、ここへら邊でお暇させていただくよ」

提督と艦娘の主従関係上、普通なら本気で殴られそうなレベルの対応だが…。

本人はあまり気にしていない様子で、じゃあまた、と手を振りながらゆつくりと帰つていつた。

どうしてだろうか、この人はあのクソ提督とは違うとはわかっているのに、なぜか心では酷く提督という存在を見下してしまう。

(私： ただの嫌な奴デスね)

喉に刺さつた小骨のような罪悪感を抱えながら、部屋に戻ろうとした刹那、提督は思いい出したように手を叩き私を呼び止めた。

「… ああ、そうだ、金剛。来週から秘書艦をお前に任せることにしたから。よろしく頼むな！」

「… はあ。わかり… つて… はいい！」

聞き間違いだと思い、後ろを振り向くもすでに提督の姿はなかつた。

— 鎮守府食堂

「——ウソお！ 提督が指名したの!? 艦娘からの提案以外じや初めてじゃない!?」

「どんな徳を積めばなんの対価も払わずにあの場所に…」

「逆に考えよ！ もしかしたら私たちも逆指名を受ける可能性が——」

提督からの直々の掲示板公表により、宣言通り私は秘書艦担当に抜擢された。

当然これはあくまで抜擢、拒否すればそれまでなのだが、そんな艦娘はおろか、逆指名を受けた艦娘がこの鎮守府史上、私が初だつたということもあり、とてもじやないが首を横に振れる雰囲気ではなかつた。

普段はこんな事態になれば私に肯定的な榛名も

「ま、まあこんな機会滅多にないですから、貴重な経験だと思って、ね！ お姉様！」

と珍しくグイグイとくるのにも面食らつてしまい、渋々ではあるが承諾した。

この日を境に、日々の日常は周りも含めて大きく変わつていつた。

善意の対価

「ふああ…あ、意外と秘書艦業務つてハードデスね…」

朝5時過ぎ、提督室へ向かう。

書類整理や午前中の作戦会議の資料作り、またなぜか前の艦娘がやつていた提督室の掃除を含め、秘書艦業務は私の想像を遥かに超えるほど多岐にわたつていた。

「あつ…おはようございます。今朝もずいぶん早いデスね」

「おう、おはよう、金剛。書類の整理が終わらなくてな、今日は少し早めにきてしまつた」
ガチャリと扉を開けるとすでに提督は何かの書類作りをしているようだつた。私が入つてくると少し嬉しそうにこちらに目を向け挨拶をするとまた直ぐに作業に戻つた。
(今日はつて…ここ数日毎日こんな時間ですけど…いつ寝てるんですかねこの人…えっと朝の業務は…)

秘書艦用の机に腰を下ろし、秘書艦になる前日に渡された「秘書艦業務メモ」なるものに改めて目を通す。

これには、前任者たちの業務日記のようなものにはやるべきこと、やつたほうがいいことが事細かに記載されていた。

私が想像していた内容の業務の他、提督室の掃除、お弁当や夜食の作成などの雑務などもあるが、特に目を引いたのはこのメモ。

「※最重要業務※ 提督の体調管理

提督は常軌を逸した仕事熱心です。目を離すと一人で倒れるまで働きます。無理させないように徹底して管理をお願いします」

（仕事のしすぎつて… 何をどう管理すれば…）

嫌々だつたものの、前の鎮守府でも秘書艦業務の経験は豊富だつたと自負していたため、業務自体には自信があつた。

だが、通常の秘書艦業務は基本的には提督の業務改善やサボり防止などが目的のことが多かつたこともあり、その真逆をいくこの鎮守府の業務に早くも自信を喪失しかけていた。

（…ほんと、ここの人たちは何を考えているんですかね… 前の鎮守府とはまるで…）

こここの鎮守府に配属されてから、ずっとこここの艦娘やこの提督がどうしてここまで他人に優しくできるのか、まるでわからなかつた。

何か見返りを求めるわけでも、媚を売つているような様子でもなく、ただただ純粋に他所から配属された自分や榛名を温かく迎えてくれたように見える。

人は必ず、やつたことに対する対価を求める。前の提督が私を利用したように、比叡を利用したようだ。

だから、ここの人たちの優しさを私は「気持ちが悪い」と思ってしまった。
見返りを求めるようなそんな純粋な愛情に、親切に理由のない「嫌悪感」を抱いて
しまった。

何か裏があるんじゃないかと「不信感」を持つてしまった。

：： ああ、いつからこんなに歪んでしまったのだろうか。私はあの事件からきつ
と：

「：： ザう。：： 金剛、大丈夫か？ さつきからずっとメモと睨み合っているようだ
が：： 何かわからないことでも：：」

「えつ、あー、ソーリーね！ 大丈夫よ、色々とやることを見直してて：：」
メモを整理しながら、知らぬ間に随分と考え事をしていたようだ。提督が席から立ち
上がり、心配そうに自分の方に近づいてきていた。

「：： すまないな。急に秘書艦を任せただけでも大変なのに、結構ここ数日激務だつ
たよな。とりあえず午前中は大丈夫だから、少し休んでも：」

「大丈夫です、やります。 提督こそ、ここ数日ちゃんと寝てるんですか？ 無理して倒れないでくださいね」

「えつ、まあ… あはは。 痛いとこつかれたな。 心配ありがとな」

「… 別に心配はしてません。 提督がいなくなると秘書艦の業務量が増えるので…」
 「ハハッ…。 相変わらず手厳しいな… まあそれくらい本音で話してくれたほうが気楽でいいがな」

相変わらず、全く怒った様子も見せず、私の悪態を流した提督はグッと伸びをしてしばらく窓から外の様子を眺めていた。

つられて私も窓を眺めると、朝早くから楽しそうに駆逐艦の艦娘たちが花壇に水やりをしていた。

しばらくして、うんつと小声で頷いた提督は再び席に座り業務に戻った。

——正午

昼の鐘が鳴り、外では騒がしく、鎮守府に残っている艦娘たちが、食堂に走っていく。
 「… よし、私も少し出るとするか。 金剛、今から海岸で少し用事があるのでな、先に失礼するぞ」

普段は声をかけないとお昼に向かわないほど集中している提督だったが、今日は珍しく、お昼の時間早々に立ち上がり、何やら外出の準備を始めた。

「あつ・ それなら私も・・・」

「大丈夫だ！ 私一人でなんとかなる仕事だから！ 金剛はお昼休憩がてら、ゆっくりしてくれ――！」

間髪容れずに慌てた様子で提督は部屋を飛び出した。

(こんな時間に海岸・・・？ 一体何を・・・？)

別にお昼にそのまま行つてしまつても良かつたが、不審な提督の動向が気になつたため、少し跡をつけることにした。

海岸は艦娘たちが帰る帰港口とは反対側にあり、2階にある提督室を出た階段をおり、渡り廊下に出る前のドアを開ければすぐに行ける場所だった。

海岸といつても艦娘たちが普段帰港する場所とは反対側に位置するため、もっぱら潜水艦たちを中心としたグループがよくプールがわりに使用している場所で、あるのは砂浜と海、それと艦娘の誰かが希望を出しつくられたビーチバレー用のネットが設置されているくらいだった。

だからこそ、何かあるわけでもないため、余計に提督が向かつたのが不思議でしようがなかつた。

「えつと・・・ 提督は・・・ どこでしようか・・・ あついました」

お昼時ということもあり、艦娘たちの姿も見えない砂浜にポツリと、軍手をつけた提

督がゴミ袋を持つて座り込んでいた。

波打ち際付近に近づいては、何かを拾い上げ、ゴミ袋に詰める。そんな作業を繰り返していた。

(ゴミ拾い…ですかね。何でわざわざお昼時に…)

突拍子もない行動で、一体何を隠しているのかと内心少しワクワクしていたこともあり、肩透かしを食らつたような気持ちになつた私はしばらく呆然と提督のゴミ拾いを海辺につながる階段付近に座り、じつと眺めていた。

(提督はどうして…)

――――――

「ふう…。思いの外ゴミが落ちてるな…。これは日を分けてやらんとダメかもな…」「ペットボトルのゴミはどの袋デスか？ 結構あつてもう持てないので」

「ん？ ああすまない、ありがとな。これはプラだから… つて金剛！」

心底びっくりした様子の提督が、私のことを見上げ、その拍子で大きく尻餅をつく。

そんな提督を少し眺めた後、何事もなかつたように私はそのゴミ袋を持つていたペツトボトルを捨てた。

「…どうしました？ お化けでも出たような顔して」

「あ、いや…すまない。驚いてしまつてな」

正直一番驚いてるのは自分だつた。目的も意図もわからない、メリットや見返りがあるわけでもないこんな行動に参加するこの行動自体に。

昨日までの自分だつたらきっと、そそくさとお昼に出てしまつただろう。何故かはわからない、無意識の行動だつた。

(私もこの鎮守府に当てられましたかね……)

「すまん、金剛、決して隠していたわけでは……」

「私とつても悲しいデース。ゴミ拾いすらまともにできないと思われてたんですかー？」

「ち、違うぞ！ これくらいなら一人でできると思つて……それに何だ、こんなことに……」

「ジョークですよ、ほら、さつさとやりますよ。言い訳は終わつてからたっぷり聞きますから。……どうせお昼もまだなんじょ」

「……そうだな、ありがとう。……よーし、金剛も来てくれたことだし、もう一踏ん張り頑張ろう！」

「まつたく……お昼、奢つてもらいますからネ」

結局、少し夏の陽気が近づく晴空の下、私と提督は二人、お昼の間中、海岸を掃除したのだった。

